

---

---

# 第 39 回全国高等学校国際教育研究大会 東京大会

「変化する社会に対応する国際教育を目指して」

## 大会報告書

---

---

|     |   |
|-----|---|
| 日 時 | 平成 14 ( 2002 ) 年 8 月 19 日 ( 月 ) 10:00 ~ 17:15<br>8 月 20 日 ( 火 ) 9:00 ~ 12:30  |
| 会 場 | 国際協力事業団 青年海外協力隊広尾訓練研修センター<br>〒 150-0012 東京都渋谷区広尾 4 - 2 - 2 4<br>TEL 03-3400-7717 ( 代表 ) FAX 03-3400-7394  |
| 主 催 | 全国高等学校国際教育研究協議会<br>東京都高等学校国際教育研究協議会<br>関東甲信越静地区高等学校国際教育研究協議会  |
| 後 援 | 外務省・文部科学省・国際協力事業団・国際交流基金・東京都教育委員会・<br>(財)日本国際協力センター・(財)日本ユニセフ協会・(財)国際協力推進協<br>会<br>(社)協力隊を育てる会・青年海外協力隊東京 O B 会・開発教育協議会・<br>(財)日本修学旅行協会・国際教育交流促進協会・(社)日本マレイシア協会・<br>(株)教育家庭新聞社・(社)青年海外協力協会 |
| 協 賛 | 日本航空 ( 株 ) ・ 名鉄観光サービス ( 株 ) ・ ( 株 ) C S S   |

# 目次

|                 |     |
|-----------------|-----|
| 実施要項            | 2   |
| 大会内容            | 6   |
| 1 開会式           | 6   |
| 2 第22回高校生英語弁論大会 | 15  |
| 3 第2回留学生日本語弁論大会 | 27  |
| 4 研究実践発表        | 36  |
| JICA エッセイコンテスト  | 75  |
| 5 講演会           | 76  |
| 6 シンポジウム        | 83  |
| 7 閉会式           | 110 |
| 大会参加者の感想        | 111 |
| 全国事務局長会議        | 114 |
| 東京ジャーミイ見学記      | 130 |
| 大会参加者           | 132 |

## 第 39 回全国高等学校国際教育研究大会 東京大会 要項

### 大会テーマ「変化する社会に対応する国際教育を目指して」

#### 1. 大会趣旨

同時多発テロの発生でスタートした 21 世紀。社会の変化は人々の予測の範囲を越え、国際化の進展は、一面では国内産業の空洞化を進め、不況は長期化している。こうした状況の中、変化する社会に主体的に向き合い、自ら学び、自ら考え、問題解決できる力を身につけた、平和的な国際社会の形成に貢献できる人材の育成が求められている。

この課題に応えるため、本研究会は、これまで国際教育・開発教育について実践的な研究成果を明らかにしてきた。さらに新しく導入される「総合的な学習の時間」についても先導的役割を果たすべく、取り組みを進めている。本研究大会は、変化する社会を生き抜くため、参加する教員と生徒がともに国際教育・開発教育の成果を共有することを目的に開催する。

2. 主催 全国高等学校国際教育研究協議会・東京都高等学校国際教育研究協議会  
関東甲信越静地区高等学校国際教育研究協議会

3. 後援 外務省・文部科学省・国際協力事業団・国際交流基金・東京都教育委員会・  
(財)日本国際協力センター・(財)日本ユニセフ協会・(財)国際協力推進協会・  
(社)協力隊を育てる会・青年海外協力隊東京OB会・開発教育協議会・  
(財)日本修学旅行協会・国際教育交流促進協会・(社)日本マレイシア協会・  
(株)教育家庭新聞社・(社)青年海外協力協会

4. 協賛 日本航空(株)・名鉄観光サービス(株)・(株)CSS

5. 日時 平成 14 (2002) 年 8 月 19 日 (月) 10:00 ~ 17:15  
8 月 20 日 (火) 9:00 ~ 12:30

6. 会場 国際協力事業団 青年海外協力隊広尾訓練研修センター  
〒150-0012 東京都渋谷区広尾 4 - 2 - 2 4  
TEL 03-3400-7717 (代表) FAX 03-3400-7394

#### 7. 参加対象

全国高等学校国際教育研究協議会加盟校の教職員および生徒  
第 22 回高校生英語弁論大会出場生徒および引率者・保護者  
第 2 回留学生日本語弁論大会出場生徒および引率者・保護者  
国際協力・交流・理解・開発教育等に関心のある生徒および保護者

国際教育関係諸機関の職員

国際教育や開発教育にかかわる NGO および NPO の職員・会員等関係者

## 8. 大会日程

### < 第 1 日目 8 月 19 日 (月) >

9:00~10:00 受付

9:30~9:50 高校生英語・日本語弁論大会審査員会議

10:00~10:40 開会式

|          |                                      |
|----------|--------------------------------------|
| 開式のことば   | 大会副会長                                |
| 主催者あいさつ  | 大会会長                                 |
| 来賓あいさつ   | 文部科学省 外務省 国際協力事業団<br>国際交流基金 東京都教育委員会 |
| 来賓紹介     | 大会会長                                 |
| 功労者感謝状贈呈 | 全国会長から代表へ                            |
| 閉式のことば   | 大会副会長                                |
| 諸連絡      | 大会事務局                                |

10:40~10:50 休憩 (別室にて、弁論大会出場生徒の事前説明会)

10:50~12:30 第 22 回高校生英語弁論大会・第 2 回留学生日本語弁論大会  
審査員の紹介および審査要領の説明  
弁論発表

12:30~13:30 昼食 (別室にて、弁論大会の審査、選考)

13:30~15:00 研究実践発表

- a, 多様な価値観と問題解決型学習 (スタディツアーの実践)  
東京都立芝商業高等学校 竹山哲司
- b, 小・中・高校一貫教育における国際教育の実践  
啓明学園 (東京) 久保敦、関根真理
- c, 沖縄および韓国修学旅行における「国際」理解と「異文化」理  
解の意義に関する一考察 神奈川県立白山高等学校 生地陽

15:00~15:10 休憩

15:10~15:40 弁論大会の講評・表彰式

15:40~15:50 JICA エッセイコンテストについて

15:55~17:15 講演会「多難な時代を生きる力と国際教育」

講師: 筑波大学教育学系 門脇厚司教授

17:35～19:35 教育懇談会・情報交換会

<第2日目 8月20日(火)>

8:40～9:00 受付

9:00～10:20 日本人・外国人を交えた生徒参加型のシンポジウム

「世界から見た日本の学校・教育」

パネリスト：トルコ・中央アジア文化センターのトルコ人の

ドウィグ・ジヤンジュア氏

日本で子育てをしているトンガ人の山賀ペリンダ氏

東京で料理店を経営しているガーナ人のオディ・サンプルソン氏、他

10:20～10:30 グループ分け、休憩

10:30～12:10 グループ討論

12:10～12:30 閉会式

開式のことば 大会副会長

主催者あいさつ 大会会長

次期開催県あいさつ 熊本県会長

閉式のことば 大会副会長

諸連絡 大会事務局

12:30～13:20 昼食

13:30～14:30 全国事務局長会議

|   |
|---|
| 13:20～ 東京ジャーミイ(代々木上原)の見学(希望者のみ) 交通費等は実費 |
|---|

9. 大会事務局 東京都立芝商業高等学校

東京都高等学校国際教育研究協議会事務局長 竹山哲司

〒105-0022 東京都港区海岸1-8-25

TEL03-3431-0760 FAX03-3435-0240

ホームページ <http://www.kokusaiken.com>

電子メール [webinfo@kokusaiken.com](mailto:webinfo@kokusaiken.com)

## 10. 大会役員

|        |      |   |
|--------|------|---|
| 大会会長   | 上松信義 | 全国高等学校国際教育研究協議会会長<br>東京都高等学校国際教育研究協議会会長<br>(東京都立農産高等学校長)        |
| 大会副会長  | 堤周次郎 | 全国高等学校国際教育研究協議会副会長<br>熊本県高等学校国際教育研究協議会会長<br>(熊本県立玉名高等学校長)       |
|        | 野村 武 | 全国高等学校国際教育研究協議会副会長<br>神奈川県高等学校国際教育研究協議会会長<br>(神奈川県立白山高等学校長)     |
|        | 豊田岩男 | 全国高等学校国際教育研究協議会副会長<br>東京都高等学校国際教育研究協議会副会長<br>(東京都立成瀬高等学校長)      |
| 大会運営理事 | 石川千尋 | 東京都高等学校国際教育研究協議会理事<br>(東京都立芝商業高等学校長)                            |
|        | 佐藤公作 | 東京都高等学校国際教育研究協議会理事<br>(東京都立富士森高等学校長)                            |
|        | 塩崎 勉 | 東京都高等学校国際教育研究協議会理事<br>(東京都立水元高等学校長)                             |
|        | 長谷川賢 | 東京都高等学校国際教育研究協議会理事<br>(東京都立南野高等学校長)                             |
| 大会運営委員 | 斉藤 宏 | 全国高等学校国際教育研究協議会事務局長<br>(東京都立篠崎高等学校教諭)                           |
|        | 入江祥史 | 全国高等学校国際教育研究協議会副事務局長<br>(文京学院大学女子高等学校教諭)                        |
|        | 女屋隆充 | 全国高等学校国際教育研究協議会副事務局長<br>(東京都立八王子高陵高等学校教諭)                       |
|        | 庄司養昌 | 全国高等学校国際教育研究協議会副事務局長<br>(東京都立足立高等学校教諭)                          |
| 大会事務局長 | 竹山哲司 | 東京都高等学校国際教育研究協議会事務局長<br>全国高等学校国際教育研究協議会副事務局長<br>(東京都立芝商業高等学校教諭) |

# 大会内容

## 1 開会式

### (1) 開式の言葉

大会副会長 東京都立成瀬高等学校長 豊田 岩 男

写真1

みなさん、お早うございます。副会長の豊田です。本日は、このように台風13号が関東地方に接近して、お足元の非常に悪いところ、パラオ共和国臨時代理大使のピーター・アデルバイ様をはじめ多くの皆様のご参加をいただきまして、本大会を主催する者として、大変うれしく思っております。

私は昨日まで一週間程、中国の東北地方をまわってきました。遼寧省・黒竜江省・吉林省の東北三省ですが、そこで見たことは、こちらでいつも本などで見ているものと随分違うなということとして、一番北の黒竜江省という省があるのですが、そこにハルビンという街があります。みなさんもお存じかと思いますが、その南の省が、吉林省、ここには長春という大きな街があります。こういった中国の北の方の街は、いったいどんな状況かなと、いろいろ想像していたのですが、実際に行ってみますと、もう、ハルビンという街ですら高層の建物が建ち並び、道路にはたくさんの自動車があふれています。このようになってきますと、中国でも非常に大きく変わってきます。さらに、町の中心部を歩いている若い女性の方々などは、東京の新宿や渋谷に来られて歩いている日本人と区別がつかないくらいの服装をして歩いていました。中国も大きく変わりつつあるわけです。中国をはじめとして、多くの国々に日本は開発援助などいろいろな付き合い方をしているわけですが、特に21世紀に入りまして世界は大きく動いているなど感じるわけです。そういう中で、国際教育・開発教育への期待は、益々大きくなってきています。本大会が、内容のある充実したものになることを祈念いたしまして、開会の挨拶と致します。

### (2) 主催者挨拶

#### 1) 大会会長

写真2

東京都立農産高等学校長 上松 信義  
お早うございます。第39回全国高等学校国際教育研究大会東京大会の開催にあたりまして、主催者を代表いたしましてひとこと挨拶申し上げます。本日は非常に悪天候の中、ご参加いただきましてまことに有り難うございます。また、外務省・文部科学省をはじめ関係各機関より、多数のご来賓にご臨席をいただき誠にありがとうございます。そして、今大会では、この研究会では初めてのことと

と思いますが、パラオ大使館よりピーター・アデルバイ臨時代理大使のご臨席をいただきました。ありがとうございます。また、お隣にいらっしゃいます川崎恵一商務官と、昨年、お話しする機会がございまして、「パラオという国は台風を輸出する国なんです」というお話をいただきました。この話から、太平洋上の大体どの辺にパラオがあるかということが、イメージできるわけです。このパラオも、先頃、台風に見舞われて大変大きな被害を受けたと聞いております。また、昨今、報道されますところでは、干ばつと豪雨がいろいろな地域で集中的に起こっています。東ヨーロッパでの洪水、中国やインドの方でも洪水、アメリカやオーストラリアでは干ばつが起きています。アメリカの49%がひどい干ばつで、もうハリケーンを待つしかない。もし、パラオで台風をコントロールする技術を開発されたら、世界中に非常に貢献するのかなと思ったりします。とにかく当会にとって、非常に名誉なことと受け止めております。また、今大会を開催するにあたりまして、大会のテーマを変化する社会に対応する国際教育を目指すということで掲げさせていただきました。ただ文字だけに終わらないようにということで、従来この会は教師中心の会でありましたが、多くの生徒の皆さんに参加していただいております。この後すぐに開催される弁論大会もそうですが、教師・生徒がともに考える会になればいいと思っております。この会の在り方も、名前に「高等学校」とついておりますが、国際的なことを考える場合には、いろいろと枠組みをはずして行く必要があると思っております。中高一貫教育や高大連携など、高等学校との仕切をはずす流れがあります。その意味では、この組織も高等学校にこだわらないで中学や小学校の生徒たちも入ってきた方が良くのかなと、枠をはずすことでワクワクするような試みができればいいなと思っております。今日明日と限られた時間ではありますが、実りある会になりますようお願い申し上げます。

### (3) 来賓挨拶

#### 1) パラオ共和国

パラオ共和国臨時代理大使 ピーター・アデルバイ  
日本語通訳 川崎 恵 一

写真3

みなさん、お早うございます。パラオ国民およびパラオ政府を代表しまして、日本の国民の皆様・今日お集まりの皆様に対しまして、パラオへの今までのご助力・フレンドシップ、誠にありがとうございます。そしてさらに私どもパラオ大使館を代表しまして、今日、このような席にお招きいただきましてありがとうございます。竹山先生、この度は私どもをお招きいただきましてありがとうございます。私は、今日の皆様のお集まりが全国の先生方

のお集まりだと伺っております。私たちパラオでも、学校の先生のことを「センセイ」と呼びます。今日お集まりの皆様が、今後、パラオとの友好の親善もしくは文化の中心になる方々と私どもは理解しております。本来であれば皆様のお一人お一人と十分お時間を尽くしお話をしたいのですが、それだけの時間もありませんので、誠に失礼ではありますが、こちらで挨拶させていただきます。ご存じかと思われませんが、戦前・戦中までパラオはリ

トル東京と呼ばれたほどで、南洋庁が置かれた時期もございました。そしてその期間にきちっとした学校教育というものを教えて下さったのは、日本の皆様です。その時には、約9万人の日本人の方が住まわれておりまして、当然それは、パラオ人よりも多い人口でした。そのような歴史もあり、私どもパラオ人は、日本の方々・文化に対して非常に思い入れがあります。私が理解しておりますところによりまして、本日は全国からの学校の先生方、そしてたくさんの組織の方々、こちらにお集まりと思います。是非、この場をお借りして、皆様にパラオにいらして頂くことをお勧めいたします。また、その際に、私ども大使館の助けが必要であれば、是非遠慮なく申し出て下さい。そして最後になりましたが、今日お見えになっている生徒の皆様、パラオの学生を代表いたしまして、皆様に「よろしく」と伝えたいと思います。さらに最後になりましたが、皆様とのエクステンジプログラムをすすめていただきたいと考えておりますので、今後ともよろしくお願い申し上げます。実は、私の父も学校の先生をしておりまして、皆様には非常に親しい思いがあります。再度、皆様よろしくご願ひいたします。どうもありがとうございました。

## 2) 外務省

経済協力局民間援助支援室室長 小畑 正比呂

写真4

みなさん、おはようございます。本日は、第39回全国高等学校国際教育研究大会東京大会おめでとうございます。ただいまご紹介に預かりました外務省経済協力局民間援助支援室の小畑でございます。外務省につきましては、最近、みなさん、もう、いろいろテレビラジオ等でよくご存じだと思います。経済協力局といいますのは、困っている国のほか開発途上国と呼んでおりますけれどもそういう

国々に経済協力あるいは技術協力を担当させていただいている局でございます。その中で、民間援助支援といいますのは、政府と政府の経済協力あるいは技術協力ではなくて、みなさん方ボランティアとかあるいは日本のNGOの方々、海外で困っている方々を支援される際にお手伝いすることを仕事にしております。先日仕事の関係で、フィリピン・ベトナム・カンボジア・タイに出張して参りました。そこで、非常に感激した話がありますので、ひとつ披露させていただきたいと思います。タイの首都バンコクは、人口が600万人以上とされています。その中で100万人以上の方がスラムに住んでいます。それで、600万のうち100万人以上ですから、5人に1人以上がスラムに住んでいる。東京で言いますと「帝国ホテルの裏」あたりにも、つまり、バンコクの中心街にも大きなスラムがございます、そこに1万人近い人たちがそのスラムに住んでいる。そのスラムで、ある日本のNGOがかなり前からそのスラムの学校に行けない子供達のために保育園や図書館を作りまして、図書館には日本の絵本だけではなくてタイのあるいは世界中の絵本をタイ語に翻訳して書蔵しています。このスラムに住んでいるある少女が、その保育園に通っておりまして帰りには欠かさず図書館に寄って絵本を次から次へと読んでいたそうです。世界中の本を読み終わって、その少女は非常に勉強が好きになりまして、一生懸命勉強する。ついには、バンコク、タイで最も難しいといわれるチュラロンコン大学にト

ップで入学しました。その少女は、もちろん、大学に入るに際しては日本のNGOの方々あるいはボランティアの方々の協力があって入れたわけですが、この少女は大学でもトップの成績で、ついにはタイの外交官になって現在はロシア語を勉強している。ちなみにこのバンコクのスラムには、マリナーズの「大魔人」こと佐々木選手も、毎年、少しずつ協力されているそうです。私たちが訪問した時は、100人近い子供たちが、そこで文字や歌を習い、あるいは絵を描いていましたけれども、本当に目を輝かせて勉強している。そういう感激を受けました。今日、僕が、是非ひとつ皆さんにお話ししたいのは、皆さん方も8月16日の読売新聞の朝刊をお読みになった方もおられると思いますが、現在世界人口約60億と言われておりますが、そのうちの12億近い人たちが、1日1\$以下の生活をしております。ちなみに日本は、年間の一人あたりの国民所得が36000\$以上ですから、1日1人あたり100\$の生活をしている。さらに、その新聞にも出ておりましたけれども、1日、3万人の5歳以下の子供たちが、本来なら治る病気でありながら治療を受けられずに亡くなっていつている。あるいは、途上国の子供たちで中学校に行けない子供たちが、途上国の50%以上である。こういう現実が一方にあって、まあもちろん、人間の幸せとか豊かさは所得階層でははかれないとは思いますが、皆さん方が国際教育を勉強される中で、是非一生懸命勉強していただいて、貧しい人たちや困っている人たちを思いやる・思いやられる社会にしていって、僕らはもうかなりの歳でこれからできることは限られていると思いますけれども、これから社会に出ていく皆さん方には是非こういう社会を作っていただきたいと思います。どうもありがとうございました。

### 3) 文部科学省

教科調査官 大杉 昭英

写真5

皆さんおはようございます。今日は、台風の下での全国大会ということで、先ほどから蝉の鳴き声がしたり、雨が時折激しくなったり止んだり、非常に日常とはちがう中での研究大会がおこなわれるということで、記憶に残る大会になるのではないかと思います。本年度より、小学校・中学校では、新しい授業で新しい学校づくりが始まっております。これは、指導要領が変わったことによるわけですが、今回の指導要領は4つの柱から

つくられております。豊かな人間性や社会性、国際社会に生きる日本人としての自覚を育成すること。自ら学び・自ら考える力をつけること。ゆとりのある教育活動を展開する中で基礎・基本を確実に定着して個性を活かす教育を充実すること。各学校が創意工夫を活かし特色ある教育・特色ある学校づくりを進めること。こういった4つの柱によって改善を図っていこうということでつくられたもので、この中で授業をつくっていくにあたっていくつか課題があると考えられます。そのひとつが国際化への対応です。学校の中では国際理解教育として行われているものです。これは、私たちがこの地球上で異なる文化の人々と共に生きているということが前提になっていることを自覚して、そこでまず自分たちとは異なる文化を理解し、そして共に生きているという態度を身につけること

が必要となるということが挙げられる。これをどう解釈していくか、課題解決していくかということなんですけれども、これは、まず自分自身を知ること、そして他の文化を理解すること、この2つの理解の上に立って、それをつなぐコミュニケーション能力を養うということが必要です。私は、広島生まれで、広島から今の仕事に入るまでは、1回も広島を出たことがなかった。そうすると、広島で食べているうどんが全国共通のものだと思っていたのですけれども、関東に来ますとつゆがこの演台の色のように非常に黒いので吃驚した。自分の理解つまり私たちが食べていたうどんとこのうどんは、麺は一緒だけれども何故つゆがこんなに違うのか、という話題で関東の人と話をします。何故だろうとお互いに考える。そういった「自己理解」・「他者理解」それをつなぐコミュニケーション能力が、非常に大切になる。このような学習は、学校では各教科等で行われることになりまされども、とりわけ今回、総合的な学習の時間ということに大きな期待がかかっている。これは、自分たちで課題を見つける・考えるという主体的な学習が求められているからです。机に向かって知識を得るだけではなくて、実際に体験し、課題を見出して協力し、解決していくということが重要になってくる。今日、グローバル化が進む中で、貧困・平和・人権など人類全体の共通の課題があります。われわれが、共に生きていくために解決していかなければならない課題について、われわれとしてどうしたらよいのかを考えていくような授業が行える。このような授業が、これからの学校の中で非常に多く見られるようになっていくものと思っています。そうした中で、本研究協議会は、高等学校において国際理解と国際協調の精神を涵養し、国際社会の中で積極的に行動できる有為な人材の育成を目指す国際教育の研究とその実践の推進を図るということを目的として、これまで活動が行われていると聞いております。今回は、39回目ということで非常に長い間の蓄積がある。こうした蓄積が新しい授業の創造に繋がると考えておりますし、本協議会では、生徒の皆さんが積極的に参加されていると聞いております。これから、明日までの本研究大会が旗になって、新しい日本の授業をリードしていただけるということを期待しております。

#### 4) 国際協力事業団

写真 6

東京国際センター特任参事 佐々木 豊  
皆さんお早うございます。ただ今、ご紹介に預かりました国際協力事業団東京国際センターの佐々木でございます。本日は、第39回全国高等学校国際教育研究大会東京大会にお招きをいただきまして、誠にありがとうございます。国際協力事業団を代表いたしまして、一言、御礼とご挨拶を申し上げます。全国高等学校国際教育研究大会が今年で39回を迎えられるということにつきまして、年月の流れは早いものだと思感させられます。こ

こで皆様に申し上げるまでもなく、全国の高等学校国際教育研究協議会と国際協力事業団との関係は、長くかつ良好なものでありました。振り返ってみますと、貴研究協議会と当事業団との関係は、海外移住事業団の頃からのものであり、当時は海外移住をされた日本

人の皆様に対する支援について、当事業団は貴研究協議会から多大なご支援を受けて参りました。私自身も海外移住事業団に籍を置いた者として、深く感謝申し上げます。その後、移住事業団が国際協力事業団に発展解消されていった歴史の中でも貴研究協議会と当事業団との関係は、次第に形を変えながら益々深まって参りました。当事業団が、貴研究協議会へのご助力を経て実施している事業は、中学生・高校生エッセイコンテストや教師海外研修など国際協力に対する理解を深めるために、重要な役割を果たしてきたものがあります。これらの事業は、今日の総合的な学習の時間の本格導入に際しまして国際理解教育・開発教育が教育現場においてにわかに脚光を浴びようになる以前から着実に回を重ねてきており、今後も更に重要性を増すものであることは想像に難くありません。これら事業が今日まで発展的に継続してきたということは、貴研究協議会の連携姿勢に基づく温かなご支援があったためであると感謝申し上げます。さて、今日の国際理解教育・開発教育をめぐる状況ですが、社会状況の変化に伴ってますます教育現場における重要度が高まって来ていると理解しております。例を挙げますと、先に述べました総合的な学習の時間の導入等により、教育現場においては外部からの人的物的なりソースをも活用して、生徒に自ら考えさせる教育課程を検討する必要に迫られているのではないかと考えます。そのことは、JICAの国内機関によりますとサーモンキャンペーンの講師派遣件数・東京国際センター訪問の件数・各地における指導者研修への教師の参加数などから、実感されるものであります。他方で、ODAの実務機関としてのJICAにも、透明で国民に開かれたODA・日本の国際協力への正しい理解の育成という観点から、教育現場に対して積極的に広報活動・支援活動を行うことが望まれています。従来は、開発途上国への技術協力を実施するJICAとしては広く国民の理解を促すことは容易に取り組める課題ではありませんでした。その視点も充分であるとは言い難いものでもありました。しかしながら、今年度より、国民参加協力推進費の本格導入により、JICA事業は海外での事業と同程度に国内事業における事業を充実させていくことが方針として打ち出されました。この新しい予算項目は、教育現場との連携の強化・地方自治体との連携事業・青年海外協力隊の広報活動・NGOとの連携事業など幅広く国内の各団体・機関との事業を推進するために活用されるものであります。以上のような、教育現場およびODA・JICAを取り巻く社会的な状況と需要により、今後は貴研究協議会と当事業団との関係も新たな段階へと発展的に変化していくものであると考え、それがどのようなものとなっていくかについては、教育の専門性を有する貴研究協議会と、日本の国際協力についての情報を蓄積してきた当事業団との間で、互いに協力をしながら創造していくものであります。そしてその協力の中から、高校生ひいては国民全体に対して、国際協力に対する理解を深めていけるものと信じております。従いまして、貴研究協議会と当事業団との関係は、単に両者の間のものに留まらず、非常に重要なものであると理解しております。我々の責任は、重大であると思えます。このような重大な責務を果たすため、今後とも両者の良好な関係と私ども国際協力事業団に対しましての貴研究協議会のご支援をお願いいたします。最後となりますが、貴研究協議会の今後のますますの御発展とご参集の皆様のご健勝を祈念いたしまして、ご挨拶とさせていただきます。

## 5) 国際交流基金

写真 7

企画部長・国際相談室長 坂戸勝  
ただ今ご紹介いただきました、国際交流基金の坂戸です。第39回全国高等学校国際教育研究大会の開催を心からお喜び申し上げます。また、今回の大会の開催に際して、ご尽力されました関係者の皆様のご熱意に対し、心から敬意を表します。

国際交流基金は、海外との文化交流事業を通じて、国際相互理解を促進することを目的として1972年に設立されました。海外での文化交流事業は、学者・芸術家の国際友好

親善の交流会、海外での日本研究や日本語教育の振興、芸術文化の催し、出版、映像メディアなど幅広い分野に及んでいます。私どもの担当は、主として海外における日本への理解を促進することを中心として、日本国内での国際教育の活動と相まって、本当の意味での国際交流になるものと思います。文化交流も、以前は異文化との交流を通じての相互理解ということがありました。近年は、環境問題などの世界的な課題、高齢化社会などの共通の問題の解決に向けて共同で取り組むといった様な事業が、増えてきました。また、異文化交流の面でも、交流を通じて新たな芸術や文化を創り出そうとする試みも数多くなされています。一昨年、私どもが日本国内で国際交流活動を実施する約8000の団体を対象にこの実態調査を行いました。その結果、日本国内の国際交流団体は、人口分布にほぼ比例して、全国各地に広く存在しています。国際交流への取り組みが、日本全国で大きな広がりをもって行われていることが分かりました。また、事業運営に関しては、生活文化や国際理解教育・外国教育分野を中心とするものが多く、地域で増加する外国人居住者との交流、言わばタウン化共生の構図が増えていることも分かりました。このように、国際交流の活動が深化するに伴いお互いの理解を深めるため、摩擦が生じることもあることと思います。しかし、たとえ摩擦が生じても、国際相互理解の意義を正しく理解し、困難を克服できるような人材を育成していくことがこれからの日本あるいは世界のために極めて重要だと考えます。こうした意味で若い世代の人々の眼を開いていく国際教育の活動の意味は、大変大きなものになってきたと言えます。今回の大会が、国際教育のさらなる発展につながりますことと思います。ありがとうございました。

## 6) 東京都教育委員会

写真 8

高等学校教育指導課 市川治郎  
本日、第39回全国高等学校国際教育研究大会が開催されるにあたり、東京都教育委員会を代表して一言ご挨拶を申し上げます。はじめに、本研究大会が国際理解教育の充実・振興のために開催され今回で39回を迎えたことに、心からお祝いを申し上げます。また、各地からお集まりの方々には、高等学校における国際理解教育の改善・充実にご尽力いた

だいていることに対しまして深く敬意を表します。さて、東京都教育委員会では、今年度の基本方針において、グローバル化と情報化・技術革命が進む状況にあって、国際社会に生き、社会の変化に対応できる様、子供達の個性と創造力を伸ばす教育を重視すると共に、国際社会に生きる日本人を育成する教育を推進するとしております。また、日本や世界の文化・伝統に触れる機会の充実を図り郷土に対する愛着や誇りを学ぶのと共に、多様な文化に対する理解を深め、世界の中の日本人としてのアイデンティティを育てる教育を推進するということを挙げております。この基本方針の下に国際理解に関する様々な事業を行っているところであります。本日から2日間に渡り、国際理解教育を取り巻く状況の変化に対応した様々な研究の成果についてご発表がなされると伺っておりますが、本研究大会の成果が、今後の国際理解教育に多くの示唆を与えて下さるものと期待をしております。最後になりましたが、本研究大会のご成功と国際理解教育のますますのご発展を心から祈念申し上げます、挨拶といたします。

(東京都教育庁指導部高等学校教育指導課長 賀澤 恵二 代理 市川 治郎)

## 7) 協力隊を育てる会

常務理事 水野 富士夫

写真 9

私は、社団法人協力隊を育てる会の開発教育委員長をしております。毎年、全国集会を各地で開催しております、昨年は、つくばで全国集会をやりまして、この協議会の斉藤事務局長にもパネリストとしてご協力をいただいたわけでありました。私は、協力隊を育てる会の開発や振興の立場からもありますけれども、もうひとつ私が今日ここに伺いましたのは、個人的に言いましても大変この組織が

懐かしいからであります。私は、先ほどJICAの方が言われましたが、今のJICAの前身のひとつであります海外移住事業団が昭和38年に発足をいたしました折りに、それまで移住地問題・日系人問題というのはもっぱら新聞やラジオで報道されていただけであったわけですが、もうテレビの時代であるから移住地の問題も日系人の問題もテレビに解放しようという発想から、当時、私がプロデューサーをしていました関係でご下命があり、それ以来の貴事業団との関わりが展開されたわけです。今日、今、NHKがやっております連続テレビ小説さくらのお祖父さんお祖母さんにあたる方々の生きた年代でもあるわけです。そんなわけでNGOとの関わりが深くなってきたわけですが、この協議会というのは元々若者たちに海外移住という主旨もありましたが、世界に羽ばたくような人材を創ろうという発想の下に、結成されたグループでありました。当時、私は、役所では高海協といったような記憶がございます。それがありまして、今回の39回の回に繋がったかと思えます。そんな関係で、その当時の高海協の加盟の学校に呼ばれて、当時のいろいろのお話などをさせてもらいました記憶があります。で、時代が変わりまして、移住そのものは衰退の一途をたどりまして、代わりまして海外青年協力隊の設立の希望が高まる時代になりまして、皆様方の育成する若者の対象年代という問題から、青年海外協力隊をはじめとする広範な世界志向の青年の育成というものになって参りましたけれども、今、

青年海外協力隊員の事務局は青年の名が付いておりますが、シニアのボランティアの組織もやっておりますと同時に、移住民より求められる、日系社会シニアボランティアの責任も持っている組織でございます。私どもは、協力隊を育てる会の名の下に、これからも支援を続けていくつもりでありますけれども、ここにいる先生方も経緯をご理解のうえ、協力隊の数から言えば日系社会シニアボランティアの数は大変少数ではございますけれども、彼らへのご支援をよろしくお願いを致しまして挨拶と致します。

(4) 功労者感謝状贈呈

感謝状贈呈者一覧(敬称略・順不同)

| ご芳名                | 年月                                    | 功労内容  | 都道府県 | 学校         | 備考            |
|--------------------|---------------------------------------|---|------|------------|---------------|
| やたべ まさあき<br>矢田部 正照 | H13~<br>H9<br>~H13<br>H8<br>H5<br>~H6 | 全国高等学校国際教育研究協議会顧問<br>全国高等学校国際教育研究協議会会長<br>全国高等学校国際教育研究協議会副会長<br>全国高等学校国際教育研究協議会事務局長 | 東京   | 東京都立農産高等学校 | 13年3月<br>校長退職 |
| かじわら まさし<br>梶原 将二  | H14~<br>H12<br>~H14<br>H10<br>~H12    | 千葉県高等学校教育研究会国際教育研究部会顧問<br>千葉県高等学校教育研究会国際教育研究部会会長<br>千葉県高等学校教育研究会国際教育研究部会副会長         | 千葉   | 千葉県立土気高等学校 | 校長            |

写真10

写真11

感謝状贈呈

(5) 閉式の言葉 大会副会長 豊田 岩 男

それでは、これをもちまして、今回が内容のある充実した東京大会になることを祈念いたしまして開会式を終わりたいと思います。

## 2 第22回高校生英語弁論大会

### 1. 目的

21世紀を担う高校生が、国際理解・国際交流・国際協力・国際ボランティア活動などに関する主張を、英語で発表することにより、国際教育への興味・関心を高めると共に、国際感覚豊かな生徒の育成を目指す。

2. 日時 平成14年8月19日(月)10:50~15:40

3. 会場 青年海外協力隊 広尾訓練研修センター(国際教育研究大会と同じ)

### 4. 次第

- (1) 開会のことば
- (2) 審査委員紹介および審査要領説明
- (3) 弁論発表
- (4) 審査委員会議
- (5) 審査員の講評および表彰式
- (6) 閉会のことば

### 5. 出場者

各ブロックの代表1名および東京都の代表1名、計8名

ただし、代表を出さなかったブロックがあった場合は、開催ブロックより補充する。

### 6. 参加資格

- (1) 各都道府県高等学校国際教育研究協議会加盟校の生徒
- (2) 各都道府県・各ブロックにおける選考会等を経て選出された生徒

### 7. 大会規定

- (1) 弁論内容...国際理解・国際交流・国際協力・国際ボランティア活動等に関するもの。演題は自由。高校生としての主張を含み、未発表原稿であること。
- (2) 弁論時間...5分以内とする。(時間超過は減点とする。)
- (3) 審査内容...論旨(50点)・態度(20点)・音声(30点)を総合して審査する。
- (4) 表彰...外務大臣賞(1名)  
文部科学大臣奨励賞(1名)  
国際協力事業団総裁賞(1名)  
国際交流基金理事長賞(1名)  
財団法人日本国際協力センター理事長賞(1名)  
全国高等学校国際教育研究協議会会長賞(若干名)

## 8. 審査委員

|                   |                          |
|-------------------|--------------------------|
| 小 畑 正比呂           | 外務省経済協力民間援助支援室長          |
| 大 杉 昭 英           | 文部科学省教科調査官               |
| 竹 内 智 子           | 国際協力事業団国内事業部国内連携促進課長代理   |
| 坂 戸 勝             | 国際交流基金企画部長               |
| 小田切 清 治           | 日本国際協力センター広報部広報企画課長      |
| 市 川 治 郎           | 東京都教育委員会高等学校教育指導課指導主事    |
| Alistair Campbell | 東京都教育委員会（東京都立福生高等学校 ALT） |

## 9. 出場者

| 学校名           | 学年 | 氏名      | 弁論のテーマ                                     |
|---------------|----|---------|--|
| 八戸聖ウルスラ学院高等学校 | 3年 | 堀 口 文 乃 | How Happy We Are                           |
| 高知県立高知南高等学校   | 3年 | 角 田 理 佳 | We are one                                 |
| 佐賀県立高志館高等学校   | 3年 | 大 石 聖 子 | Why I Like Japanese                        |
| 静岡県立三島北高等学校   | 3年 | 広 田 愛   | What I learned in SAIPAN                   |
| 島根県松江北高等学校    | 1年 | 増 本 歩 美 | Differences Are But Skin Deep              |
| 東京都立成瀬高等学校    | 3年 | 荒 井 彩 奈 | Raising Children In Our Community          |
| 栃木県立石橋高等学校    | 3年 | 中 村 こと葉 | I found my Japanese identity in Australia  |
| 福井県立福井商業高等学校  | 3年 | 田 中 ゆ か | Let's Stand On Our Own Feet                |
| 山梨県立日川高等学校    | 3年 | 田 村 麻希子 | Why do Japanese people close their hearts? |

## How Happy We Are....

青森県八戸聖ウルスラ学院高等学校 3年 堀口 文乃

Summer reminds me of the heat and dust in Thailand. It was 5 years ago when I took a trip to the country with my family. The smell of coconuts and the friendly people... The trip was fun. However, the trip questioned me about my way of life.

My family got to the Bangkok Airport and was walking toward the exit to take a taxi. In spite of my excitement, the view before me left me stunned. There were more than 30 children out there. Some of them were barefoot, wearing only pants. They were not smiling, just staring at us. On the street, a young boy, who looked the same age as I was, came up to us and tried to sell some flowers. He sounded so desperate. My father said, "No, no thank you," but he kept following us. I tried not to look at him and held my mother's hand tightly.

I was only twelve, but what I saw in Thailand has never left my mind. Why does he have to work? Why such a big difference between his life and mine?

Asking myself what I can do for such children, I became a member of JUMBO International Club of my high school. This year we are studying about Sri Lanka. We invite exchange students from Sri Lanka to our club to know more about them, and also we are planning to make Sri Lanka curry for the school festival in September. The sales of curry will be part of scholarship for children in developing countries. It might be a small action for the serious problems in the world. But I believe what you do really affects people in other countries.

I used to complain about what I didn't have. Yet, now if you were to ask me whether I am happy or not, I'd say, "Of course, I am." I have families and opportunities to be educated. I've learned our lives are related to one another, so we need to support each other. Moreover, I want to believe that I can play some role to make a better change in the world. Look at yourself. Think about what you have and what you can do. Don't you feel how happy you are?

<日本語要約>

家族旅行で行ったタイで、子どもたちの置かれている現状を目の当たりにし、自分自身がどんなにか恵まれた環境にいるのかを感謝できるようになった。そればかりでなく、そういった子どもたちのために、何かできることを自分なりに実践し始めた。世界中の様々な人々とつながりあい、支えあえる必要性に気づけた自分は本当に幸せだと思う。

Bonjour, Mesdames et Messieurs.

What comes to mind when you hear me speak French? Do you feel that there is a barrier between us because of the difference in language?

I felt a little like this until my school hosted a group of exchange students from Ozenne high school in Toulouse, France. It was the first time for French students to come to Kochi, so before they arrived the Kochi newspaper reported about Ozenne students many times. These reports made me worried about being a host, because the newspaper reported that French students were different from Japanese students. For example, French students are allowed to smoke at school, and before classes, there are many students who kiss and hug each other. I wondered how I could be part of a good host family to such a different person. I was very worried about it.

At last, the day came when we had to pick up my host sister Camille. On the first day, we served her Japanese food, and she fought desperately with chopsticks. It was her first experience with chopsticks, so she dropped food many times. I was very happy that she tried so hard to fit in. This meant she worked hard to adapt to the Japanese customs and lifestyle.

One day, I learned Judo from Camille. She has learned Judo for six years. I told her that I learn Judo at school, but I am really bad at it. I was amazed when she taught me to do a tough Judo technique called Ukemi. I became conscious that I was learning about Japan instead of teaching someone else about it. Another example of this was the day we decided to wear Kimonos. It was the first time I had ever worn one. When I told her, she said "Really?" She was so surprised that I, a Japanese girl had never worn a Kimono before.

Until then, I wasn't too interested in my own culture. Most young people like myself aren't too concerned about it and don't know many of their own traditions. Because young people long for American culture. But if we don't understand our own culture well, we can't discover similarities and different points between other cultures. I would like to understand Japanese culture more, and at the same time I would like to learn about another culture. I was able to do this when my family and I spent 3 weeks with Camille.

In many respects, I thought French people were very different from Japanese. But sometimes, Camille seemed so similar to me. We laughed at the same things. We felt the same feelings and shared the same opinions. I learned many things from her; Japanese culture and French culture at the same time. From my experiences with Camille, I realized that although there may be borders dividing many countries, when these are broken by cross cultural understanding, the world will be a better place. We are all human beings. We get angry, we cry, and we laugh. We are one.

< 日本語要約 >

フランスの留学生をホストすることにより、フランスの文化を学ぶと同時に今まで気にとめなかった日本文化の良さに気が付いた。外国の文化に憧れている若者が多いが、自国の文化を十分に知った上でないと本当の異文化理解につながっていかないと思う。世界には様々な国があるが、真の異文化理解によって国境という壁が壊れた時、世界はより近い存在になるだろう。そして手を取り合い私たちは一つになれるだろう。

## Why I Like Japanese

佐賀県立高志館高等学校 3年 大石 聖子

Hello everyone! My name is Shoko Oishi. I am a third year student from Koshikan Senior High School in Saga prefecture.

I have been studying English for 7 years and Korean for two. However, recently I have again become interested in my own language. I have realized that, like English, Japanese has many ways of expressing things that other languages may not have.

For example, to say a simple “hello”, many different Japanese terms can be used. Among them are, “otsumaresama”, “gokurousama”, “itterasshai”, “okaerinasai”, and the list goes on! All of these expressions basically mean the same thing, but we use them at different times and for specific situations.

By contrast, in some languages and cultures they have only one or two commonly used expressions of greeting. Therefore one expression is often used in many situations. This of course is very different from the Japanese way. In Japanese each occasion is allotted its own expression. Another example of this flexibility is the assortment of ways we say “thank you”. Among these are “arigato”, “osoreirimasu” and “okagesamade”. As with the expressions of greeting these are used at different times and with slightly different connotations.

The way in which we use our language is a cultural expression. This is true not only for Japanese but for all languages. The Japanese language shows people interesting aspects of our culture. As I have said before, depending on the many small details of the situation, there are usually several different ways to say almost exactly the same thing. For example, the way you would speak with a friend is not the same way you would speak with a teacher or doctor. With these types of people you would speak very polite Japanese. This illustrates how important respect and politeness are to the Japanese as well as the part they play in our culture.

We Japanese should be proud of our culture. It has been passed down for hundreds of years from generation to generation. I want to show everyone what a treasure our language is! Studying Korean and English has taught me the importance of language skills. Learning about their cultures has deepened my appreciation for their languages as well as my own.

I believe that learning different languages, and therefore developing cultural awareness will make our lives richer by encouraging mutual understanding in today’s international society.

Thank you,

God bless you,

And have a wonderful day!

### < 日本語要約 >

英語・韓国語を学んできて、改めて日本語と比較したとき、日本語の持つ叙情豊かな表現方法や日本語そのものが持つ言語の繊細さを痛感した。多くのに人々に「日本語には言葉に関する繊細で微妙な言い回しがあり、無限の可能性を秘めた言語の至宝である」ということを伝えながら他国語も学び、その国分化を理解することは今後私たちの人生を豊にし、国際人としての扉を開く第一歩となるはずだ。

## What I learned in SAIPAN

静岡県立三島北高等学校 3年 広田 愛

Good afternoon ladies and gentleman!

I went to SAIPAN with my family last winter holiday. It was one of the most beautiful places I have ever seen. We loved the clean blue beach and all the plants around the island. I thought the people living in such a beautiful place are so lucky. I really did. We also enjoyed shopping in the town. Most of the signs were written in Chinese or Japanese. The funniest thing was, many restaurants said `The best restaurant in the town` so we couldn't decide which restaurant to go to and we ended up chose to go to a Japanese restaurant. The first day in SAIPAN went by so quickly.

However, I was to learn the true story of the island later.

On the second day, my family and I came to see some scars left by the war. It was when we took a trip on the ship that we saw a Japanese air plane which was hit and had sunk under the water in WW . We also saw a submarine lie quietly in the blue water. I was shocked to see such things in this beautiful beach, very close to where we enjoy marine sports.

On the next day, during the trip around the island, we went to BANZAI cliff where many Japanese women and children leaped to escape from the Americans. There were so many monuments with poems and messages. There were many tanks and cannons and we could find many holes on the rocks that were made by bullets. Our bus guide said that about 10000 natives and private citizens were also killed and the sum of dead people including Japanese and American soldiers added up to more than 60000. The island was all-empty at that time.

After hearing all this sad story of SAIPAN, I still couldn't believe what had happened on the island. The scenery of the island was so beautiful that I couldn't imagine any cruel incidents.

But the fact is that all people who are older than 65 years old can speak Japanese because the Japanese used to control SAIPAN and even had them speak the language.

The bus guide also said that now, the only big income comes from sight seeing on this island. There are 8 million Japanese visits to SAIPAN every year. So most workers need to learn Japanese in order to get jobs. They took us around those scars left by the war. How sad for them to get money from the people who ruined their own island! Every time I heard them speaking Japanese, it reminded me what had happened and it made me very sad.

On the last day in SAIPAN, my mum and I went to the beach near the hotel. We talked with a family who owns a marine sports shop. They were so friendly and didn't seem to hate the Japanese at all. I thought they must be looking at the future, not detesting and not thinking about revenge. I liked them very much.

This month, World Cup was held in Japan and Korea. Both of us have bitter memory to each other's history. We haven't forgot about it. Then how can we make such an event successful? I think the only answer is to forgive each other. It is not only about some limited countries but all countries and all people's lives. I think there are things that can't be forgotten but we should face our future even with people who treated us wrongly. I think during the World Cup, both of us could hold hands together for the same purpose, which is success of this event. And though the World Cup, I now believe that we can look at the future to make a peaceful world together. The monument at the BANZAI cliff said " we must not forget that we are all creatures of one God " I'd like to keep this in my mind and I'd like to be a person who can forgive others.

<日本語主約> 冬休みに家族で訪れたサイパンはとても美しい島でした。しかし私はそこで、第二時世界大戦が残した傷跡を見て驚きの気持ちを隠せませんでした。またその当時日本人に強制的に学ばされたというお年寄りの日本語を聞くのも辛い事でした。けれども島の人々から私が学んだ事は、相手の過去の過ちを許し未来に向かって生きようとする姿勢でした。韓国と日本の間にも悲しい歴史がありますが、今年日韓共催でワールドカップが実現したように、世界中の人たちが手を取り合って明日に向かって行く姿に希望が持てました。

“There the white butterfly disappeared. The monument bore the personal name ‘Akiko’, and an inscription stating that Akiko had died at the age of eighteen. On returning, the young man told his mother of what he had seen in the cemetery. ‘Ah!’ she exclaimed, ‘then it must have been Akiko!’

How do you feel to hear this passage? This story was not written by a Japanese, though the original was Japanese. It was Lafcadio Hearn who wrote this story. He continues to be a famous writer and lived in Matsue about a century ago. The stories are old and the writer is old, but why are they so impressive on my mind now?

Death, diseases, tombs, ghosts, and incarnation of the dead---those unnatural things happen in Hearn’s stories. The white butterfly was another form of Akiko or it was carrying the soul of the girl. These stories have been passed on over the generations. It may not be so astonishing that Japanese people are moved by his stories, but why did Hearn, a foreigner, pay so much attention to fearful folklores?

The other day, I had a chance to meet an Irish woman who works as a staff of the international division of Matsue city. It was a party, and then she taught me how to make Irish coffee and Irish dance, and Irish old stories. How fascinated I was! They have a dark severe winter as we do, and they try to preserve their tradition as we do.

Not only those matters but her character itself changed my picture of Ireland. She was so considerate of what the other person was thinking and understood more than the words could describe. I felt as if I were talking with one of our people. Then I realized the similarity among the three, Hearn, and the Irish woman and me.

A book about Hearn says that he didn’t kill the insects in the house. I often walk looking down on the street in order not to kill small insects. Small living things such as lizards, frogs and worms are dead on the street. I become sad to think that they were once active and alive. Hearn was moved by the idea that every living thing has its soul and spirit. Hearn’s compassion for all the living things makes us impressed. This mutual understanding is an international communication, isn’t it?

Over many years, over a great distance, people can communicate with each other. When you find a foreign book interesting, an international communication is there between the author and you. Behind the differences of our lives, we have the same soil and from there a tree of understanding will grow. An English proverb says “Beauty is but skin deep,” but in my dictionary “Differences are but skin deep.”

<日本語要約>

百年前松江に住んだラフカディオ・ハーン作品は私を感動させる。ある機会に出会ったアイルランドの国際交流員の物事へ感じ方は私とよく似ていると思った。時代も民族も違う私たちの内奥には、すべて生きているものかわいそうと思う共通点がある。国際交流は作品を通して、時代を超えてもおこるのだと思う。

## Raising Children In Our Community

東京都立成瀬高等学校 3年 荒井彩奈

When I was an elementary school student, I lived in the United States for 5 years. After I came back to Japan, I noticed the role of the community in raising children in the US is different from that of Japan, and this is my topic.

Several months ago, a four-year-old girl was brought into the hospital. She was suffering from dehydration. The mother said that she had fallen but it was obvious that she had been burned badly. The hospital reported this to the police and a week later both parents of the girl's were arrested. The investigation revealed they had beaten and kicked their daughter for 12 hours and on top of that they had inflicted burns. The neighbors said they had heard the girl getting abused and had seen her crying several times. I wondered why the neighbors hadn't reported this to the police. Then an incident which happened in the United States occurred to me. One of my friend's mother had to go to the supermarket to buy some groceries. She thought that it would be okay to leave the children by themselves at home for a little while. But when she came back, a police officer was waiting for her. One of her children wouldn't stop crying and the next-door neighbor had called the police. In the United States it is against the law to leave children under the age of 12 unsupervised. Where does this difference come from?

In Japan many people think that each family has its own way of educating their children. Therefore if we hear a child crying, we think it 's none of our concern and never think of calling the police. Even if the police were to come, the parents would say that they are just disciplining their children as they see fit. It appears to be difficult even for the police to pry into family matters. On the other hand, people living in the United States seem to have a closer relationship with their neighbors and have more concern about their children. For example, at Christmas, my friends and I would go to neighbors' houses and sing Christmas carols, and we were welcomed everywhere. It was as if the whole neighborhood had become one big family.

Another difference between the United States and Japan is the law on alcohol. For example, in the US you can't drink alcohol in public unless the can or bottle is fully covered so that children can't see what you're drinking. There aren't vending machines which sell alcohol 24 hours a day. Television commercials cannot even show people drinking alcohol. Also when you buy alcohol, salesclerks don't hesitate to ask for ID. These rules are made in order to provide young people and children in the community with desirable surroundings. Whereas in Japan if you look around you see alcohol vending machines in many places. In parks or even trains, we often see people drinking alcohol. People don't care if minors buy alcoholic drinks from vending machines. Their biggest concern is making money. The community doesn't seem to play any part in educating children.

Raising children is a fundamental and vital role for everyone. It doesn't mean only to give. For example giving them a good education, buying goods or necessities. It means giving children the highest priority. I think it is important that not only parents and teachers but people living in the community give their highest priority to children. It is true America has its own problems, but we can take a leaf out of their book. To conclude my speech today, as being a resident of the United States and Japan, I whole-heartedly feel that we, as Japanese, should make a concerted effort to educate children in our community as our American friends do. <日本語要約> アメリカで小学生時代を過ごし、地域の繋がり、暖かさを感じました。日本に戻って、子供の虐待のニュースを聞き、なぜ地域の人があることに気づけなかったのだろうという思いがしました。お酒の販売にしても大きな違いがあります。日本で、子育てについていろいろ議論されていますが、一つの解決策として地域の人との関わりをもっと強めることが大切ではないでしょうか。

## I found my Japanese identity in Australia

栃木県立石橋高等学校 3年 中村こと葉

I have a question for you today. Are you proud of Japan or not?

Two years ago, I stayed in Australia for a year as an exchange student. I clearly remember a Japanese girl, Erika, who never stopped complaining about Japanese people. Many times, she asked me, "Hey Koto, why are Japanese so shy? They never share their opinion with others. I'm ashamed of being around them!" What would you think if you were in my shoes? As for me, I couldn't stand listening to all her complaints, but I never said anything. Maybe it was because I felt the same way somewhere in my mind.

On the other hand, during that year, I also met a girl from Switzerland, Andy. I met her when we stayed together in a host family. She was only 15. But, the whole night, she talked about her country. She explained how many mountains there are, what happened hundreds of years ago in those mountains, how it influenced their lives and so on. Her story was so interesting and it really touched me to see her eyes shining brightly as she was talking. I stopped to think why she knew so many things about her home country. It was because she was proud of where she was from. I realized I, too, wanted to be proud of my country from the bottom of my heart like Andy. But I stopped to think what I could be proud of about Japan. I'd never really thought about it but somehow I came to be proud of Japan during my year in Australia.

During that year, all the exchange students in South Australia made a trip to Kangaroo Island. I was so looking forward to joining this camp because I was going to be staying in a host family with a Swedish, a French and a Brazilian girl. Our host family took us all around the island and we were absolutely amazed by its dynamic nature. I loved it! However, after one night the students started complaining about being in the countryside. There was no pub, no shopping center and there was no place to get together with other exchange students and so after a short discussion with the host family, they left before they were supposed to and I was left behind. I couldn't understand their behavior! They had no gratitude to the host family. I felt so sorry for them. At the same time, I was proud of myself for having stayed there with them, even though all others suggested leaving. And then, I found a mentality in myself to respect and care for others. I realized I had this attitude in me because of having lived in Japan for many years. That night, they told me that they had had a similar experience before and one Japanese had also stayed behind. Japanese attach great importance to their behavior towards others. If we don't push our opinion on others, it is only because we don't want to bother them. Actually, the lucky thing was that the longer I stayed there the more nature I could see. What's more, the Japanese kindness to care for others may be remembered by some Australians and it'll continue to be. I'm proud of that!

Yes, we can be proud of our country.. Like Andy, we mustn't forget to be patriotic and keep learning about our country, then we can naturally find something to be proud about like I did. Having met Andy and my experience in Kangaroo Island, I would like to insist on being proud of Japan. Why not look on the bright side of the land of the rising sun?

<日本語要約>

留学中のオーストラリアで出会った日本人留学生は日本を批判ばかりしていた。反論できない自分。一方スイス人の留学生は、母国について目を輝かせながら熱く語っていた。彼女をうらやましく思う自分。はたして自分は母国を愛し、誇りに思っているのか疑問を抱く。そんな折、ホームステイの体験を通じて、相手の気持ちを尊重し、思いやるという日本人のすばらしい一面に改めて気づかされる。

## Let's Stand On Our Own Feet

福井県立福井商業高等学校 3年 田中 ゆか

Did you enjoy watching the soccer World Cup held in Korea and Japan this year? How did you like it? I guess all of us were so impressed to see what the Japanese players could achieve. They excited the whole nation in a way I had never experienced before. Hidetoshi Nakata, being interviewed after the Japanese team lost, said, "We did quite a good job. We have grown as a unit and are successful. Now, each of us should learn to be more individual in order to play more beautifully." His simple words were so inspiring to me. We should act with our own thoughts as an individual.

During the World Cup, a large number of foreigners came from all over the world. Many cities in Japan supported them no matter what color their skins were or what language they spoke. While hosting them, we got surprised, upset, and pleased because of their cultures being completely new and unknown to us. First, I saw them as "strange" and I didn't want to talk to them, but when I cheered together with them, I was able to see them as "individuals". Then I was getting interested in them, I wanted to talk to them and be friends with them. I think that accepting new people as "individuals" leads us to have a good friendship.

The other day on the Internet I read a comment written about the World Cup. It said that the World Cup Soccer success is one thing and the Japan-Korea relationship is another. I was so shocked and disappointed, because I believed the World Cup Soccer could enable the two countries to have a better relationship in spite of our sad history. I was too optimistic. In Korea it seemed that there are still many people who hate Japan. However, I've never been to Korea and I've never talked with Korean people either. So actually, I don't really know whether they still hate us or not. What I'm saying is that it is dangerous to believe everything we read or hear. Let's have critical eyes and our own opinions, although we need to have enough background knowledge.

Now, let me have a closer look at what Nakata said, "We have grown as a unit and now, each of us should learn to be more individual in order to play more beautifully." How can we be a unit and an individual at the same time? People in the same group should share each other's individual opinions in order to achieve a common goal. Listening to and respecting others, we can discover new ideas, discuss them and make their own thoughts stronger. This attitude will be sure to foster a sense of team spirit and unity.

In addition, I believe it is necessary for us to do what we think is right as an individual instead of what we are told to do. That was what Nakata wanted to express. That's what the Japanese soccer team needs to do to win, and it also happens to be what we as Japanese people need to do for our future. Each of us should have more individual opinions and be able to act on them. Thus, from the World Cup, I learned how important it is to have one's own sense of value in judging things in our society. I think it will lead Japan not to be a closed country from the world, but to be part of the world.

<日本語要約>

今回のサッカーワールドカップで偉業を成し遂げた日本代表チームに私は大変感動した。ホストをした日本各地の街が海外選手との感動的な交流を経験している姿に心打たれた。世界中からの大勢のサポーターと一緒に熱い応援を送る中で私は世界が一つになるのを感じた。中田選手の言葉：協調性を重んじつつ、一個人として自分の頭で考え行動すべき。これこそが日本のサッカーそして日本人のこれからの成長に不可欠なものだろう。

## "Why do Japanese people close their hearts?"

山梨県立日川高等学校 3年 田村 麻希子

One day in April, I got on the train to Tokyo by myself. I had just begun to relax when the train arrived at a very crowded station. Mobs of jabbering teenagers waited on the platform.

"Oh my God!" I thought, as the doors opened and teens marched towards me. I abandoned my hopes, "Goodbye, my pleasant trip "

Then, a foreigner approached and sat down in front of me. I was surprised to see him, but at the same time, I thought, "I am saved!" The foreigner asked me, "Is this the train for Tokyo?" I answered, "That's right, but you need to change at another station. I'm going to Tokyo, too, Mister." He seemed to be amazed that I spoke English, and he asked me to lead him to Tokyo. I agreed.

I wanted to talk to him more, but once I became silent, I thought, "I don't want to trouble him." He kept silent too; maybe he thought, "This girl doesn't like to talk." Ten minutes, fifteen minutes passed the tension grew as we kept silent and avoided each other's eyes. My anxiety kept building and my heart became strained... "I can't stand it anymore! I want to talk to him! But what should I do? I can't even move a muscle!"

Then, a sentence from a book rushed into my head: "Communication starts with a smile."

Yes, that's it! I looked up and gave him my widest, brightest smile. It must have seemed strange because a while ago I was wearing a sour face. But he smiled back how kind he was! The nervous situation disappeared and we began to talk about our families, hobbies, and the purpose of his trip. He told me that, although he had been in Japan for three days, no one could speak English, so he was often lost and confused by himself. Then he asked me, "Why do Japanese people close their hearts?" I was at a loss for words and I felt driven into a corner. I said, "Japan is an island, so there is no chance to speak English. It is needless, so we never speak it and can't understand English." But while I said this, I thought, "I love English very much. Why had I hesitated to talk to him?" It seems that the Japanese lack something else, not only the skill of speaking English.

During the silence, I had been tortured by inner conflict. I wanted to talk to him, but I was afraid to trouble him. I was also afraid of what might happen if I opened myself up to someone else. This fear occurs not only when meeting foreigners, but Japanese too. It seems that this feeling is common to most Japanese.

In Japan, we have strong traditions that encourage us to be polite, care for others, and suppress our thirsts and passions. While there are good points to these traditions, they have also prevented Japanese from thinking as individuals and speaking our minds. We avoid frank communication and care too much about troubling others. As a result, Japanese are so shy that foreigners sometimes say, "Japanese people have no identity," "they are poor speakers," and "they are always apologizing."

Few individuals are free from anxiety and willing to talk to unknown people like foreigners.

I was the same way. But once I talked to him, I could open up to him. I was surprised at his character he laughed out loud at my corny joke! I told him about my dreams, and he cheered me with warmhearted words. I have never met such a warm and open person who faced others so honestly.

When the time came for us to part in Tokyo, he took my picture and hugged me. We promised to write each other. If I had not had the courage to smile at him, this wonderful chance meeting would not have happened.

Before we can succeed at "international exchange," Japanese people need to be more assertive, and throw away our fear of communicating with others. Whether we are addressing foreigners or our fellow Japanese, we should open our hearts and speak to each other as human beings. Then, with laughter and understanding, we can connect with one another. To communicate with someone is not as difficult as we think. I hope all of you will grasp this simple idea: Communication starts with a smile. Thank you.

<日本語要約> 電車の中で偶然に出会った外国人に何故日本人は外国人に対して心を閉ざすのかと質問され、困惑した。そのことをきっかけにして、外国人とコミュニケーションをはかるためには、自ら積極的に話しかけることの大切さを考えるようになった。日本人は相手の気持ちを尊重するあまり自分の考えを表現することをためらう傾向がある。しかし、そういった態度ではこれからの国際社会の中では通用しないのではないかと考える。

< 英語弁論大会 >

写真 1 2

写真 1 3

写真 1 4

写真 1 5

写真 1 6

写真 1 7

写真 1 8

写真 1 9

### 3 第2回留学生日本語弁論大会

#### 1. 目的

従来、英語弁論大会において、日本の高校生が自分の国際理解を英語で世界に向け発信するという一方向を実践してきたが、国際理解を深めるためには、逆の方向、世界からの発信を受ける方向も模索して行かなくては相互理解とは言えない。そこで、日本で生活する留学生達が感じた、外国人からみた日本を素直に日本語で表現してもらう事により、多文化共生のための国際相互理解を深めることを主な目的とする。

2. 日時 平成14年8月19日(月)10:50~15:40

3. 会場 青年海外協力隊広尾訓練研修センター(国際教育研究大会と同じ)

4. 次第 高校生英語弁論大会に準ずる

#### 5. 出場者

(1) 各ブロックの代表1名および東京都の代表1名、計8名

ただし、代表を出さなかったブロックがあった場合は、開催ブロックより補充する。

(2) 各都道府県および各地区において、選考会等を実施して出場生徒を決定すること。

\*本弁論大会が発展し定着するまで、経過措置として、上記規定は弾力的に運用する。

#### 6. 参加資格

(1) 各都道府県高等学校国際教育研究協議会の加盟校に留学している生徒

(2) 各都道府県高等学校国際教育研究協議会の会長が前項に準ずると認めた生徒

\*本弁論大会が発展し定着するまで、経過措置として、上記規定は弾力的に運用する。

#### 7. 大会規定

(1) 弁論内容・・・国際理解、国際協力、異文化理解、多文化共生に関すること。高校生としての主張を含み、未発表原稿であること。

(2) 弁論時間・・・5分以内(時間超過は減点とする。)

(3) 審査内容・・・論旨(60点)・態度(20点)・音声(20点)を総合して審査判断する。

(4) 表彰・・・外務大臣賞、文部科学大臣奨励賞等、英語弁論大会に準ずる。

## 8. 審査委員（敬称略）

|                   |                          |
|-------------------|--------------------------|
| 小 畑 正比呂           | 外務省経済協力民間援助支援室長          |
| 大 杉 昭 英           | 文部科学省教科調査官               |
| 竹 内 智 子           | 国際協力事業団国内事業部国内連携促進課長代理   |
| 坂 戸 勝             | 国際交流基金企画部長               |
| 小田切 清 治           | 日本国際協力センター広報部広報企画課長      |
| 市 川 治 郎           | 東京都教育委員会高等学校教育指導課指導主事    |
| Alistair Campbell | 東京都教育委員会（東京都立福生高等学校 ALT） |

## 9. 出場者

| 高校名           | 学年 | 氏名                                 | 弁論のテーマ      |
|---------------|----|------------------------------------|-------------|
| 暁星国際高等学校      | 2年 | ヴァレリー・メリル<br>(Valerie Meryl フィリピン) | 私の国際理解      |
| 茨城県立水戸第二高等学校  | 2年 | エリザベス・ラリ -<br>(Elizabeth Lally 米国) | 心の準備        |
| 長野県立下伊那農業高等学校 | 3年 | ショーン・ベアーコック<br>(Shaun Bearcock 豪州) | 僕の2つの生活     |
| 東京都立駒場高等学校    | 1年 | フープラティブスリ・ケン<br>(タイ)               | ベストを尽くせ     |
| 東京都立第一商業高等学校  | 1年 | ルオン・ゴク・フン<br>(ヴェトナム)               | 便利で不思議な国・日本 |

## 私の国際理解

暁星国際高等学校 2年 Valerie Meril (ヴァレリーメリル)

私は半年前にフィリピンから日本に来ました。日本語はまだほとんどわかりませんが、日本語の勉強はとても楽しいです。学校ではほとんど英語を使っていますが、フィリピン人の先生とはタガログ語と英語とミックスで話します。寮に帰るとほとんど日本語なので、早く日本語ができるといいなあと思っています。

半年前に日本に来たとき、私はとても驚いたことがあります。それは、日本にはいろいろな食べ物がたくさんあることでした。それと、日本人が深々とお辞儀をすることにも驚きました。初めのうちは、いつ、どういうふうにお辞儀をするのかわかりませんでした。少しずつわかってきました。日本人の考え方やしきたりを覚えていくのはとても楽しいです。

日本には、フィリピンと似ているところもあります。例えば、フィリピン人は宗教を大切にしています。ほとんどの人が教会やお寺、モスクなどの神聖な所に行きます。日本にもいろいろな宗教があります。教会に行く人もいます。伝統的な宗教儀式や行事があります。

日本とフィリピンの違うところで一番大きなことは、フィリピン人はパーティー好きだということです。子供の誕生日、結婚式、試験に受かったとき、仕事で昇進したときなど、ほんの小さなことでも大パーティをしてお祝いします。病気が治ったと言っではパーティ、娘が何かを始めたと言っではパーティ、パーティを開くための口実をいつも探しています。私は、日本に来て、日本人はあまりパーティを開かないので、寂しいと思ったこともありましたが、大切なことは、互いの違いを受け入れることだと今では思っています。私たちの世代にも、耳をつんざくような大きな音で音楽を聴いたり、映画を見るのが好きな人もいれば、静かに昔風に過ごすのが好きな人もいます。パーティに行かないで家で自分の時間を過ごすのが好きな人もいます。それは、性格や育った環境、受けた教育によるのだと思います。大切なのは、各自の違いを尊重して、それに対する礼儀を示すことです。異文化コミュニケーションも同じではないでしょうか。私は、自分が一歩下がって、相手がどう感じているか見るようにしています。この「感じる」という概念は異文化コミュニケーションの中心だと思います。人が何を見、何を聞き、どのように味わい、どのように感じているのかということに心を留め、それらを尊重すること、私はいつもそうするようにしています。日本で、コミュニケーションの大切さと触れ合う喜びを私は毎日感じて生きています。

ありがとうございました。

## 心の準備

茨城県立水戸第二高等学校 2年 エリザベス・ラリー - (Elizabeth Lally)

私は勉強しすぎます。アメリカでは友達が私を紹介する時たいてい次のように言います。「こちらはエリザベス・ラリーです。彼女の趣味は一生懸命勉強することです。休日にエリザベスはあまり遊びに行きません。つまらないですが、それでも親友です。学校では授業でわからないときなどよく教えてくれます。」と。両親ですら私が勉強をしすぎると思っています。真夜中に私の家では、父のどなり声がよく聞こえます。「エリザベスまだ勉強しているのかやめなさい!」

私は日本へ来ることにした時、すぐに留学のための勉強を始めました。学校の宿題を4時間ぐらいしてから、1時間日本について勉強しました。日本史に関する本を読み、漢字のおんどくの読み方をあきし、「なになにが」と「なにには」の違いつまり助詞の「が」と「は」の違いを勉強しました。アメリカ出発の日、空港に見送りに来た両親の顔は不安でくもっていました。私は「心配しないで。留学する準備はできているから。日本での生活は楽なものよ。」となくさめました。あいにくそれは間違いでした。

水戸に来た最初の日、私の準備はあまりやくに立ちませんでした。水戸駅で初めてホストファミリーに会った時、彼らの日本語が分かりませんでした。「ええ? ちっちゃい? その単語はどんな意味ですか。」それから初めて学校に来た時、授業が全然わかりませんでした。「ええ? 私はたいてい学校の授業はよく分かるはずなのに。ただ黒板を見ているだけでは、難しすぎて分からない。」私の準備は何だったの。頭の中はこんらんして何がなんだか分からない状態でした。しかし、それは一番つらいことではありませんでした。

日本へ来る前に、本を読んで頭を準備させました。心を忘れていました。本は心を強くしてくれませんでした。日本に来て、私の心は弱いということを実感しました。大変な時、私の思うことは「アメリカへ帰りたい。アメリカでは学校の授業がよくわかる。アメリカでは母がだきしめてくれる。なんで日本へ来てしまったんだ。」ということです。私は本当に留学をやめてアメリカへ帰りたいと思いました。私はさびしいですが、なぜまだ日本にいますのでしょうか。それは日本での生活は私にとって良い勉強になっているのがわかったからです。人生はたいていつらいものです。このことはとてもさびしいですが、真実です。しかし、つらいけれども時にはゆうえきなことがあります。それは人間のあたたかさです。

5月の一週間私はずっとさびしかったです。家の部屋で泣いた。学校のお手洗いで泣いた。学校へ自転車で行きながら泣いた。その週の金曜日の朝起きてから、「これは私の部屋じゃない、私の家族じゃない、私の家じゃない。私は一人だ。アメリカにいるべきだ。」と考えました。私はとてもみじめでおなかが痛かったです。驚いたことには、その腹痛は私にとってめぐみでした。アメリカの母はいなかったけれど、まわりの人たちが私のことを気づかってくれました。学校では友達が私のために心配してくれました。家へ帰ってからは、心のやさしいホストファミリーのお母さんがなくさめてくれました。最後はホストファミリーのお姉さんと相談しました。彼女はアドバイスしてくれました。「エリ、やめないで。今エリは厚いかべの前にいる。パンチをあびせてあなを開けなさい。今やめれば、これからもこのかべはずっとあるのよ。」と。

ホストシスターは大切なことを教えてくれました。みなさんも聞いて下さい。世界中人間は違います。だから、外国で生活するのは大変です。でも、かちのあることです。留学することによって人とのつながりの大切さを発見しました。日本へくる前、私は家族と友達を軽く考えました。本が私の友達でした。日本でもアメリカと同じような生活ができると思っていました。ところが、私はすぐさびしかったです。ホストシスターのアドバイスのおかげでいまでは、留学を楽しんでいます。休日に友達と遊びに行き、ホストファミリーと色々な話をします。今も一生懸命勉強しています。多くの人たちにささえられて、大切なことを教えられることもわかってきました。来年の二月までつづく日本の生活の心の準備もできました。

## 僕の2つの生活

長野県立下伊那農業高等学校 3年 Shaun Bearcock ( ショーン・ベアーコック )

こんにちは、ショーンと申します。オーストラリアから来ました。5ヶ月間日本で留学していて住んでいます。この5ヶ月間は楽しくもあり、とても困る時もありました。日本での5ヶ月間について話をすれば何日もかかるでしょう。

日本に来たばかりの時に紙に名前が書いてあるだけで知らなかった人が迎えに来ました。僕はとても緊張していました。“げえ”と思ったのを覚えています。この1年間どうするかなあ！と思いました。

日々がどんどん経っていくように感じ、今も時間がまだ早く経っているように感じます。僕のホスト家族は自分の家族ようになって、級友は友達になって、先生は困った時に助けてくれる人になりました。僕は自分で充分会話ができるし、自分で色々なことをできるようになりました。食べ物を食べれるようになって、日本の食事が大好きです。最初は靴を脱ぐことのような小さな文化の違いがばかげていると思ったけど、日本の文化を経験して、今は意味があると思うようになりました。今は普通の生活になりました。

日本に住んでいる間の1番難しいことは、2つの生活をしていることです。1つはできるだけ日本で勉強していたり経験したりすることです。もう1つは一生懸命オーストラリアの友達と家族に連絡していることです。今友人の意味分かっています。オーストラリア人と日本人も友達がいることを僕はラッキーと思います。日本にいる間に僕をととても楽しませてくれたのは僕が見た場所や物事ではなく僕が会った友達や人です。

18年間住みなれた国から1日に来ることができる国にいますが、オーストラリアはもうすでにたしみにくくなりました。今から6ヶ月間で日本からオーストラリアに帰ります。僕は来た時よりも、かなりかしこくなっていると思います。新しい言葉だけではなく僕のした、誰にもできない経験が僕をかえてくれました。帰国する時、僕の日本の家族からはなれてオーストラリア家族のもとに帰ります。あと6ヶ月間で部屋の写真をはがし服を詰めまるで昨日来たようにオーストラリアに帰ります。思い出や夢と一緒にたびだち、ずっと電話やe-mailで笑いや涙を送っていた友達のもとへ帰ります。そして、しばらくすてていた思い出を取り戻し、来る時にだきあって涙をこらえながら“さよなら”をかわした友達の所へ帰ります。

僕は、本当に持っている2つの生活の間の、僕の居場所をこれから何となく見つけるでしょう。

いじょうです

## ベストを尽くせ

東京都立駒場高等学校 1年 フープラティブスリ・ケン

みなさんこんにちは。わたしはケン・フプラティブスリともうします。タイからきました。きょうはみなさんに、あるひとのはしをしたいとおもいます。

そのひとは、タイでうまれそだちました。でも今は、にほんにいて、いちねんかん日本語とにほんの文化についてまなんでいます。かれがはじめて、にほんにおりたったときは、うれしさと、きんちょうでいっぱいでした。

かれはタイでのせいかつをふりかえりました。ともだちとサッカーしたり、じゅぎょうちゅうはおしゃべりしたり、たのしくすごしました。でもせいせきはよかったです。りょうしんはいつも上をねらえ、もっとべんきょうしろ、げんじょうにまんぞくしてはいけないとはげましてくれました。いま、このくにに、こうしてこうれたのは、りょうしんのおかげです。かれは、これからじぶんのためにも、りょうしんのためにもいっしょうけんめいべんきょうしようとしてくっしんしました。

ところが、3かげつもすると、にほんにもなれいろいろなちがいが、みえてきました。らーめんが、いっぱい700円もする。タイでは、100えんなのにな。とか、とうきょうは、なにかもかがはやくてしげきてきたな。などです。きもちもおおきくなり、じぶんをみうしないはじめました。そして、なまけものになってべんきょうどころか、ゲームセンターにかようようになっていました。

そんなあるひ、りょうしんからてがみがとどきました。わくわくして、てがみをあけると、Tang-Jai-rian-Na-Loog つまり、じぶんのなすべきことにしゅうちゅうせよ、とかいてありました。おもわずなみだがこぼれました。もし、げーむせんたーにいて、なまけていたじかんと、にほんごのべんきょうに、つかっていたら、いまよりもっとうまくなっていたにちがいありません。「でもどうしよう。」てがみにはまた、こうかかれていました。「すぎさったことはもういい。それはじんせいのべんきょうだから。いちばんたいせつなのはいまだ。だからいまできることをせよ。」そのご、かれは、あたらしいみかたでにほんをみることができました。にほんをたいでは、ちがいはありますが、あきらかにおなじことがあります。それはあさいそいでいるかいしゃいんも、がくせいも、だれでもじぶんのするべきことをべすとをつくしてやっているということです。それはタイにいても、にほんにいてもどこにいてもたいせつなことです。

だれでもまちがいますが、それは、じんせいのべんきょうです。そして、たいせつなことは、未来のために、いま、ベストをつくさなければならぬということです。ときどき、ちいさなどりょくはめんどうだと、おもうことがあります。どんなたいがもさいしょはいつてきから、はじまります。ちいさなどりょくをつみかさねることが、たいせつなことです。

かれとは、もちろんわたしのことです。わたしは、タイで、りょうしんにおしえられたことを、にほんでほんとうにりかいました。ありがとうございました。

## 便利で不思議な国日本

東京都立第一商業高等学校 1年 ルオン ゴク フン

2000年6月30日。私にとって忘れられない日になりました。私が初めて日本に来た日なのです。この日から私の日本での生活が始まりました。日本は高いビルが多く、地下鉄など公共の交通機関が便利で、そして車も多いのに、静かでした。本当にびっくりしました。2週間後、私の初登校の日が来ました。原宿外苑中学校です。その日の私は、とても緊張していましたが、学校に着くと心配は無用でした。担任の先生やクラスメートの皆が私を笑顔で迎えてくれました。教室に入ると大きなポスターが貼られ、そのポスターには、Welcome2A と書かれ、クラス全員の写真と名前、皆のメッセージが書いてありました。私は本当に感動しました。休み時間になるとクラスメートだけでなく、他のクラスの友達も私の所に集まってきました。そして、英語で、How long are you staying Japan? How's your country? What kind of sports do you like?など、質問をしてきました。初めは日本語がわからないし、英語も通じず困りました。皆といろいろなことを話したくてもできなかったことが、一番の大きな壁でした。その壁をなくすためにも日本語を勉強しなければと思いました。これまで多くの先生方や友達が私を助けてくれました。そのおかげで、2年間過ごした中で、理解ができるようになったことも増えてきましたが、まだまだ、分からないことも多いです。

日本とベトナムの習慣や文化の違いはたくさんあります。日本は便利で不思議な国だと思います。たとえば、24時間のコンビニや自動販売機があり、お金をもっていれば、いつでも好きな物が買えます。ベトナムにはありません。ベトナムではお父さん、お母さんはどんなに忙しくても家族と一緒に晩御飯を食べるように努力しています。また、日本の高校生のほとんどが、携帯電話を持っています。便利な反面、授業中メールをしたり、ゲームをしたりする人がいます。私は家に電話があるので、携帯電話は必要ないと思います。宿題は日本よりベトナムの方が多いです。また、日本では授業中に居眠りをする生徒がいますが、ベトナムでは絶対にしてはいけません。それから、ベトナムでは、学校に行きたくても行くことができない子供たちがいて、路上でガムや絵はがきを売ったりして生活している子供たちがいます。日本では学校に行くことができるのに行かない子供たちがいると聞きました。どの国でも子供たちが楽しく学校に行くことができるとよいと思います。将来ベトナムに、もっとたくさんの学校ができて、学校に行けない子供たちでも学行けるよう、子供たちの夢が叶うようになってほしいと思います。

将来の私の夢はお父さんのように、新聞記者になることです。なぜなら記者になれば、いろいろな国に行って、いろいろな人たちと交流できます。そして、新聞で外国のことをベトナム人に、またベトナムのことを外国人に知らせることができます。21世紀に入り、通信の発達によって世界は近くなりました。地球上どこでも直接話すことができるし、メールを使えば、文字通信もできます。このような国際化の中で、一番大事なことは世界中どこに行ってもコミュニケーションができるようにする事だと思います。私達は母国語以外に2つ以上の外国語を勉強した方がいいと思います。世界には難しい問題がたくさんありますが、お互い助け合い国際化に向けて一緒に努力していきたいと思います。

みなさん、英語が大変うまいので驚きました。しかし今回の出場者に男性が一人もいないのはどうしたことでしょうか。これが現代の日本の社会の構図なのかもしれません。審査員7名、最後まで迷いました。それほど僅差だということです。以下発表いたします。

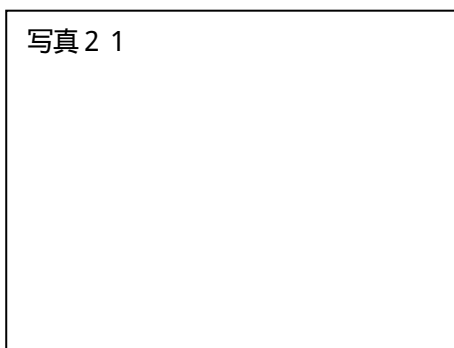
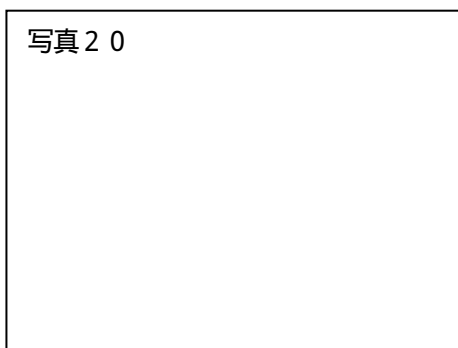
< 英語弁論大会 >

|                 |                  |         |
|-----------------|------------------|---------|
| 外務大臣賞           | 静岡県立三島北高等学校      | 広 田 愛   |
| 文部科学省奨励賞        | 栃木県立石橋高等学校       | 中 村 こと葉 |
| 国際協力事業団総裁賞      | 島根県松江北高等学校       | 増 本 歩 美 |
| 国際交流基金理事長賞      | 山梨県立日川高等学校       | 田 村 麻希子 |
| 財団法人日本国際協力センター賞 | 青森県八戸聖ウルスラ学院高等学校 | 堀 口 文 乃 |
| 全国高等学校国際教育研究会長賞 | 高知県立高知南高等学校      | 角 田 理 佳 |
| 全国高等学校国際教育研究会長賞 | 東京都立成瀬高等学校       | 荒 井 彩 奈 |
| 全国高等学校国際教育研究会長賞 | 福井県立福井商業高等学校     | 田 中 ゆ か |
| 全国高等学校国際教育研究会長賞 | 佐賀県立高志館高等学校      | 大 石 聖 子 |

< 日本語弁論大会 >

|                 |               |              |
|-----------------|---------------|--------------|
| 外務大臣賞           | 茨城県立水戸第二高等学校  | エリザベス・ラリー    |
| 文部科学省奨励賞        | 東京都立駒場高等学校    | フーブラティブスリ・ケン |
| 国際協力事業団総裁賞      | 東京都立第一商業高等学校  | ルオン・ゴク・フン    |
| 国際交流基金理事長賞      | 千葉県暁星国際高等学校   | ヴァレリー・メリル    |
| 財団法人日本国際協力センター賞 | 長野県立下伊那農業高等学校 | ショーン・ベアーコック  |

< 英語・日本語弁論大会より >



<日本語弁論大会>

写真 2 2

写真 2 3

写真 2 4

写真 2 5

写真 2 6

#### 4 第39回全国高等学校国際教育研究大会・東京大会 研究実践発表

##### (1) 「多様な価値観と問題解決型学習(スタディツアーの実践)」

東京都立芝商業高等学校 竹山哲司

### 1. はじめに

青年海外協力隊の元隊員たちは、海外でのボランティア経験を活かして、開発教育などに積極的に取り組んでいます。東京在住・在勤の協力隊OB・OGで組織する東京OB会では、調査・体験型の旅行であるスタディツアーを、東京都、国際協力事業団、パラオ大使館などの後援や便宜供与を得て、主に高校生を対象とし、西暦2000年1月と2001年8月に実施しました。行き先は日本の真南にあるパラオ共和国で、「日本人の忘れ物」「ちょっと昔の日本探し」「パラオでの日本再発見」がキーワードでした。ツアーそのものは1週間程度ですが、準備期間、現地調査、事前勉強会、報告会、報告書作成までも含めると、2回とも約18ヶ月にわたる企画です。

東京都高等学校国際教育研究協議会は、後援団体として、学校現場の実態などを助言し、参加者の募集、ツアー引率、報告書作成などに協力しました。

なお、パラオスタディツアーの詳細は、報告書が発行されておりますので、本校(電話03-3431-0760)までお問い合わせ下さい。

### 2. パラオと日本の関わり

パラオは、バベルダオブ島を中心とする島国で、人口は約18,000人です。西暦1994年に独立する前は、スペイン、ドイツ、日本、米国に統治・支配されてきました。1919年から45年までは、日本が、パラオを含むミクロネシア地域を国際連盟から委任され、統治していました。当時は「南洋群島」と呼ばれ、多くの日本人が移住し、パラオの発展にも寄与しました。パラオの島々は、この戦争で史書に名を残すほどの激戦の地となり、日本軍がパラオの人たちに多くの被害をもたらしたことも、けっして忘れてはならない歴史的な事実です。しかし太平洋戦争前、パラオに暮らしていた日本人には、パラオの発展に心血を注いだ立派な人も多く、それが今でも親日的である要因のひとつです。

私たちの暮らしている現代は「激動の時代」とも呼ばれ、多くの発明や発見があり、技術が発達し、世界中が狭く感じられるようになってきました。一方で、大小の戦闘が世界中のどこかで、今でも続いています。昨年9月に私は、ニューヨーク市民と同時に、米国の世界貿易センタービルが倒壊していく様子を見ました。今年の6月には、世界のサッカーファンが、私と同時に、試合の行方に一喜一憂したことでしょう。

私たちは、どのような未来を作っていくべきでしょうか。物事の好き嫌いに個人差があるように、価値観も、国家、民族、宗教、そして時代によって大きく異なります。世界が狭くなればなるほどに、その多様性に戸惑うことになります。お互いの無理解や無作法が原因で、幾多の争いが起こったことでしょうか。私たちはその中で、公平に判断できる見方や考え方を養う事がとても大切ではないでしょうか。

私たちは、今の生活の中で、ちょっと昔の生活や歴史を知る事があるでしょうか。学校で学ぶ歴史は、100年以上も前の、私たちの誰もが生きていなかった時代の事がほとんどです。このパラオ

スタディツアーは、ちょっと昔の生活や歴史を知り、パラオの人々やパラオで暮らす日系人や日本人に触れながら、未来を担う若人が、自分たちが住む国のことや暮らしを見つめ直す、よい機会になりました。このために、2泊3日のホームステイが組み込まれました。ホストファミリーの負担は最小限にとどめるよう十分に配慮しましたが、結果としては、大歓迎を受け、かなりの負担をかけてしまいました。

スタディツアーでのパラオ滞在はたった1週間足らずですが、パラオの人々との交流はとても密度の濃いものでした。ちょっと昔には日本のどこにでもあった、人と人の温かいつきあいが、パラオには今でも残っています。家族のあるべき姿が、パラオでは極当たり前に見られます。ホームステイでお世話になったアイライやコロールの人々が、これほどまでに温かくもてなしてくれるとは、実際にパラオに着くまでは想像していませんでした。

### 3. パラオスタディツアー2000の行程

- 1月 3日(月) グアム経由、パラオ共和国コロールへ。
- 1月 5日(水) JICA パラオ事務所訪問。アイライ初等学校、コロール高齢者センター、パラオ高校、保育所、パラオ海洋開発センター、Tドックなどを見学。
- 1月 6日(木) ペリリュー島の日本軍倉庫跡、日本軍司令部跡、戦車・大砲の残骸、戦没者墓地、オレンジビーチ、戦争資料室などを見学。
- 1月 7日(金) ベラウ国立博物館の見学。  
ホストファミリーとの合同昼食会后、アイライ州にてホームステイ。
- 1月 8日(土) ホストファミリーと一緒に、ロックアイランドへピクニック。
- 1月 9日(日) アイライの集会場にて、お別れの合同昼食会。
- 1月10日(月) グアム経由、成田へ。

### 4. パラオスタディツアー2001の行程

- 8月18日(土) グアム経由、パラオ共和国コロールへ。
- 8月20日(月) JICA パラオ事務所訪問。アイライ初等学校を訪問し、交流会。  
ミュージアムスコウジョウ、アイライアパイ、Tドックなどを見学。
- 8月21日(火) ペリリュー島見学(57年前の日米両軍の激戦地、美しい浜辺など)。
- 8月22日(水) 青年海外協力隊員の活動現場(国立病院、保育所、パラオ高校、パラオ短期大学)の見学と実体験。
- 8月23日(木) パラオ国際珊瑚礁センターの見学。  
ホストファミリーとの昼食会后、コロール州にてホームステイ。
- 8月24日(金) ホームステイ。
- 8月25日(土) ホームステイ。さよならパーティー。
- 8月26日(日) グアム経由、成田へ。

### 5. パラオスタディツアーを総括するキーワード

- ◆ 調査・体験型の旅行としてのスタディツアー。

- ◆ 日本人の忘れ物。
- ◆ ちょっと昔の日本探し。
- ◆ パラオでの日本再発見。
- ◆ 百聞は一見に如かず、百見は一考に如かず、百考は一行に如かず。
- ◆ 未来を担う若人である高校生などが、自分たちが住む国での暮らしを見つめ直す、またとない機会。
- ◆ 物事に個人差があるように、価値観も、国家、民族、宗教、そして時代によって、実に多様であることに気付く。
- ◆ 学校の普通の授業では学ぶことのできないことを、たくさん学ぶ。
- ◆ 多角的な視野で問題に気付き、解決方法を探し、公平に判断できる見方や考え方を養う機会。
- ◆ 外出時に、鍵をかけない。魚は毎日食べているのに、商店で魚が買えない。子どもはたくさんいるのに、保育所がない。なぜならば、必要がないから。
- ◆ 教科書に綴られているような、通り一遍の歴史の不十分さ、危うさ。
- ◆ 他人に対する優しさや思いやり、他人への意識の強さ、人と人との関わりの密度。
- ◆ 将来の進路選択の貴重な体験。

## 6 . 参加した高校生がパラオで体験したこと、感じたこと、考えたこと

( 1 ) 聖ドミニコ学園高校( 2 年 ) 二見 沙綾佳

「Palau and I」

I will talk about my experiences in the Palau study tour.

I had a good opportunity to rethink about Japan and our lives by socializing with the people in Palau including students of my generation.

Now they have beautiful islands with many palm trees, blue oceans and the sea around a coral reef in Palau. However, in the past, many soldiers and local people became victims of the Pacific War.

When I was an elementary student, I had only a fear of the Americans through the TV and books on the World War . As I grew older, I learned the history of the War at school. Moreover this visit to Palau made me understand the way of thinking in foreign countries.

I had a valuable experience there and realized the importance of international collaboration. This is because it gives us the opportunities to study the history and to rethink about Japanese culture. This will help us to understand our country and to remove inaccurate ideas of our country by communicating with each other. As a result, we can understand Japan deeply as well as the people in the other counties. In other words, we can see our county objectively, and it gives us the opportunities to change the image of our country.

I think we can learn both the good and bad aspects of our country through international collaboration.

People of my generation have to have an obligation to learn the bad aspects of Japan as well as the good ones. It is very difficult to tell both the good and bad aspects of Japan. However, I would like to insist the importance of this kind of education.

(2) 聖ドミニコ学園高校(3年) 杵淵 寛子

2001年8月21日、この日は私たちにとって、戦争について多く学び、考えた日となりました。

ペリリュー島。そこには戦争の傷跡がまだ、鮮明に残っています。無数の大砲。コンクリートで作られた日本軍の司令部。たくさんの人の血で赤く染まったと噂されているオレンジビーチ(本当はアメリカ軍の軍事的暗号)。たくさんの日本人、アメリカ人、巻き込まれてしまったパラオ人の墓。これらのものすべてが、戦争の悲惨さを物語っています。今ではとても静かな場所です。

雨の中、ここで亡くなられた人たちが、静かに眠れることを、私たちは、無数のお墓を前にして祈りました。竹山さんたちが、お墓にタバコやお酒を撒いていました。私はそれを見て、少し疑問に思いました。なぜなら、タバコやお酒は体に悪いものだといわれているし、嫌いな人もいます。花束を奉げるほうが好ましいのではないかと、耐えかねて、私は竹山さんに訊いてみました。

「なぜ、あえて、タバコやお酒なのか?」

すると、思ってもいなかった答えが返ってきました。

「戦争の時は、ほとんど何も楽しみもなかった。そんな中、唯一ともいえる楽しみが、タバコだった。恩賜のタバコすらあった。このお酒は、『御神酒』である。古くから、お清めの意味もある。だから、今こうやってお供えしているのだ。」と。

とてもよく納得できました。と同時に、私がどれだけ戦争の苦しみを理解してないかという事に気がつきました。

私たちに本当の戦争のつらさ、苦しみは理解できるものではないと思います。しかし、そこで繰り返し広げられていた生きるか死ぬかの戦い、壊れたコンクリート、お墓、今では足を覆うように生えている草。これらの事は、教科書に書いてある通りの日本の一方的な歴史教育では学ぶことのできない、被災地・被害者側の立場で、私たちに訴えています。戦争というものが、ただの殺し合いだということを。どちらかが正しく、どちらが正義か、言うことは決してありえまん。たとえ自分の国を守るため、素敵な何かを守るためであっても、人間が死んでしまっただけは何の解決にもなりません。この現場で感じ取ることでできる空気が、こんなバカげたことを繰り返してはならないと、私たちに語りかけています。歴史の残骸が今、目の前にあり、ペリリュー波止場近くの資料館では、千人針、弾丸が通り抜けた水筒、薬の入ったガラス瓶なども肌で触れることができます。教科書だけでは勉強できないことばかりです。なぜ、戦争になってしまったのか、他の解決方法はなかったのか、考えれば考えるほど、過去を怨んでしまうのは、なぜでしょう。

しかし、どんなにつらい歴史があっても、前を向いて動き出さなければ何も変わりません。過去にとらわれていては、歴史を進めることはできないということを、日本人にも明るい笑顔で手を振ってくれるパラオの人々、そんな過去の歴史を乗り越えて歩みだしている今のパラオに出会って、気がつきました。これが、私がパラオに実際に行って体験したことで、いちばん強く印象に残ったことです。

そして、パラオの人々はもう、新しい歴史を日々生み出すために、動いています。

このように、パラオに行って、戦争について学ぶことができ、私は、本当によかったと思っています。

(3) 東京薬科大学(吉祥女子高校卒) 佐藤 久華

ペリリュー島にて

ペリリュー島に降り立って、一步足を踏み入れると、すぐに日本軍の戦没者墓地と慰霊碑を目にする。わずか 25 歳という若さで命を落とした兵士の墓もあった。島内を巡るうちに、いかにすさまじい戦争であったのかが、明らかになっていく。草木の生い茂った日本軍戦車の残骸、海から米軍の砲弾をうけ幾つもの穴のあいた日本軍倉庫、真上から落とされた爆弾によって天井から床まで大きな穴の貫通した海軍司令部、その中でもひとときわ厚く、機密情報の通信をしていた部屋のさびついたドア。そして、爆撃を逃れるための狭くて暑い防空壕。

59 年前、東洋一と誉めそやされ、日本軍と米軍が多くの血を流して取り合ったペリリュー飛行場も、今はでこぼこの滑走路が残るのみである。

このスタディツアーに参加するまで、パラオが第二次世界大戦の戦場であったことなど知らなかった。自分たちの国が行ったことにもかかわらず、こんなにも多くの人々が血を流し、苦しんだということを知らなかったことを、恥ずかしく思う。そして、パラオで戦争があったという事実を、きちんと見つめなければならぬと思った。

パラオの人々はどこへ行っても、私たちを暖かく迎え入れ、優しく接してくれた。けれども、それに甘えて、日本の行った行為を忘れてはならないのだ。今や戦争は、過去の産物と化してきている。つまり、戦争に対して現実味もなく、危機感もなく、ただ教科書に綴られている歴史の一部として受け入れているのだ。それは日本が平和憲法を掲げ、戦争放棄を叫んだ結果かもしれない。しかし世界中を見渡すと、日本のように戦争から離れた生活を送れる人々はごくわずかに過ぎない。今なお、アフガニスタンは緊迫した状態にあるし、シエラレオネやパレスチナや、内戦や緊張状態にある国々が多数存在するのが現状である。

私は、高校生だった 2000 年 1 月に第 1 回パラオスタディツアーに参加して、改めて日本を見直すチャンスを得たのだと思う。日本が忘れかけていること、日本の若者が知りもしないことがココにはある。58 年前に何があったのか、口をきくことはできなくとも、ペリリュー島の残骸が多くのことを物語っているのだ。戦争は幾多の人命を奪い、土地を破壊する。誰もが行ってはならないということを知っているが、私たちの世代は直接、感じたことがなく、頭では知っていても理解できることは極僅かだ。このツアーに参加したことで、今までよりも近くに戦争を感じられるようになったのは、私にとって、大きな収穫だったと思う。

## パラオの人々

パラオの人々はどこへ行っても、快く私たちを迎え入れてくれた。飛行場に降り立ったとき、私たちのために、レイを作ってアイライ小学校（8 年制）の子供たちが待っていてくれた時から、そう感じた。パラオの人と接して感じたことは、みんなが他人に親切だということだ。

パラオの子供たちは、学年を超えて仲がいいことに驚いた。日本の小学校では、一緒に遊ぶ仲間、たいてい同学年である。しかしアイライ小学校では、上級生も下級生も一緒になって遊んでいたし、皆でひとつの遊びをすることが当たり前なのである。給食の時などは、上級生が自然に下級生の面倒を見ていたことも印象的だった。自分たちが食べるよりも先に、下級生に順番に食べさせている姿を見て、それが当然であることに私は敬服した。彼らにとっては当然なことなのだろうが、大勢の下級生の面倒を見るなんて考えたこともなかった私にとっては、衝撃的であった。

ホストファミリーやアイライ小学校の生徒ばかりでなく、道行く人や、店員さんもみな親切だった。それはやはり、他人に対する思いやりがあるからではないかと思う。アイライ小学校の上級生を見ても分かったとおり、パラオの人は、他人に対する優しさや他人への意識・関心が強い

のではないかと思う。日本人に思いやりの心がないわけではないが、パラオでは、人と人との関わりが密であるように思えた。

(4) 慶応義塾大学(吉祥女子高校卒) 白尾 瑞希

#### **スタディツアー体験に関わる進路選択の一例**

私は、高校1年生のときにパラオスタディツアーに参加しました。このツアーで得たことは、途上国に対する一般的な偏見が除かれたということ、現地の教育現場を直に見て、日本の教育や学生と比較することができたこと、パラオ文化を通じて、アイデンティティーや歴史についてあらためて考えることができたこと、日本が好きだからこそ、異文化をもつ人々が自分の文化を大切にしていることを理解できると気づいたことなどです。

私はもともと、弓道や阿波踊りなどで日本文化を意識する機会が多く、文化そのものに関心を持っていました。他にも情報技術(IT)や教育にも興味はあったのですが、それを今後の進路にどう活かすかは、漠然としていました。それが、パラオでの小学校や高校見学、3日間のホームステイ、独特な文化の体験などを通して、関心が高まるとともにビジョンも定まってきたのです。

異文化コミュニケーションを積極的に教育に取り入れていくために、ITを利用したネットワークコミュニケーションや語学教育を研究したい。そのためには、慶応大学の湘南藤沢キャンパス(SFC)のカリキュラムが、私にとって最も理想的な学び場であるということを知りました。大学進学の方針や目標を確立して、AO入試を受け、合格することができました。一般の受験生よりも早く進路の決まった私は、さっそく各国のIT教育について勉強を始めました。

JICAの広報誌「国際協力」に載っていた先生にEメールでコンタクトをとり、イベントにも参加させてもらいました。今年4月にSFCに入学し、そこでは国際学生NPOであるAIESECに入り、現在は学外でも自主的に活動を行っています。

パラオでの経験から、大学進学に対する方向性が明確になった。

異文化コミュニケーションや、教育への関心が強くなった。

志望の大学が見つかった。大学の理念と自分の進路とが一致した。

AO入試に合格した。ある先生との出会い、アジア地域への興味が沸いてきた。

経済・地球環境・教育・歴史の諸課題について、「AIESEC」で活動している。

#### **後輩に伝えたいこと**

さて、このような活動を続けて私が考えることは、自文化理解の重要性です。自文化をよく知るほど、異文化に対する誤解は生まれてしまうものですが、ここに直接交流が加わると、異文化に対する理解が生まれます。逆にこの自文化理解がないと、このプロセスを経ることはできません。多様な価値観はこうして身につくものだ、私は考えています。そして、それぞれパラオスタディツアーで実際に体験してきたことなのです。

- ◆ パラオでの経験を通して発見したことや興味が、現在の活動に繋がっている。
- ◆ パラオでの英語・日本語によるコミュニケーションの体験から、コミュニケーションをする上で、お互いの「共通点」と「差異」を見つけるおもしろさを知ると同時に、日本語をもっと大切にしなければな

らないという自覚が生まれた。

- ◆ アイライ小学校、パラオ高校を訪問し、日本の教育と比較することで、教育の重要性に気づいた。
- ◆ 直接体験をしてみなければわからないことは、たくさんある。(紙上/机上だけでは不充分)
- ◆ 多様な価値観を養うには、自文化のアイデンティティーをまず養う必要がある。弓道など日本文化を意識する機会が、もともと多かったし、パラオという戦前の日本文化が残っている国を体感したことからも、自文化理解の必要性を実感している。
- ◆ 「先入観による誤解 交流 理解が生まれる。」という流れが重要である。自文化のアイデンティティーをもつことに伴う先入観は、必ずしも悪しきものではない。誤解があるからこそ、直接交流によって理解が生まれる。
- ◆ A0入試とは、自分なりの問題解決についての方法を提示すること。実践しながら、必要な知識を身につけていく事のできる大学のカリキュラムが、自分にあっている。問題解決の方法に、実際にアプローチするための自主活動、考えるだけでなく行動することが不可欠である。
- ◆ 諸問題の解決のために、自分はITに注目している。

## 7. パラオスタディツアー2000&2001 アンケート集計結果(抜粋)

<母数30、カッコ内は複数の場合の回答数>

パラオでのいちばんの思い出は何ですか。

ホームステイ(13)、ロックアイランド(7)、ペリリュー島の戦跡(6)、参加者同士で仲良く旅行ができたこと(3)、アイライでのさよならパーティー(2)、オギワルのかつての銀座通り。誕生日パーティーをやってもらったこと。パラオ人は、みんなとても親切だった。大家族だったので、いろいろな人といろいろな話ができた。幅広い世代の人から、いろいろな話が聞けた。パラオの生活を知ることができた。言葉の壁はあったが、分かってうれしかった。パラオに着いたときと最終日では、参加者の顔つきが全然違うこと。ホストマザーの別れ際の涙。このメンバーで旅行して、いろいろな思いを共有したり反発したり理解できたこと。

パラオで1週間を過ごして、驚いた事は何ですか。

パラオ人の優しさ・暖かさ(7)、日本語が良く通じること(3)、道行く人が挨拶してくれたり、手を振ってくれたこと。戦争の残骸がたくさん放置されている。小学生でも自動車を運転していたこと。アイライ初等学校の8年生が生徒全員の名前を覚えていたこと、給食の時の仕切り方。パラオ人は、みんな親戚または知り合い。パラオ語になっている日本語の多さ。パラオ人の親切さ。日本の遊び道具がたくさんあった。時間が止まっているかのような長閑さ。ママは椅子に座ってくつろいでいて、たくさんのお兄さんたちが家事をこなすこと。お父さんが、バリバリ家事をやっていたこと。

ホームステイで良かった事は、何ですか。

異文化体験・パラオ人の生活の体験(7)、もてなしの暖かみに触れたこと(5)、パラオ人とうちとけられたこと(4)、家族の一員として扱ってくれたこと(3)、日本語で積極的に話しかけられたり、おしゃべりしたこと(2)、日本との違いがわかったこと。自分自身の意外な面を発見したこと。パラオで兄弟のようなつきあいができたこと。

ペリリュー島へ行って、何を感じましたか。

戦争の傷跡・悲惨さ・恐ろしさ(9)、戦争の激しさ・生々しさ(4)、日本がしたこと非道さとパラオの人々の優しさ(2)、日本人墓地のお参りは複雑な気持ち。恐怖と孤独で心が押しつぶされそうになった。日本人が決して忘れてはいけない戦争のこと。日本とパラオの関係の複雑さ。本当に戦争があったことが実感できた。戦争の跡が生々しく残っていて、今後とも、戦争の悲惨さと恐ろしさを伝えていくために、是非あのままにしておきたい。守備隊の将兵は、どのような気持ちで配置についたのかを考えると、とても厳粛な気持ちになった。戦争を二度と起こさせないようにしたい。

パラオで実際に使ったパラオ語は、何かありますか。

アリー(こんにちは、9)、スーラン(ありがとう、10)、オッオイー(はい、2)、ダイジョウブ(5)、オイシイ。クルマ。デンキ。デンワ。センブウキ。シャシン。センセイ。チチバンド。エモンカケ。ベンジョ。

日本で待っている家族や友だちに、どんなお土産ができましたか。

思い出話や写真(16)、ホストファミリーからのお土産(10)、私の心。私の笑顔。

事前勉強会は、どのように役に立ちましたか。

英語で会話することができるようになった(5)、基本的な知識があったので、生活しやすかった(5)、事前に参加者同士の輪が広がったこと(3)、現地で見聞したことがよりよく吸収できた(3)、実際に行き見て見たり聞いたりしたことが、事前に調べたことと同じだとより深く理解できる(3)、あれだけ勉強したから、パラオが身近に感じられたが、知らないことが山ほどあった。太平洋戦争についての知識があったので、ホストファミリーとの話が分かりやすく、英語での会話も弾み、内容も理解しやすかった。参加者が、お互いの目標や観点などを確認することができた。

このスタディツアーで、いちばん印象に残っていることは何ですか。

ホームステイ(11)、参加者同士の絆ができたこと(6)、人々の心の優しさ、暖かさ、深さ(5)、パラオ人の心に触れられた(4)、いろいろな人々との出会い、ふれあい(4)、たくさんのかげがえのない人に出会った(4)、戦争の恐ろしさ(3)、パラオ人の笑顔。ホストファミリーの優しさで自分も優しくなれた。人を思いやることの大切さ。友達の大切さ。日本の都心と違い、パラオの人間関係が他人に対して優しいこと。日本人との心の貧富の差をすごく感じた。日本との関係の深さ。すべての人々は国や人種に関係なく同じだと言うこと。すばらしい自然に触れられた。自然に生きることの楽しさや大切さ。知らない人とのツアーでお互いに行き違いはあったけど、逆に関係は深まった。自分の心の貧弱さを感じた。パラオにも家族ができた事。違う学校にも友達ができた。自分の価値観が変わった。パラオ人の優しさ。人間どうしのつながりを持ち続けることの大切さ。お年寄りから戦前からの日本人とのつながりを大切にしていること。言葉が通じなくても、心は通じ合うことが分かった。言葉は真心で伝えるもの。外国語で話してみても、気は心だということがわかった。昔の日本がどのようなだったか、他の国から見られたこと。その日その日を大切にすることを学んだ。ゆったりとした生活と、せかさされる生活とでは、得るものが随分と違う。コンクリートに囲まれた生活から解放された。新しい人間関係を築くことや、自然と共生することを学べた。今まで知らなかった自分に気付いたこと。日本では体験できないことを、たくさん体験できたこと。

今回の経験を、何に役立てたいと思いますか。

将来の進路選択(12)、自分自身の考え方や行動(3)、まわりの人々にパラオのことを話し、この国の存在をもっとアピールしたい(2)、もっともっと自分の世界を広げたい(2)、将来のために自分の内面を磨くこと。今後の原体験。人生にもっと優しさを増やしたい。自分を勇気づけたいとき。心の豊かな人間になりたい。パラオに行って、逆に日本の良いこと、悪いことをもっと勉強したいと思った。

自由に意見を聞かせてください。

学校では、絶対にできないことを学んだ。将来は協力隊員としてパラオに帰りたい。自分の帰る場所が、もう一つできたような気がする。ホストファミリーと見たストーンマナーやお産の儀式は一生忘れられないでしょう。自分の強い部分が見えてきた。あきらめかけていた夢を実現させめのために、一生懸命勉強する。近代的な社会に育ったことは便利なことも多々あるが、自然に生きることの楽しさや大切さを学んだ。夏からの半年は長いようで短かった、ツアーは終わって寂しいけれど、今からが始まりだと思う。相手を認め、自分も認めてもらうように務めることが、「国際理解」だと思う。どれだけ私を通して、「日本」をパラオ人に伝えられたか分からないが、「パラオ」はいいイメージで見えた。この一週間で身につけたことをそのままにしているは何の意味もないので、しっかりと自分のものにしたい。こんなに日本の文化を大切にしてくれている国なのに、日本人にはあまり知られていなくて残念、日本に帰ったら、感じたことをすべて伝えたい。どこにて行っても大事なものは、素直に相手と接することなんだなあ、しみじみと感じた。引率の方々、お疲れさまでした、このスタディツアーに関わったすべての人に感謝します(7)。

## 8. 日本統治時代のパラオの学校制度の沿革

- 大正 3 (1914) 年 第1次世界大戦勃発し、日本は連合国側にたって参戦した。帝国海軍は、ドイツ領南洋諸島を占領した。
- 大正 4 (1915) 年 南洋群島小学校規則の制定に伴い、小学校としてコロールに設立された。
- 大正 7 (1918) 年 小学校を島民学校と改称した。パラオでは、ペリリュー、アンガウル、ラルドに分校が置かれた。
- 大正 9 (1920) 年 南洋群島の人口は約52000人で、そのうち日本人が約3600人であった。
- 大正 10 (1921) 年 臨時南洋群島防衛隊民政部をトラック諸島夏島からコロールに移した。
- 大正 11 (1922) 年 南洋庁小学校規則および公学校規則が施行され、パラオでは、コロールにパラオ尋常小学校が、コロール、マルキョク、ペリリュー、アンガウル、ガラルドに公学校が置かれた。  
コロールとアンガウルには、医院と郵便局も置かれた。
- 昭和 10 (1935) 年 南洋群島の人口は約10万人で、うち日本人・朝鮮人・台湾人が約5万人であった。  
サイパン尋常小学校に、御真影が御下賜された。
- 昭和 11 (1936) 年 アンガウル島にアンガウル尋常小学校、バベルダオブ島にガルドッグ尋常小学校を設置した。

- 昭和12(1937)年 バベルダオブ島アイライ村にアイライ尋常小学校、同アルモノグイ村にガルミスカン尋常小学校を設置した。
- 昭和15(1940)年 コロールに南洋神社が建立された。
- 昭和16(1941)年 国民学校令により、小学校は国民学校と改称された。
- 昭和19(1944)年 パラオ群島空襲。ペリリュー島守備隊壊滅。
- 昭和20(1945)年 太平洋戦争終結、日本敗戦。

<以上、「パラオスタディツアー2000 報告書」より引用。>

## 9. まとめにかえて

パラオスタディツアーの実践は、参加した生徒にはもちろん、引率した教師や大人たちにとっても、まさに異文化体験であり、多様な価値観との激突であり、問題解決学習の場でした。

2回のツアーとも、募集説明会や勉強会初日の参加者は、まさに現代っ子でした。参加動機にしても、目的意識を強く持った者、他のツアーと違って面白そうとか、南の海にあこがれてと言う者ありと、実にさまざまで、そんな彼らが寝食を共にし、それも海外でうまくやっていけるのか、また何を感じてくるのか、方向性がまったく予測が出来ないというのが偽らざる実感でした。

引率者の一人である高島みゆき先生は、報告書の中で、「最近の生徒の人間関係は、その希薄さが気になります。他人からどう評価されるのか、いつも気にしながらつきあっています。このツアーに参加した生徒たちも、初めはそんな関係性で、言われたことを言われただけやる、いわゆる指示待ち族でした。それが、事前勉強会を通して次第に、コミュニケーションがとれてきました。パラオに行って、ホームステイで何かが変わり、壁が破られたように、実に生き生きと自信に満ちた顔になっていきました。一人ひとりが、パラオの生活習慣や文化や歴史を知ろうと努力し、人々と一生懸命交流している姿がそこにありました。」と、参加した生徒の変化を総括しています。

パラオに保育園がないのは遅れているからではなく、人々の温かい助け合いがあるから不必要なのだ、気づいた参加者もいました。おカネがなくても食べ物が手に入ることが本当の豊かさなのだ分かったと、言っていた参加者もいました。

パラオで生まれ、引退後パラオに戻り、コロールでレストランを経営している磯川さんは参加者に、「今の日本を見ていると、モノのために一生懸命になっている。モノはそのうち価値はなくなってしまふ。しかし、経験は一生の自分の宝ものになる。経験からできた人脈は、一生の財産になる。」と、お話してくれました。

パラオを去るときの参加者の清々しい目の輝き、生き生きとした顔を見たとき、このツアーは成功したのだと実感しました。勉強会はもちろん、それ以前の準備期間も含めての活動は、決して徒労ではなく、しっかりとした手応えのあるものだと感じました。帰国後は、主体的に行動し、報告会の準備も意欲的に参加してくれました。明らかに、行く前とは異なり、地に足がついた印象を受けました。誰もがこのツアーを通して、普段の学校生活では得難い友ができ、物の見方や考え方を変わり、心の中に何かが残ったのでしょうか。

パラオは、島は小さいけれども、心は広いのです。

2000年1月のツアーでは、アイライの集会場で、ホストファミリーとのお別れ昼食会を持ちました。パラオ側の参会者は、老若男女あわせて約100名でした。パラオの人々も輪に加えて、一緒に阿波踊りを踊りました。長老たちも、ゆっくりした足取りですが輪に加わってくれました。昼食会が終わり、コロールへ戻るバスに乗車するとき、パラオの長老や子どもたちが日本語で、「上を向いて歩こう」「蛍の光」「幸せなら手をたたこう」を合唱してくれました。アイライを去るとき、別れ

を惜しみ、全員が泣いていました。この涙は何を語るのでしょうか。この子どもたちは、なぜ東京ではこのような涙を見せないのでしょうか。「心」のありようを、人とのつきあい方を考えさせられます。

青少年期の特徴なのか、今までにこういう人との触れ合いがなかったからだろうか、果たして日本の日常生活でこれほどまでの出逢いをしていないのだろうか、日本の社会のあり方や学校のあり方が問題なのか。たった3日間ですが、涙するほどの別れができたということは、それだけ密度の濃い、温かい交流ができたことの証でしょう。一方、日本での日常生活の中では果たして、涙して別れるほどの出逢いをどれだけ経験しているのでしょうか。これから、どう生徒と向き合っていけばよいのか、真剣に考えなければと思いました。

日本統治時代の公学校で教育を受けたお年寄り方から、今昔の日本人について、興味深いお話をたくさん伺いました。特に印象に残ったのは、今の日本人（主にはダイビングで訪れる青年たち）は礼儀知らずであり、センセイ（パラオ語で教師のこと）がもっとしっかりしないといけないと、お叱りを受けたことです。ホームステイ中に、ひんしゅくとまでは行かないが、お年寄りを不快にさせるようなことが、参加者の中にもあったかもしれません。引率者としては、なるべくお年寄りのいるお宅にお世話になりたいと申し出ている以上、お年寄りとの接し方にもっと気を配るように、事前に話すべきでした。パラオのお年寄りにとって、日本の青少年のあるべき姿は、60年前のままなのです。

さて、参加者募集から報告会に至るまで一貫して感じるのは、学校や教師たちの関心の低さです。全国大会にご参集の皆さまのように、関心が深く理解のある先生方はいらっしゃいますが、こういう先生はあまりにも少数でした。教育現場では、いわゆる発展途上国や小さい国への関心がとても低いことも現状のようです。国際理解教育といっても、英米豪加などの英語圏の先進国への語学研修で事足りると考えている学校がほとんどではないでしょうか。国際理解教育を推進していると謳っているならば、パラオのような、日本にとって歴史的にもつながりの深い国のことを、もっと授業などで取り上げるべきではないでしょうか。治安や衛生上の懸念はあるにせよ、教師たちは、いわゆる発展途上国にもっと出かけて行くべきではないでしょうか。

学校の授業との関連では、近現代史の取り上げ方も気になります。日本の南洋庁がなぜコロールに置かれていたのか、ペリリューの日本軍はなぜ全滅の悲劇に襲われたのか、なぜパラオは非核憲法にこだわるのか、こういう内容が学校の授業ではほとんど抜け落ちていることが分かりました。パラオではコロールでもアイライでも、錆びた兵器の残骸を至るところで目にします。トーチカもそのまま残っています。日本統治時代の出来事、コロールの空襲、日本軍の玉砕の様子などを、孫や曾孫に語り継ぐお年寄りがたくさんいらっしゃいます。すでに敗戦から57年が経ち、日本では戦争を経験した教師の多くは引退してしまいました。まして実際の戦場を経験した教師から話を聞くことは、今の中学・高校生にはほとんど不可能です。学校ですべてを教えることは不可能ですが、3月10日や8月15日や12月8日がどんな日であるのか、昭和20年がどんな年なのかを知らないでも、就職できたり大学に入学できたりすることは、何だかとても恐ろしいことに思えます。参加した生徒たちは、ペリリュー島などで戦争の恐ろしさが実感し、平和や人命の尊さをじっくりと考えていました。なぜ日本軍がパラオに駐留していたのか、なぜ日本人が3万人もパラオにいたのか、しっかりと考えていました。

このスタディツアーに参加するまでは、このような機会がほとんどなかったということは、このツアーの成果というよりは、日本の大人の怠慢というべきでしょう。太平洋戦争に限らず、パラオとのつながりに限らず、海外との歴史的な関係をしっかりと把握していかなければならないと痛感しました。

## (2) 「12年間一貫教育における『国際理解教育』の実践報告」

啓明学園初等学校・中学校・高等学校  
国際教育センター  
ディレクター 久保 敦

### 1 学園の教育理念

啓明学園は、1940年に創設された学校であり、創立以来、海外からの帰国児童生徒や外国籍児童生徒を積極的に受け入れ、その教育のパイオニア校として現在に至っている。学園には、多くの教育の特色がある。開校当時より帰国・外国籍児童生徒教育を中心に国際理解教育、自然環境教育、語学教育、体験学習教育、自己表現教育など独自の教育内容を築き上げてきている。

特に教育理念を達成するために、国際理解教育には力を入れてきている。その実践のひとつとして、一般生徒（国内生徒）、帰国生徒、外国人児童生徒、そして海外からの留学生が、共生し合える環境の充実を図り、多文化共生教育をめざしている。日頃の学校生活の中で児童生徒たちは、さまざまな異文化を体験した友人と触れあいながら、互いの価値観を理解し、視野を広め、世界を心に入れた物の見方を育てることができる。このことは、啓明学園の大きな特色のひとつである。学園の教育理念と教育方針は、次の通りである。

#### 教育理念

「広い視野のもと、豊かな人間性と独自の見識を持ち世界を心に入れた人を育てる」

#### 教育方針

- (1) キリストの教えから人間としての生き方・在り方を学ぶ。
- (2) 民族・人種の違いを越え、互いの人権と、一人ひとりの特性を尊重する。
- (3) 体験を通して、創造性を豊かにする。
- (4) 世界市民としての品性を身につける。

この教育理念と教育方針を基本に次に示す各学校目標そして、学年目標が設置されている。これらの目標を実現するために、より具体的な日々の教育実践が組まれている。

#### 学校目標

- 初等学校・・・「生き生きと、自分らしく生きる力を持った子ども」
- 中学校・・・「自立自行」
- 高等学校・・・「自己理解・他者理解」

#### 学年目標

- 初等学校1・2年生「なんだ・へんだ・ふしきだ・なぜだを大切にする。」
- 初等学校3・4年生「よく見て・よく聞き・よく考える」
- 初等学校5・6年生「筋道をたてて考え・すすんで行動する。」
- 中学校1年生「気持ちよく中学校生活を送ろう。」
- 中学校2年生「自分の視野を広めよう。」

#### 回答

- 中学校3年生「自分の行動に責任を持とう。」
- 高等学校1年生「自己発見・他者発見」
- 高等学校2年生「自己改革」
- 高等学校3年生「未来をみすえて今を生きる。」

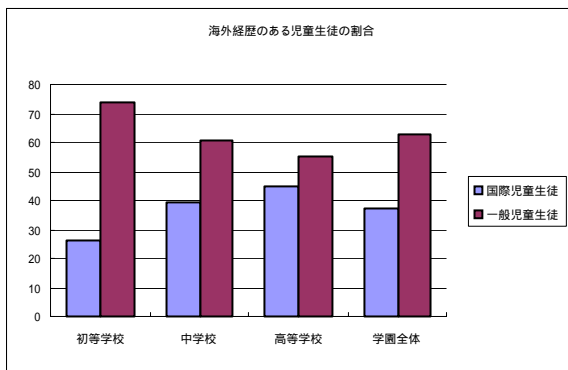
## 2 児童生徒の特色

現在学園は、保護者の勤務に伴い海外で生活・学習をしてきた「帰国児童生徒」と海外から保護者の勤務に伴い来日した「外国籍児童生徒」そして、国内で育った「一般児童生徒」の大きく3つのグループに分かれる。創立当初は、学園全児童生徒数も少なくまた、そのほとんどが、帰国児童生徒であった。現在では、学園全児童生徒数も1,000人を越え、一般児童生徒の割合が多くなってきている。ことからわかるように、他校にはないこの教育環境を求める保護者が多いことは事実である。

しかし、この児童生徒の区別をすること自体に、限界と無意味さが生じてきている。なぜなら、近年国際結婚、日本の国際校通学者や長期留学の増加などでさまざまな履歴を持った児童生徒が多くなっているからである。児童生徒の育ってきた環境が、大きく多様化、多元化してきていることにより、児童生徒を単にグループ化することは、困難である。学園の教育は、一人一人の児童生徒の個を見なければ実践できない環境がすでに存在しているからである。

そこで、学園では児童生徒の特色を把握するために、それらを大きく2つのグループに分けている。その分け方は、「国際児童生徒」と「一般児童生徒」である。国際児童生徒とは、帰国児童生徒・外国籍児童生徒・両親のいずれかまたは、両方が外国籍の児童生徒・1年以上の長期留学経験者・2年以上の日本語以外の言語で学習した児童生徒のことである。一般児童生徒とは、海外での生活・学習経験がない児童生徒である。図1と表1が示すように学園が持つ教育環境が、他校と異なることが理解できる。図1は、海外歴のある児童生徒の割合を示したものであり、表1は、その割合を数字で示したものである。学園全体で児童生徒の3人に1人以上が、何らかの関係から海外で生活・学習または、異文化を体験していることになる。

図1 「海外歴のある児童・生徒の割合」



\*国際児童生徒・・・帰国・外国籍児童生徒・その他の総称

表1 「国際生と一般生の割合」

|      | 国際生 | 一般生 |
|------|-----|-----|
| 初等学校 | 26% | 74% |
| 中学校  | 39% | 61% |
| 高等学校 | 45% | 55% |
| 学園全体 | 35% | 65% |

次に帰国児童生徒と外国籍児童生徒の生活・学習履歴の特色を考察してみると、表2、表3、表4が示す通り、そのほとんどが北アメリカとヨーロッパを中心に2年～8年間の生活を経験している。そして、彼らの学習環境は、現地校あるいは、国際校がそのほとんどであることがわかる。これは、学園がめざす多文化共生教育にもつながるが、他国で異文化を体験してきた児童生徒が、一般児童生徒に及ぼす影響は大きいものである。また、表5、表6が示すように非英語圏の国に滞在していた児童生徒もかなり多く在籍している。学習言語もさまざまであり、英語以外の言葉話す子供も少なくない。この環境は、学園の財産であり、今後も守り続けていくべきものである。

このような経験を持った児童生徒が、学園に約35%在籍していることで、日々の生活が、一般児童生徒にとって異文化との触れ合いを体験することになる。子供たちが、互いの違いや価値観の相違を理解し、認めあい、共有していく考えを育てることが現代の学校教育には大切なことである。ここに学園のめざす多文化共生教育の原点があり、国際理解教育を実践する意義が存在する。

表2 「海外滞在地域割合」

| 滞在地域   | 比率  |
|--------|-----|
| 北アメリカ  | 46% |
| ヨーロッパ  | 24% |
| アジア    | 17% |
| オセアニア  | 4%  |
| アフリカ   | 3%  |
| 南アメリカ  | 3%  |
| 中央アメリカ | 2%  |
| 中東     | 1%  |

表3 「海外滞在経験年数割合」

| 経験年数    | 学園全体 |
|---------|------|
| 2年未満    | 4%   |
| 2年～4年未満 | 30%  |
| 4年～6年未満 | 28%  |
| 6年～8年未満 | 20%  |
| 8年以上    | 18%  |

表4 「海外学校種別割合」

| 種別      | 学園全体 |
|---------|------|
| 現地校     | 70%  |
| 国際校、その他 | 17%  |
| 日本人学校   | 15%  |

表5 「海外滞在国内一覧」

アメリカ・カナダ・オーストラリア・ニュージーランド・イギリス・ドイツ・ドミニカ共和国・イタリア・メキシコ・フランス・シンガポール・ボソビア共和国・イタリア・アラブ首長国連邦・インドネシア・オランダ・オーストリア・オマーン・香港・タイ・ベネズエラ・フィジー・ネパール・ホンデュラス共和国・パナマ共和国・中国・マレーシア・インド・バングラデシュ・フィンランド・韓国・マレーシア・ハンガリー・ハンガリー・ブラジル・スペイン・スウェーデン・スイス・中国・フランス・ロシア・ベルギー・ボリビア・ヨルダン・ザンビア・モンゴル・スコットランド・ペルー・エジプト・アフリカ・スーダン・サイパン・スロバキア・エクアドル・アルゼンチン・フィリピン・トルコ・アイルランド・ケニア・台湾・ネパール・チリ・ギリシャ・エルサルバドルなど

表6 「非英語圏滞在国内と人数」

| 初等学校     | 初1 | 初2 | 初3 | 初4 | 初5 | 初6 | 合計 |
|----------|----|----|----|----|----|----|----|
| ドイツ      | 2  | 1  | 2  |    | 2  | 1  | 8  |
| ドミニカ共和国  |    | 1  |    |    | 1  |    | 2  |
| イタリア     |    | 1  |    |    |    |    | 1  |
| メキシコ     |    | 1  |    | 1  |    | 1  | 3  |
| フランス     |    | 1  |    |    |    | 1  | 2  |
| シンガポール   |    |    | 1  |    |    |    | 1  |
| ボソビア共和国  |    |    | 1  |    |    |    | 1  |
| イタリア     |    | 1  |    |    |    |    | 1  |
| アラブ首長国連邦 |    |    | 1  |    |    |    | 1  |
| インドネシア   |    |    | 1  |    |    |    | 1  |
| オランダ     |    |    | 1  |    |    |    | 1  |

|           |   |   |   |   |    |   |    |
|-----------|---|---|---|---|----|---|----|
| オーストリア    |   |   | 1 |   |    |   | 1  |
| オマーン      |   |   | 1 |   |    | 1 | 2  |
| 香港        |   |   |   | 1 |    | 1 | 2  |
| タイ        |   |   |   | 1 | 1  | 1 | 3  |
| ベネズエラ     |   |   |   | 2 |    |   | 2  |
| フィジー      |   |   |   | 1 |    |   | 1  |
| ネパール      |   |   |   | 1 |    |   | 1  |
| ホンデュラス共和国 |   |   |   |   | 1  |   | 1  |
| パナマ共和国    |   |   |   |   | 1  | 1 | 2  |
| 中国        |   |   |   |   | 1  |   | 1  |
| マレーシア     |   |   |   |   | 2  |   | 2  |
| インド       |   |   |   |   | 1  |   | 1  |
| バングラデシュ   |   |   |   |   |    | 1 | 1  |
| フィンランド    |   |   |   |   |    | 1 | 1  |
| 合計        | 2 | 6 | 9 | 7 | 10 | 9 | 43 |

| 中学校・高等学校 | 中1 | 中2 | 中3 | 高1 | 高2 | 高3 | 合計 |
|----------|----|----|----|----|----|----|----|
| ドイツ      | 5  | 1  | 2  | 3  | 1  | 3  | 15 |
| 韓国       | 1  | 1  | 1  | 4  |    | 1  | 8  |
| マレーシア    | 1  |    |    | 1  |    | 3  | 5  |
| シンガポール   | 3  |    |    |    | 2  | 2  | 7  |
| インドネシア   | 1  | 1  |    | 2  |    | 1  | 5  |
| ハンガリー    | 1  |    |    |    |    |    | 1  |
| ブラジル     | 1  | 1  |    | 1  | 2  |    | 5  |
| スペイン     | 2  | 1  | 1  |    | 2  |    | 6  |
| スウェーデン   | 1  |    | 1  |    |    | 1  | 3  |
| スイス      | 3  | 1  | 2  | 2  |    |    | 8  |
| 中国       | 1  | 2  | 2  |    | 1  | 1  | 7  |
| 香港       | 1  | 1  | 2  |    | 3  |    | 7  |
| フランス     | 1  | 1  | 1  | 1  | 1  | 1  | 6  |
| インド      | 1  |    | 1  | 1  |    | 2  | 5  |
| ロシア      |    | 1  |    |    |    |    | 1  |
| ベルギー     |    | 1  |    |    | 1  | 1  | 3  |
| タイ       |    | 1  |    | 1  |    | 1  | 3  |
| ボリビア     |    | 1  |    |    |    |    | 1  |
| ヨルダン     |    |    | 1  |    |    |    | 1  |
| メキシコ     |    |    | 1  |    | 1  | 2  | 4  |
| ベネズエラ    |    |    | 1  |    | 1  |    | 2  |
| アラブ首長国連邦 |    |    | 1  |    |    |    | 1  |
| ザンビア     |    |    | 1  |    | 1  |    | 2  |
| モンゴル     |    |    |    | 1  |    |    | 1  |
| スコットランド  |    |    |    | 1  |    |    | 1  |

|         |    |    |    |    |    |    |     |
|---------|----|----|----|----|----|----|-----|
| ペルー     |    |    |    | 1  |    | 1  | 2   |
| エジプト    |    |    |    | 1  |    |    | 1   |
| パナマ共和国  |    |    |    | 1  |    |    | 1   |
| アフリカ    |    |    |    | 1  |    |    | 1   |
| スーダン    |    |    |    | 1  |    |    | 1   |
| サイパン    |    |    |    | 1  |    |    | 1   |
| スロバキア   |    |    |    | 1  |    | 1  | 2   |
| エクアドル   |    |    |    |    | 1  |    | 1   |
| アルゼンチン  |    |    |    |    | 1  |    | 1   |
| イタリア    |    |    |    |    | 2  | 1  | 3   |
| フィリピン   |    |    |    |    | 1  | 1  | 2   |
| トルコ     |    |    |    |    | 1  |    | 1   |
| アイルランド  |    |    |    |    | 1  |    | 1   |
| ケニア     |    |    |    |    | 1  |    | 1   |
| 台湾      |    |    |    |    |    | 1  | 1   |
| オランダ    |    |    |    |    |    | 3  | 3   |
| ネパール    |    |    |    |    |    | 1  | 1   |
| チリ      |    |    |    |    |    | 1  | 1   |
| ギリシャ    |    |    |    |    |    | 1  | 1   |
| エルサルバドル |    |    |    |    |    | 1  | 1   |
| 合計      | 23 | 14 | 18 | 25 | 24 | 31 | 135 |

### 3 国際教育センターの設置（国際学級・国際交流）

学園には、「国際教育センター」が設置されている。この国際教育センターは、帰国・外国籍児童生徒教育を支援する国際学級と、国際理解・異文化理解教育の企画運営をする国際交流を担当するスタッフが配属されている。このセンターの配属スタッフとその仕事内容は、次の表に示す通りである。特に国際交流に関しては、国際交流コーディネーターが、初等学校～高等学校まで国際交流全般を担当し、教育のコーディネートを行う。国際交流プログラムの企画、運営、援助などその内容はとても幅広く、学園の国際交流12年間一貫教育をつなぐ重要な立場である。

しかし、国際理解・異文化理解教育を児童生徒と共に活動するのは、各教師であり、一人一人の理解と協力があってこそ、教育に反映できるものである。センターから教師へのコミュニケーション、情報の発信そして、研修など活発に行う必要がある。また、学園には、国際教育センターを支援する保護者の活動団体「グローバルネットの会」が3年前に発足し、保護者の多くも学園の国際理解教育の一員である。

「国際教育センター」配属のスタッフ・仕事内容一覧

| 担当名称         | 人数 | 仕事内容                 |
|--------------|----|----------------------|
| ディレクター       | 1名 | 初等学校～高等学校の国際関係の責任者   |
| 国際交流コーディネーター | 1名 | 初等学校～高等学校の国際交流の企画運営者 |
| 事務           | 1名 | 初等学校～高等学校の国際関係の事務全般  |
| 国際教育部（初等）    | 2名 | 帰国・外国籍児童教育と国際交流担当    |
| 国際教育部（中・高）   | 4名 | 帰国・外国籍生徒教育と国際交流担当    |

#### 4 国際理解・異文化理解教育の基本方針

12年間の一貫した国際理解教育を確立するためには、学園のめざす基本方針が大切である。その基本方針の特徴は、まず初等教育段階と中等教育段階をすべて実践の基礎期と設定し、基本的な知識や体験などを行う12年間と捉えている点である。そして、各学校を3段階に細分化し、それぞれ充実期・発展期・応用期と発達段階に応じた基本方針を設定している。

したがって、学園がめざす国際理解教育とは、「児童生徒の発達段階に応じた異文化体験を通して、他者を理解する気持ちと自己を見つめ直す心を育てる。そこから、多文化共生の素地を養い、国際社会で活躍できる人材の育成をめざす。」ことにある。

初等学校・・・基礎充実期

自然な形で国際理解の場を増やし、異文化を受け入れる心を育てる。

中学校・・・基礎発展期

さまざまな課題への探究心を育て、その調査・研究内容を発表す場を増やし、異文化を共に学び合う。

高等学校・・・基礎応用期

留学生の受け入れ、海外体験学習、長期海外留学、姉妹校との交流などの活動を通して、総合的に実践する。

#### 5 初等学校の実践例

基礎充実期である初等学校の国際理解教育の方針は、「自然な形で国際理解の場を増やし、異文化を受け入れる心を育てる。」である。その為には、日頃からの実践がとても重要であり、多くの時間を利用して次のようなことを行っている。

「初等学校の国際理解教育の実践例とその内容」

| 実践例                       | 内容   |
|---------------------------|--|
| 帰国・外国籍児童の受け入れ             | 初等学校1年生～6年生まで保護者の帰国に合わせて、受け入れられる体制を整備してある。           |
| 英語教育<br>(一般児童・帰国児童)       | 初等学校1年生から週2時間の英語授業が設置してある。一般児童クラスと帰国児童クラスの2クラスを編成する。 |
| 横田基地イースト・エレメンタリー・スクールとの交流 | 近隣のアメリカ軍横田基地内の小学校との児童、教師の相互交流。                       |
| 第5学年の招待プログラム              | 横田基地の小学校5年生を学園に招待し、日本文化や日本の学校生活を体験してもらう。             |
| Exchange Home Stay (EHS)  | 横田基地の小学校の家庭と週末を利用したホームステイ・プログラム。                     |
| 一日アメリカン・スクール体験            | 横田基地の小学校を訪問し、1日アメリカの学校生活体験をする。                       |
| 中学・高校の留学生訪問               | 中学校や高等学校へ来校または、学習しに来た留学生の初等学校訪問。                     |
| 保護者講師                     | 保護者の専門分野、体験、特技などを紹介し、広い視野を身につけさせる。                   |

その中でも横田基地イースト・エレメンタリー・スクールとの交流と中学・高等学校の留学生徒との交流は、学園独自のプログラムと言える。初等学校の段階では、遊びを通して、年齢の若い時期から異文化を体験した、日本文化を紹介していくプログラムが毎年定期的に組まれている。た

こ・かぶとの作成、雛人形・琴の鑑賞など自文化を学ぶ機会にもなっていることが大きな特徴である。

学園には海外に5つの姉妹校があり、そこから中学生や高校生が短期・長期の留学生を派遣してくる。これらの生徒たちが、学園の初等学校の児童に彼らの文化を紹介したり、共に学びあったりする機会があるのも学園の特色ひとつとされる。

たこ作成



琴の鑑賞



スロバキアからの留学生との学習交流



スロバキアからの留学生の踊り

## 6 中学校の実践例

基礎発展期である中学校の国際理解教育の方針は、「さまざまな課題への探究心を育て、その調査・研究内容を発表する場を増やし、異文化を**共に学び合う**。」である。中学校の段階では、授業やHRなどあらゆる場面で、ある課題を中心に調べ、その内容をまとめ、発表する機会を多く持つ。その課題の多くが、国際理解教育と関係のある題材である。

年間を通じて生徒会と準備委員会が行う「国際理解の日」は、学校が取り組む大きなプログラムの一つである。これは、生徒自らが、その年に学びたい国を決め、自分たちの力であらゆる視点からその国を調べ、その結果を全校生徒に伝え、全員と共に学ぶことが目的である。2001年は、「中国」がテーマとなり、中国の遊び・歴史学習(寸劇)・美術部作品公開・美術授業作品展示・国語表現作品発表・中国の歌・大使館の方の招待など2時間をかけての発表を行った。中学生へのアンケートの結果から2002年は、「オーストラリア」がテーマとなり、少しずつ準備が進められて

いる。

「中学校の国際理解教育の実践例とその内容」

| 実践例                    | 内容   |
|------------------------|--|
| 帰国・外国籍生徒の受け入れ          | 中学校1年生～3年生まで保護者の帰国に合わせて、受け入れられる体制を整備してある。                                    |
| 英語教育<br>(一般生徒・帰国生徒)    | 週に5時間の英語教育。一般生徒は、日本人英語教師4時間+ネイティブ教師1時間、帰国生徒は、ネイティブ教師5時間授業である。                |
| 横田基地イースト・ミドル・スクールとの交流  | 近隣のアメリカ軍横田基地内の中学校との交流。   |
| 海外体験学習                 | アメリカ(オレゴン)とオーストラリア(ブリスベン)の隔年の夏期休暇中のホームステイ・プログラム。3段階指導学習プログラムの確立。             |
| 学習発表会・国際理解の日 「中国を学ぼう！」 | 生徒会、準備委員会を中心とした、年間を通じたテーマ学習の国際理解教育プログラムである。3学期には、全校生徒対象の「学習発表会」と「国際理解の日」がある。 |



横田基地イースト・ミドル・スクールでの交流会「メキシコディ」参加

2001年「国際理解の日」年間準備実施事項

| 月   | 活動内容                                     |
|-----|--|
| 5月  | 中学校会内容決定、生徒会の準備開始、発表内容展示、社会科選択授業協力依頼     |
| 8月  | 教員対象夏期研修会「国際理解教育」                        |
| 9月  | 文化祭にて発表内容展示、中国大使館訪問                      |
| 10月 | 教員北京訪問、中1LHRで中国遊び、寸劇台本作成                 |
| 11月 | ボード展示、クイズ練習、生徒会寸劇練習、アンケート作成、各HRで中国についての話 |
| 12月 | 教員研修(JICA、北京、上海)                         |
| 1月  | 廊下展示、音楽科での歌、美術部の「龍」、劇練習                  |
| 2月  | 2月27日「学習発表会・国際理解の日」当日                    |

## 2001年「国際理解の日」の様様



中国「駒」のお披露目



クイズ形式で中国歴史の学習



寸劇で学ぶ現代の中国と問題点



中国大使館の方からのスピーチ

### 7 高等学校の実践例 1

基礎応用期である高等学校の国際理解教育の方針は、「留学生の受け入れ、海外体験学習、長期海外留学、姉妹校との交流などの活動を通して、**総合的に実践する。**」である。高等学校の基礎応用期では、学校全体でのプログラムより個別的なより実践を重視したものが多い。その為、海外からの留学生の受け入れ、海外体験学習、海外正規留学、外部団体研修参加など生徒の興味関心に応じて、実際に活動に移す時期であると考えた。その活動から各自の将来の展望を切り開く手段として、国際理解教育を総合的に行う必要がある。

過去3年間で受け入れた留学生の国と人数は、表7に示すとおりである。また、過去10年間で受け入れた留学生の数は、表8が示すように約200名となり、今後も積極的に受け入れていく方針がある。いろいろな国からの留学生と出会うことは、生徒の視野を広くし、多文化や異なる価値観と触れ合い、直接体験しながら感じ取ってもらう目的がある。日本で育った生徒が、留学生と共に一般の授業を受け、茶道などの日本文化を学び、文化祭などでの異文化紹介を鑑賞できることは、

大変すばらしい教育環境と言える。

また、高等学校2年生より第二外国語学習として選択科目の中に英語以外に韓国語、フランス語、中国語を設置しており、言語学習を中心に文化、習慣、食文化なども学ぶことができる。

校内での体験や学習に留まらず、高等学校の場合は、春期や夏期などの長期休暇を利用した海外体験学習や1年間の海外留学制度そして、姉妹校との交流、外部団体の国際交流プログラムへの積極的な参加を奨励している。

「高等学校の国際理解教育の実践例とその内容」

| 実践例                     | 内容  |
|-------------------------|---|
| 帰国・外国籍生徒の受け入れ           | 高等学校1年生～3年生まで保護者の帰国に合わせて、受け入れられる体制を整備してある。  |
| 英語教育<br>(一般生徒・帰国生徒)     | 英語教育にも特徴がある。週に5時間以上一般生徒と帰国生徒の3グループ7クラス制、J&Nクラス、25分スイッチクラスなど各生徒の能力が生かせる独自のクラス体制となっている。 |
| 第2外国語教育                 | 選択科目の中に英語以外に韓国語・フランス語・中国語を学習できる。  |
| 授業内での国際理解教育の実践(HR、授業など) | 礼拝、英語スピーチ、ディベート、私のメッセージ、理科研究論文、修学旅行、時事問題、ジャーナリズム                                      |
| 海外体験学習                  | アメリカ(オレゴン)とオーストラリア(プリズベン)の隔年の夏期休暇中のホームステイプログラム。3段階指導学習プログラムの確立。                       |
| 1年間海外留学制度               | 1年間の正規留学制度(姉妹校交換留学制度・外部機関留学制度)がある。  |
| 留学生の受け入れ                | 外国籍生徒以外に海外から日本語学習、日本文化体験を目的とした留学生の受け入れ。   |
| 海外姉妹校との交流               | オーストラリア、韓国、中国、スロバキアの姉妹校との交流。  |
| 国際交流掲示板<br>(情報発信の場)     | 体験学習、留学、研修などの情報を発信する場がある。また、留学の体験記なども閲覧できる。   |
| 外部団体研修への参加              | JICAなどの外部団体への国際交流研修。  |

表7「過去3年間の受け入れ留学生の国と人数」

| 年度     | 受け入れ国・留学生人数  |
|--------|--|
| 1998年度 | オーストラリア(10)、アメリカ合衆国(3)、フランス(1)、ドイツ(1)、インドネシア(1)、台湾(1)                        |
| 1999年度 | スロバキア(14)、アメリカ合衆国(5)、中華人民共和国(5)、カナダ(1)、インドネシア(1)、シンガポール(1)、モンゴル(1)           |
| 2000年度 | アメリカ合衆国(10)、中華人民共和国(12)、大韓民国(10)、ドイツ(1)、カナダ(1)、インドネシア(1)、スロバキア(15)、シンガポール(1) |
| 2001年度 | スロバキア(1)、ブラジル(1)、トルコ(1)、イタリア(1)、アメリカ(4)、シンガポール(2)                            |
| 2002年度 | タイ(4)、メキシコ(1)、オーストラリア(1)、ニュージーランド(1)、アメリカ(2)                                 |

表8 「過去10年間に受け入れた留学生の国と人数」

| 国籍        | 人数 | 国籍          | 人数         |
|-----------|----|-------------|------------|
| アメリカ合衆国   | 49 | フィンランド共和国   | 2          |
| オーストラリア   | 33 | トルコ共和国      | 2          |
| 中華人民共和国   | 25 | メキシコ合衆国     | 2          |
| ニュージーランド  | 22 | ブラジル連邦共和国   | 2          |
| スロバキア共和国  | 16 | タイ          | 4          |
| 大韓民国      | 10 | デンマーク王国     | 1          |
| フランス共和国   | 5  | ロシア連邦       | 1          |
| シンガポール共和国 | 6  | ボリビア共和国     | 1          |
| キルギス共和国   | 4  | スペイン        | 1          |
| ドイツ連邦共和国  | 3  | イタリア        | 1          |
| カナダ       | 3  | モンゴル国       | 1          |
| インドネシア共和国 | 2  | 台湾          | 1          |
|           |    | <b>人数合計</b> | <b>188</b> |



留学生とのサヨナラ・パーティー



留学生の茶道授業挑戦



## 8 高等学校の実践例2

### (1) 海外体験学習(3段階指導学習プログラム)

海外体験学習とは、長期休暇中(春休み・夏休み・冬休み)の1週間～3週間ホームステイを中心とした語学留学と文化交流を目的としたプログラムのことである。アメリカとオーストラリアは、隔年夏期休暇中に実施しており、毎年20名程度が体験学習に参加している。春季休暇や学期中には、中国・韓国・スロバキアの姉妹校訪問を中心に実施している。特に、夏期休暇中の海外体験学習プログラムでは、学園独自の「3段階指導学習プログラム」が構築され、参加生徒は、この学習プログラムに従って学習を行う。このプログラムの特徴は、参加生徒は各自研究テーマを設定し、事前調査、現地調査、事後まとめまで継続的に学習を続けることである。この研究テーマを設定することによって、参加目的を明確にするとともに、ホームステイ先でのコミュニケーションツールとして活用することを目的としている。

「海外体験学習 3段階指導学習プログラム」

| 第1段階プログラム  | 第2段階プログラム  | 第3段階プログラム  |
|--|--|--|
| 事前学習   | 現地学習   | 事後学習   |
| 1 事前説明<br>2 意志確認レポート提出<br>(研究テーマを含む)<br>3 選考会議結果発表<br>4 事前調査<br>5 渡航準備<br>6 語学学習<br>7 異文化理解・日本文化学習<br>8 さよならパーティー準備<br>9 オリエンテーション | 1 語学学習<br>2 ホームステイ滞在<br>3 現地調査<br>4 体験学習<br>5 さよならパーティー<br>6 調査発表<br>7 調査まとめ(英文) | 1 報告書提出<br>2 反省会<br>3 お礼状の作成<br>4 事後まとめ<br>(ポートフォリオ作成)<br>(模造紙発表)<br>5 文化祭での発表<br>6 冊子作成 |

2001年度アメリカ・オレゴン海外体験学習に参加した生徒の研究テーマ一覧は、次の表に示す通りである。そして、研究の調査結果をまとめ発表したポートフォリオの作品例も示す。

2001年度アメリカ・オレゴン海外体験学習「研究テーマ」一覧

|                                |
|--------------------------------|
| メジャーリーグにおける日本人プレイヤーの注目度        |
| 都市環境について                       |
| アメリカと日本の食文化の違い                 |
| オレゴン州ポートランドについて                |
| 日本とアメリカの生活・習慣の違い               |
| 外国人と日本人の音楽的環境の違い、生活の違い         |
| 福生・昭島市とオレゴン州のゴミ問題              |
| 日本とアメリカの障害者への対応や設備の違い          |
| 日本とオレゴンの環境対策について               |
| 建物を通して文化を知る                    |
| 日本とアメリカの違い                     |
| アメリカと日本との文化や習慣の違い              |
| Walt Disney と Disney Land について |

|                   |
|-------------------|
| 動物の世話について         |
| アメリカの食生活について      |
| 「食すること」への考え・意識の違い |
| アメリカの教育制度（学生生活）   |
| 日本との文化の違いや国際交流    |



ポートフォリオの作品例

(2) 1年間の正規留学制度（姉妹校交換留学制度・外部機関留学制度）

姉妹校交換留学制度とは、オーストラリア姉妹校カンタベリーカレッジ（ブリスベン）やスロバキア姉妹校マーキュリーなどへの1年間の留学制度のことである。外部機関留学制度とは、学園が指定した外部団体の国際ロータリーや東京国際交流財団（AFS日本協会）などの機関を通して、留学生の相互派遣を行うことである。この留学制度にも3段階指導学習プログラムを実施している。

「1年間正規留学 3段階指導学習プログラム」

| 第1段階プログラム   | 第2段階プログラム        | 第3段階プログラム  |
|---|------------------|--|
| 事前指導  | 留学中の報告           | 事後指導   |
| 1 事前説明<br>2 意思確認レポート提出<br>3 選考会議結果発表<br>4 渡航準備<br>5 オリエンテーション | 学期終了時に報告書と成績書を提出 | 1 留学レポート提出<br>(単位認定会議資料にする)<br>2 アセンブリで留学報告<br>3 次回の留学生へのオリエンテーション |

上記の1年間正規留学制度で2001年度と2002年度で海外へ長期留学したあるいは、する予定の生徒は次の表に示す通りである。昨年度は、合計8名の生徒が異文化体験と語学学習を目的として留学をした。帰国後は、留学規定により留学した生徒全員の単位が認められ進級した。

| 留学年度   | 留学団体         | 人数 | 留学国     |
|--------|--------------|----|---------|
| 2001年度 | AFS TMG交換留学  | 1名 | オーストラリア |
| 2001年度 | AYUSA        | 2名 | アメリカ合衆国 |
| 2001年度 | WYS教育交流財団    | 1名 | オーストラリア |
| 2001年度 | 国際ロータリー      | 1名 | オーストラリア |
| 2001年度 | 姉妹校          | 1名 | スロバキア   |
| 2001年度 | 姉妹校          | 1名 | オーストラリア |
| 2001年度 | ブリティッシュカウンシル | 1名 | アメリカ合衆国 |
| 2002年度 | 国際ロータリー      | 1名 | オーストラリア |
| 2002年度 | YFU          | 1名 | ドイツ     |
| 2002年度 | 姉妹校          | 2名 | オーストラリア |

交換留学と外部機関留学に関しては、学園独自の資格認定規定を作成している。それが、「留学に

関する規定集」(略称：留学規定)である。その規定に該当するものが留学の資格を認められ、1年間の留学許可が、学園長より出される。留学許可を認められた生徒は、留学後直ちに単位認定会議へ資料を提出し、進級判定が下される。

### (3) 姉妹校との交流(オーストラリア・韓国・中国・スロバキア)

学園は、海外の4つの姉妹校と提携を結んでいる。海外の姉妹校との交流は、かなり昔から実施されている記録がある。しかし、現在の姉妹校との交流は、1995年度から盛んに行なわれている。交流内容は、文化交流・スポーツ交流・語学交流・式典参加・フォーラム開催など様々な内容をここ7年間で実施している。特に、2000年度に実施した韓国姉妹校中東学院との「高校フォーラム 韓国と日本」では、両校の高校生が共同研究を行い、その研究内容をそれぞれプレゼンテーションやパネルディスカッションなどを通して発表、討議した。この内容については、省略するが、「第18回 金子賞 懸賞論文 異文化理解と高校教育」の「啓明学園高等学校における異文化理解教育の展開一事例 韓国と日本の共同研究フォーラム」(最優秀賞)で紹介されている。

| 交流年度   | 交流内容   |
|--------|--|
| 1995年度 | カンタベリーカレッジ(オーストラリア)へ生徒派遣   |
| 1996年度 | 信男教育学園(中国)生徒来校   |
| 1997年度 | カンタベリーカレッジ(オーストラリア)へ生徒派遣<br>中東学院(韓国)へサッカー部派遣 親善試合<br>中東学院(韓国)来校 体験学習<br>信男教育学園(中国)へ生徒派遣<br>信男教育学園(中国)生徒来校                    |
| 1998年度 | 信男教育学園(中国)生徒来校<br>中東学院(韓国)サッカー部来校 親善試合<br>中東学院(韓国)来校 体験学習  |
| 1999年度 | カンタベリーカレッジ(オーストラリア)へ生徒派遣<br>信男教育学園(中国)へ生徒派遣<br>信男教育学園(中国)生徒来校<br>マーキュリー校(スロバキア)生徒来校<br>マーキュリー校(スロバキア)へ生徒派遣                   |
| 2000年度 | 「創立60周年記念行事」 高校フォーラム 韓国と日本」<br>中東学院(韓国)・・・高校生フォーラム実施<br>カンタベリーカレッジ(オーストラリア)校長来校<br>マーキュリー校(スロバキア)理事長、生徒来校<br>信男教育学園(中国)理事長来校 |
| 2001年度 | カンタベリーカレッジ(オーストラリア)来校  |
| 2002年度 | マーキュリー校(スロバキア)創立10周年記念参加<br>カンタベリーカレッジ(オーストラリア)へ生徒派遣   |

海外姉妹校

①カンタベリーカレッジ【オーストラリア】1995年～

Canterbury College



〈学校概要〉クィーンズランド州ブリスベン郊外にある比較的新しい私立学校。幼稚園から高校までが同じキャンパス内にあり、生徒数も本学園とほぼ同じ程度。

〈交流実績〉95年夏期体験学習（約3週間）に15名を派遣して以来、隔年で毎回20名前後を派遣。また、96年から隔年で受け入れも行っている。1年間の交換留学では、受け入れが1名、派遣が3名。

②信男教育学園【中華人民共和国】1996年～



〈学校概要〉中華人民共和国の私学（中学・高校）における先駆的な存在。日本語科を設けたり、バスケットを校技にしたりといった試みも盛んである。

〈交流実績〉96年から毎年、体験学習生を数名ずつ受け入れている。本校からは97年・99年に体験学習生を派遣した。

③中東学院【大韓民国】1997年～



〈学校概要〉ソウル市内にある私立の男子校（中学・高校）。受験校ではあるが、スポーツにも力を入れている文武両道のエリート校。特にサッカーは韓国の全国レベルの実績を誇り、2002年日韓共催ワールドカップの代表選手を輩出する可能性あり。

〈交流実績〉97年夏期に本校高校のサッカー部が訪韓して交流試合を行い、98年夏期には先方が来日して交流試合を行った。以後、隔年で交互訪問する形が整いつつある。今年度の60周年記念事業にも生徒が参加してくれます。

④マーキュリー校【スロバキア】1999年～



〈学校概要〉首都ブラティスラバの郊外にある私立学校（11才～18才）。チェコと分かれた国家の将来を担う人材育成の為に設立された。英語とドイツ語の教育には特に力を入れている。

〈交流実績〉99年秋に体験学習生14名を受け入れ、2000年3月に本校から中学生10名を体験学習で送り出している。また、2ヶ月の体験入学生1名も受け入れた。

## 9 在校生からのメッセージ

2名の在校生にそれぞれが体験したことを中心に話をしてもらった。まず、高校1年生の湯浅英里さんからの発表を次にまとめる。

私は、2歳から7歳までドイツのフランクフルトに滞在していました。土曜日は補習校に行きながらも、普段は現地校に通っていたので、日本語の能力がかなり劣っていました。しかし、せっかく覚えたドイツ語をあっさり忘れるのはあまりにももったいなかったため、帰国後は横浜にある「ドイツ学園」に編入する事になりました。そして、そこでドイツ語の基礎を固め、小5の2学期になってこの啓明学園の初等学校に編入して現在に至っています。この学園の最大の特徴の一つは「国際的」という名の通り、沢山の多種多様の国からの帰国生、又その環境におかれている一般生の帰国生への理解などで、初めての日本の小学校、またなにかと「イジメ」が騒がれている時期でもありましたが、この学園だからこそ私は笑顔で啓明ライフをスタートすることができたのです。

啓明学園中学校では、生徒ひとりひとりの”探求心”を大切にしてくれます。また、ここでは”生徒”は授業を受身で受けるのではなく、常に自発的に受けています。先生の話”聞く”のではなく、その人の話の中に”入って”いくのです。先生と生徒の関係というのはまたとても friendly なので質問は気軽にすることができます。いつか、私が授業が終わったとき英語の先生に”I have many questions.”と言ったら、その日の放課後わざわざ私のために残って下さって、とことん分かるまで教えてくれました。

このようにして皆さんの前で話をしている私ですが、編入当時は本当に人前に立つなど考えられませんでした。中学2年のときのスピーチコンテスト。啓明のこのスピーチコンテストというのは、たいへん本格的なもので、ネイティブの先生による予選に合格しないと本選に行くことはできません。英語のクラスというのは、習熟度別でまず一般生クラスがあって更に帰国生のための国際クラスでR、Hとがあります。その頃、私はRクラスで私ともう一人の子を除けば全員英語圏の帰国生でドイツからの帰国生である私は彼らほどには流暢に話すことはできないのですが「やってみようじゃないか。」と思いきって応募したら、予選を通過、そして本選にいったなんと優勝することができたのです。

「**挑戦**」とは、自分の可能性を明らかにする、例え賞などといったカタチのあるものを得られなくても、自らが得られるものは十分あるし、**後悔**という2文字は存在しない。”そう確信した私は今までに発揮したことのない”**全力**”で物事に取り組むようになりました。・・・私はいきなり変わったものではありません。編入した時から”啓明学園”というこの環境が私を、私のみえないかたちでどんどん”自分のチカラ”をひきだしていってくれたのだと感じています。まさに、”**啓明MAGIC**”です!!

昨年度より開始された「国際理解の日」というのは更に啓明の特色を鮮やかにさせてくれるものだと思います。昨年度の仕上がりは満足のいくものでしたが、初の試みとだけあって衝突などのことが起きることもありました。しかし、それはひとりひとりがそれぞれより良いものを作り上げたいというおもいがあってからの”ショウトツ”です。下調べの為に”中国大使館”という未知なる敷地を訪れることができたのはまさに感動モノでした。今、あの日を再び思い出すだけでも胸がわくわくしてきます。

*If you come to Keimei, you will have enjoyable days!!*

もう一人は、高校3年生の岩倉壘君からの発表である。

僕は中学から一般生として啓明学園に(以下、啓明)に入学し、今年で5年目になります。今回は、これまでの5年間にこの啓明で体験したこと、そして、そこから学んだことを書きたいと思います。しかし、その前に、啓明について感じる僕の印象に少しだけ触れておきたいと思います。僕が初めて校舎に入ったとき、とにかくここは日本ではないところだなと思ったことを記憶しています。周り一帯が英語だらけで、もちろん日本語が基本ですが、校舎内の表示も日本語と英語が併用されている物ばかりが目立っていました。そして、前から来る人達が、日本人のように見えるのに、すれ違ったときには英語が聞こえ、とにかく、英語が飛び交っている印象を持ちました。そして、もちろん他の学校でもネイティブの先生はいらっしゃると思いますが、啓明は、初・中・高とそれぞれにネイティブの先生がいるので、どこにいても会うことがあり、本当に周りが違う空間であるような気分がしました。啓明に入学し、周りの空気になれたつもりでも、時々日本と違うことについては感じるがあります。では、具体的に僕が啓明で体験したことを代表して3つほど紹介したいと思います。

その一つ目は、啓明は私立の学校であり、かつ、帰国生を受け入れる学校です。そのために、授業中は教室が違って、ほとんど僕ら一般生と一緒に学校生活をします。当然、そうなれば、

帰国生とも友達になるわけで、僕にも帰国生の友人がいます。帰国生は、見かけは日本人でも、(当たり前ですが)英語がぺらぺらだったり、ハーフで、ほとんど外国人と見分けがつかない人もいます。はじめ、中学1年生の頃は、まだそう言った友達が周りにいることになれていなくて、『ああ、彼は帰国生なんだ』と、意識することもありました。しかし、帰国生1学年に1人とか、2人だとかでなく、時には10人、20人もいて、しかも、毎年必ず1人か、2人は海外から帰ってきた人が同じ学年に入学してくるので、今は、別に普通の友達と変わらず、新しく入ってきて、転校生と変わり無く感じるようになりました。友達に帰国生がいるということは教室ではそうでもないのですが、下校中となると、いきなり英語で話し出したり、数人で帰ると、ずっと英語だったりすることもあります。しかし、そうやって親しくなっても帰国生は、両親の都合のために退学してしまう友人もいます。そうしたクラスメートは、年1~2人ほどおり、必ずと言っていいほどに、お別れ会を開いたりするため、僕達も含めた啓明生にとって卒業式は年に何度もあるような気がするの、僕だけではないと思います。

二つ目は、おととしの2000年に、啓明は創立60周年を迎え、その記念活動として韓国の姉妹校の生徒と共同で文化フォーラムを高校生だけで行いました。僕は、その時実行委員として参加しました。韓国と連絡を取り合って、僕達啓明サイドは韓国側の文化などを、姉妹校である中東学院は、日本の文化などをそれぞれ調べ、そして、両国の高校生の意識調査を行って、11月のフォーラムの壇上にて発表しました。その間の3日間、彼ら、中東学院のメンバーとは啓明の旧生徒寮で過ごしました。その時、彼らとは英語でコミュニケーションをしながら同じ時を過ごしたのは、人生初めての経験で、とても刺激的な経験でした。

そして最後は、啓明では一般生を対象に毎年夏休みの間、3週間の期間限定で海外に体験留学に行く機会があります。僕はこの体験学習に昨年参加してみました。2000年の創立記念フォーラムでの韓国の人との交流と言う異文化体験をして、もっと海外文化を知りたくなったからです。そして、このときは、アメリカ、オレゴン州ポートランドへの体験学習に参加しました。午前中は、現地の大学の教室で英会話の勉強をして、午後は、科学博物館や、農業祭り、滝の名所や西海岸のビーチ、果ては乗馬まで様々な体験をしました。また、ホームステイもして、向こうの家族と一緒に過ごしました。正しく異文化を肌で感じる事ができて、とてもよい経験になりました。異文化を学ぶにはもちろん日本で学ぶことも大切ですが、しかし、本場に行かなければ、学べないことが山のようにあるということを知りました。

こうして日常的なことや、特異的なことなど様々な体験を啓明でしてきました。こうして、僕の学校について考えてみると、いつもそこには異文化を持った人がいて、また、それにいつも(友達や、特別な行事、体験学習などを通じて)、触れながら生活している空間があるように思います。そのために、相手を帰国生とか、一般生とか、どこそこの国の人とか区別をつける前に、そこに違う文化があり、人がいて、みんな習慣も考え方も違う訳で、そして、そのことは別に特別なことではない、また、当たり前のことだと言う概念が啓明にはあると思います。そして、そこから僕が感じるのは異文化の人だけでなく、同じ日本人だって、考え方の違う人がいると言うこと、つまり、人とは、そもそもみんな違うもので、そのことはごく自然なことだと感じるようになりました。そういった事は、別に啓明と言う一つの狭い空間ではなくて、どの世界もみんな同じように思います。そこで人々が、共に生活しているのですから、だからこそ、相手の考え方や気持ちに耳を傾けて、人と触れ合って生活していくことが、とても大切なことなのではないかと思えます。そうした人との結びつきについて、考えさせられ、また、学んだようにも思っています。

## 10 現在の問題点と今後の課題

開校当時より国際理解教育に力を入れ、62年間さまざまな取り組みを行ってきた。その中でも、初等・中等教育段階で活動の中心を担う「国際教育センター」を設置してある学校は大変珍しくまた、国際交流の企画運営・支援などを行う国際交流コーディネーター（1名）が配属されていることも他校にはない特色のひとつである。

しかし、近年国際交流が盛んになってきていることから、3校のコーディネイトを1名のコーディネーターだけで運営していくことから、その仕事の範囲と量が増え、外部との交渉など重要な役目を担う責任が重くなっている。コーディネーターの存在により、国際理解教育の一貫性、継続性、内容の充実性などさまざまな部分において、改善されてきている。その反面、教員の中には、コーディネーターへの依存意識が強くなり、教員の国際理解教育への関心が薄れていかにより工夫と研修が必要になる。国際理解教育の一番大切なことは、日ごろの授業活動の中で各教員が、国際理解の視点をどれほど意識しながら教育現場で実践していくかである。イベント的な行事や海外との交流が、その代役になる認識を持たれることは、大変危険である。したがって、12年間の一貫した国際理解教育の内容の充実、各学校の連携、教育活動の統一性を図るためには、コーディネーターと各教員との役割分担をしっかりと区別しながら、それぞれの協力体制を崩さず進めていくことが重要である。

学園には、毎年多くの留学生が来校することは前述した通りであるが、留学生へのさまざまな費用の捻出も大きな問題点である。留学生を受け入れる外部派遣団体の中には、今年度より助成金などを中止するところも出始めている。これは、日本の経済動向に大きく左右されるため、この状況は継続され、更に悪くなると予想される。そのため、しっかりとした費用の支援体制を持つことが必要である。費用の問題から、今後は留学生の受け入れ人数を制限し、計画を進める必要が出てくると考える。

最後に、12年間の連携した国際理解教育の強化を今後も進めていくためには、教員への研修が必須である。今年も学園の研究研修部と国際教育センターが中心となり夏期休暇中にこのテーマを中心に教員研修を3校合同で実施した。研修では、12年間の国際理解教育の現状報告と問題点、初等学校のめざす目標と詳細な実践報告を共有し、その後分科会で今後の展望や実践案を出し合った。ここで話し合われた内容を国際教育センターが整理し、付け加えるべき内容や削除・変更すべき内容などを各学校へ提案していく予定である。

### (3) 沖縄および韓国修学旅行における

#### 国際理解と異文化理解の意義に関する一考察」

神奈川県立白山高等学校 生地 陽

白山高校は横浜市郊外に位置する創立25年余りの比較的新しい学校である。普通科一学年6学級のうち各1学級が美術コースと国際教養コースとなっている。修学旅行は過去5年間は沖縄で今年より韓国で実施している。韓国修学旅行は神奈川県立高校の海外修学旅行の解禁を受けた試行の一つとして、今後の神奈川県の海外修学旅行の参考になることは間違いない。しかし、それは全国の実践の中でなんら目新しいことではない。また国際教育の観点から修学旅行という一回のイベントの効果には限界があることがおそらく指摘されているであろう。にもかかわらず、この場において発表をさせていただき意義は3つあると考えている。一つは修学旅行というイベントの意義を今一度考察すること、もう一つは特別な教育環境が整わなくとも海外修学旅行が実践可能と言う意味合いで、白山高校の実践は今後の参考になるのではないかということ、そして三つ目として韓国修学旅行はもちろん沖縄修学旅行についても異文化理解、国際理解の観点から見直してみたことである。全国の高校生が沖縄で学ぶことは、異文化理解や国際理解を深める上で、重要な意義があると私は考えている。本稿は議論が錯綜し、また執筆が修学旅行の直後であったために事後的評価が薄くなったが実践報告として性格からもご容赦いただきたい。

#### 1. 一般的な修学旅行の意義を再考する

今日、修学旅行そのものの意義を問われることが多い。格安ツアーの広告が市中にあふれている現在、「高い金を払って制約の多い団体旅行をする意義があるのか?」という厳しい問いかけに対し責任ある説明が求められている。特にはじめで行なう韓国修学旅行の準備にあたっては、経験のない職員、生徒、保護者の理解を得ることに相当の努力を払ってきた。そのような問いかけの中で、私は修学旅行の特徴を3つとりあげて考えてきた。すなわち 日常生活の場を離れる経験であること、 集団的宿泊学習であること、端的に言えば集団性を持つこと、 学習活動の一環であることである。これに沿って修学旅行への今日的な問題や議論を整理できるのではないかと考えてきたのである。

##### 1-1 日常生活の場を離れる経験としての修学旅行

今日の日本では、旅行による日常生活の場を離れる経験はそれほど困難なものでも貴重なものでもない。「めったに行かない場所への訪問」として海外修学旅行をとらえるならば、その議論は今日的には他の議論以前にパッケージツアーとの費用の比較に転化するように思われる。韓国修学旅行の実施にあたってはパッケージツアーの料金の内訳の分析とともに、旅行費用の構成に対する保護者の理解を深める努力を行い、その一方で10社にのぼる相見積もりを行なうなど妥当な価格にする努力も行なった。

##### 1-2 修学旅行の集団性の意義

修学旅行は集団的宿泊学習である、修学旅行の集団性は、企画・引率をする教員の立場からは、あらゆる側面で細心の注意を払わなければならないたいへんな仕事なのだという認識がある。また

一般にはガイドさんが旗を立ててぞろぞろと歩く自由度の少ない団体旅行の否定的なイメージがある。海外旅行も一般的になり、わざわざ学校が団体旅行を企画する必要はないというわけである。修学旅行の集団性そのものについて積極的な意義をみいだす指摘はこれまで非常に少なかったのではないかと思う。

そのなかで修学旅行の集団性を肯定する私を知る唯一の例はフランス文学者の故桑原武夫の指摘である(注1)。それは日本の学生たちのほぼ全員が歴史的あるいは文化的な遺産や施設を修学旅行で訪問する経験をもつ、どのような職業や階層の人でも日本の学校を卒業した人ならばだいたい京都とか奈良という場所に行ったことがある。そのようなことを行なっている国は世界に見当たらず、それはたいへん重要なことではないだろうかという指摘である。桑原武夫の主張は修学旅行によって日本社会に生きる人々が共通の教養の基盤を獲得することになることに注目しているのである。これを海外修学旅行を念頭に再考してみると、今後、日本の高等学校で海外修学旅行が普及してゆくと、日本の高等学校を出た人というのはどこかしら外国へ行ったことがあり、海外体験という共通の基盤ができることになる。例えば、先進県の福岡県の中学校や高等学校を出た人は、だいたい韓国へ行ったことがある。海外経験を全くしていない人は、外国について過剰な期待感や反対に恐怖感をもつ場合、あるいはその国に対するイメージをもてない場合があるけれども、博多の町ではどんな人でも、韓国を旅行した経験の上で韓国について語り合うことができる。これは国際理解、異文化理解あるいは国際協調・平和ということについて、非常に重要な共通の教養の基盤を持っているということになるのではないだろうか。生徒たちが、集団で海外体験を共有することが、その意味では肯定されるのではないかと私は考えている。

### 1-3 学習活動の一環としての修学旅行

公立高校の場合、修学旅行の旅行日数が決まっており学習内容は限られる。また「観光」旅行ではない旅行として「スタディツアー」がNPOや企業から数多く提案されている。修学旅行は語学研修やエコツアーそして体験学習などに絞った学校外のスタディーツアーと比較して魅力があるのか、また海外や沖縄に行かなくとも、同様な学習は可能なのではないかという検討も求められる。実際、本校では200名以上の生徒を引率することになるため、受け入れ施設のキャパシティーの制約や内容を思い切って特化できないことになり、「幕の内弁当」のような旅行になりやすい。そのような批判に応えるために、一般に学校では事前事後の学習を十分行なって一回のイベントではなく総合的なプログラムの中に修学旅行を位置づけている。本校も後述するような一連の事前学習を行うと同時に旅行の行程自体に姉妹校交流やファームステイ(農家へのホームステイ)体験など、高校生らしく、また「観光」旅行では体験しにくい内容を盛り込んだつもりである。

## 2. 白山高校の韓国修学旅行

白山高校の平成14年度実施の韓国修学旅行の主要な行程は下記のとおりである。行程は従来の沖縄修学旅行より1泊多い4泊5日である。海外旅行は出入国手続き等に時間がとられるために実質的な活動時間を確保するために1泊増やしたのである。特に韓国の文化や歴史を概観する学習と、十分な交流の時間を取るためにはそれが必要であった。内容の特徴は神奈川県と姉妹関係にある京畿道の2つの小都市における現地交流である。

表1 白山高校の平成14年度韓国修学旅行の行程

|     | 主要な行程                                |
|-----|--------------------------------------|
| 1日目 | 新横浜...羽田空港...仁川国際空港(関西国際空港乗継ぎ)【ソウル泊】 |
| 2日目 | ソウル市内の見学...民俗村...利川市の利川実業高校と交歓会【利川泊】 |

|     |                                    |
|-----|------------------------------------|
| 3日目 | 利川実業高校で交流プログラム...高陽市でファームステイ 【農家泊】 |
| 4日目 | 統一展望台...戦争記念館...ロッテワールド 【ソウル泊】     |
| 5日目 | 仁川国際空港から帰国へ                        |

## 2 - 1 2つの交流企画

白山高校の修学旅行の目的の一つは「韓国の一般市民の生活を体験し、市民レベルでの友好親善を図る。」である。多くの他府県の先行事例を参考にしながら、ホームステイと学校交流の検討を行なった。旅行は訪問する人と訪問される人の相互の関係が発生する。観光旅行ではほとんどが訪問されることを職業とする人々との関係になる。しかし、姉妹校交流や白山高校が実施する農家への宿泊は、一般の人々との出会いであり、特に相手への配慮と相互の努力が求められる。学校としての実績をつくりたいがために、相手校の都合を考えずに一方的に強要し失敗した「交流」の評判が広まり、ソウル市内で交流校を探すことは困難になってきたという噂も耳に入ってきた。交流企画はホテルの予約のように電話一本で準備がおわるものではない。民泊予定の農協へは1年半前から3回、姉妹校へは2年間で7回のべ8名の職員が訪問し、e-mail等でも活発な情報交換を行なった。

### 2-1-1 ファームステイ

学年の全生徒約200名が韓国でホームステイするという企画は全国的にも珍しい企画のようである。ファームステイは旅行会社から提案された企画であり、これを採用した。

京畿道高陽市はソウル市の北西に隣接し、ソウル首都圏向けの園芸農業特に花卉栽培で有名である。また南北の緊張緩和によって高層住宅団地の建設が進んでいる。高陽市の農協は国際交流に力を入れており日本の農協婦人部、農協青年部などの大規模なホームステイ受入れを行ってきた実績がある。農業学科もなく農業後継者のいる学校でもない高校生の受入れであるが本校の目的への理解をいただいた上で協力していただくこととなった。また、衛生状態等に対する日本側の心配に対して10軒以上の農家への下見を快諾された(その結果、私たちはこの地域の農家の居住環境の良さに驚いた。)、受入れ側も韓国のテレビで報道される「たびかさなる日本の『17歳の凶行』」に対する不安や、農繁期で多忙な事情など率直な情報交換を行なった。また80軒以上の受入れ家庭の調整というたいへんな仕事も職員の皆さんに引き受けていただいた。

### 2-1-2 姉妹校交流

旅行会社等から先行実践の情報を集めた結果、修学旅行における交流相手校は韓国内の小都市に交流校を求めるのがよいと検討を開始した。日本人高校生が年間4万人も訪問する韓国ではソウルをはじめとする修学旅行団が訪問する都市では日本人高校生は珍しい存在ではなくなっている。地方の小都市ならば自分の町を選んで訪問してくる日本の高校生をより大切にしてくれるのではないかと、また交流が継続すれば町ぐるみで交流を支えてくれるのではないかと期待があったのである。そんな中、偶然、本校講師の配偶者が高麗青磁の産地として名高い京畿道利川市出身であることがわかり、橋渡し役を買って出てくれることとなった。本校は陶芸教育を長年続けており、縁のある地である。こうして、相手校の意向、生徒の特徴も考え、また陶芸デザイン科があることから利川実業高校を交流、姉妹校提携の相手校とすることになった。

## 2 - 2 事前・事後学習

5年間の沖縄修学旅行の経験から事前学習のために教科を越えた協力体制をととのえて、韓国修学旅行に向けて昨年度と本年度に実践した事前学習を表2、3にまとめてみた。各プログラムでは在日本大韓国民団神奈川県地方本部および横浜コリアン文化研究会の協力により講師の派遣を得ることができた。

表2 平成13年度の韓国修学旅行の事前学習の実践

| 日 時       | 生徒対象の実践         | 内 容         |
|-----------|-----------------|-------------|
| 6月14日     | キムチプロジェクト1(希望者) | キムチづくり      |
| 6月27日     | 職員人権同和研修会       | 在日韓国・朝鮮人の人権 |
| 7月21日~22日 | 国際教養コース合宿(1クラス) | ハングル、韓国の遊び  |
| 夏季休業中     | 「地理A」自由研究課題(全員) | 韓国に関するレポート  |
| 9月16日     | 文化祭におけるサムルノリの上演 |             |
| 10月上旬     | 「家庭一般」調理実習(全員)  | 韓国料理        |
| 10月23日    | 利川実業高等学校と姉妹校提携  |             |
| 11月17日    | P T A講演会        | 韓国と日本の学校の比較 |
| 2月5日      | キムチプロジェクト2(全員)  | チャンゴ、ハングル他  |
| 3月22日     | キムチプロジェクト3(希望者) | トッポッキづくり    |

表3 平成14年度の韓国修学旅行の事前・事後学習の実践

| 日 時 | 内 容                               |
|-----|-----------------------------------|
| 6月  | e-mail 交換開始                       |
| 夏休み | 韓国に関するレポートの作成<br>川崎桜本地区への希望者による巡検 |
| 9月  | 世界史の授業での日韓の歴史の授業                  |
| 9月  | 「ソーラン節」練習開始                       |
| 10月 | 修学旅行のしおりの発行                       |

事後指導は始まったばかりであるが、まずアンケートを兼ねた報告書の作成を全員が行なった。次にファームステイ先への礼状と、姉妹校の生徒たちへの礼状の作成を行ない、韓国観光公社の写真・作文コンクールへの応募を念頭にした事後指導を検討している。

### 2-3 実施の成果

2つの交流企画は、教員達が最も心配していたものであるが大部分の生徒たちは韓国の人々の厚いもてなしの心に感動した。実施前には韓国観光公社のホームページに紹介されているような感動と感激のシーンが本校でありうるのか疑問であったが、そのとおりの感激を体験させることができたと考えている。今回の韓国修学旅行でよかった企画を3つ上げなさいという質問に対し生徒たちは圧倒的にファームステイと姉妹校交流を上げている。

#### 2-3-1 利川実業高校との交流

姉妹校とは2日にわたり交流プログラムを実施した。行程2日目の夕刻、利川市内のホテルでは両校の約400名の生徒と教員、利川市内の政財界から約30名の来賓が列席した交歓会を開催した。利川実業高校からは民族舞踊、農楽隊、テコンド、日本の歌謡曲の実演があり、白山高校はソーラン節と茶道の実演を行なった。生徒たちがどのように交流するか注目したが、あっという間に親しくなっていく様子に両校の教員が驚いた。ステージの公演そっちのけで、自発的に両校の腕相撲の輪が広がり盛り上がる場面もあった。お互いにe-mailや住所の交換をし写真を撮りあった。翌日は姉妹校で、サッカー、綱引き、陶芸実習、機械科の設備見学に参加した。最後は姉妹校生徒のアーチの間を盛大に見送られた。

#### 2-3-2 ファームステイでのコミュニケーション

ファームステイは言葉の通じない中で実施するために、ホストファミリーと生徒双方に日韓会話集を配布するだけでなく、コミュニケーションをとるために各種の「共同作業」をすることを提案し、そのためのアイテムの準備を進めた。例えば農家には一緒にキムチをつける、料理をつくる、

畑を見せてもらう、ゲームをする、カラオケを歌うといったことを準備していただいた。生徒も写真、プリクラ帳、トランプなどのゲーム、ビデオやCD、マンガ、日本のお菓子などを用意させてホストファミリーとの交流に使わせた。事前の心配をよそに、生徒たちは楽しく時間を過ごしたようである。翌朝、農家の人々の車で農協の事務所に次々と集合した生徒たちは、農家の人々と別れを惜しんで涙を浮かべたり、抱き合ったり、記念写真をとる姿が見られた。

### 2-3-3 印象の変化

旅行後の生徒対象アンケートの設問「今回の修学旅行で韓国に対する印象は変わりましたか？」の回答は「1. 以前より、よいものになった。」68人(40.2%/有効回答169人)、「2. 以前と変わらないが、よい印象であった。」72人(42.6%)、「3. 以前と変わらないが、わるい印象であった。」22人(13.0%)、「4. 以前よりも、わるいものになった。」7人(4.1%)であった。韓国に対してよい印象をもって旅行を終えた生徒は82.8%と大多数であった。また、「また、韓国へ旅行したいと思いますか、そうは思いませんか？」という問に対しては「1. ぜひ、行きたい。」または「2. どちらかといえば、行きたい。」と回答した者が57.5%と半数を越えた。対比するデータを持ち合わせていないが、また共通の教養の基盤といえるのかどうかはわからないが、確かに韓国修学旅行というイベントによって韓国に対する印象は大きく変わったと言えるだろう。

## 3. 沖縄、韓国への修学旅行を契機とした異文化理解、国際理解の推進

### 3-1 「日本舞踊」「パラパラ」「ソーラン節」

姉妹校との交流会の日本側の出し物を考えたとき、あらためて「日本文化」とは何であるのかを考えさせられた。韓国の相手校は日本の伝統舞踊「日本舞踊」をリクエストしてきたが、学校の活動としては日本舞踊に取りくんではいないし、披露できるほどの日本舞踊の踊り手を生徒の中に見つけることはできなかった。日本舞踊がだめだから、「盆踊り」にしようと言う声があったが、私は即座に反対した。そもそもこのリクエスト自体に韓国人の中にあるステレオタイプ化された日本文化のイメージが隠れているように感じたからだ。さらに日本人側にも急にふだん身近ではない「日本的なもの」、外国人の目で形成された「日本的なもの」をそっくりそのままご期待通り用意してあげようという意図が見えたような気がしたのだ。私はこれに対して「パラパラ」を踊ろうと提案した。気のない盆踊りを踊るくらいなら、「ギャル系」の女子生徒たちにとって身近な「パラパラ」を紹介したほうがよいだろう。これは現代日本の文化(サブ?)だ。しかし、姉妹校の交流を希望して集まった女子生徒たちにパラパラを勧めると、これも実際、彼女たちにとっては身近ではなかったらしく、「ソーラン節」を選んだ(注2)。彼女たちはソーラン節を朝から晩まで連日練習して、みごとに交流会を盛り上げてくれた。この経験からも自文化と異文化の認識にあたって対象となる文化の構成は実に複雑であることがうかがい知れるのである。

### 3-2 現代文化の多様な構成

韓国修学旅行を企画するなかで、生徒たちに韓国文化の何をどう教えたらよいのかを考え続けた。日本の植民地支配の歴史や儒教を大切にする韓国民の道徳意識、食事の作法などを教えるのも大事であろう。だが、それで同時代の韓国文化を理解したことになるのだろうか?事前学習の準備を通じて、文化の理解の前に現代社会における文化の構成が複雑で重層のものを教えておく必要があると強く思うようになったのである。

社会人類学・文化人類学などの学問分野では生活・文化の単位を、国家・国民文化のレベルの他に、非常に多様にとらえている。すなわち国家内の社会階層諸層のサブカルチャー、民族、さらに民族内のいくつかのグループ、また移民グループに代表される国境を越える集団とその文化、そし

てグローバルに展開する現代の文化、さらにグローバルな文化の各地での多様な受容のかたちなどである。社会・文化人類学者が繰り返し主張してきたことは、その国の文化は均一であるという発想に陥り、ステレオタイプ化された「その国の生活・文化」から外れる部分を無視するならば、それこそ、近隣諸国の生活・文化の理解を妨げになるということである。

そういう認識の下に、同時代の韓国理解をめざして、教材やプログラム化するには至らなかったが韓国に関するレポートを課す際に、歌謡曲、映画、スポーツなどどのようなテーマでもよいということをつけ加えた。また、K-POP と呼ばれる韓国音楽を授業中に聞かせてみたりした。幸い、ワールドカップサッカーの共同開催があり、マスコミもかつてなく多様な韓国文化の紹介を行なったことは助けとなった。

そして、このプロセスを経て、自国の認識、自文化の認識にも同じことが言えると感じはじめた。自国の画一的な認識が外国、異文化に対する画一的な理解の裏返しとしてあるのではないだろうか？そのとき、私は白山高校が5年間修学旅行の実施先としてきた日本の高校生が沖縄について学ぶことの大切さを再認識したのである。

### 3-3 国際理解、異文化理解の立場からの沖縄修学旅行の意義

日本国内に沖縄と言う独自の伝統文化と歴史をもち、他の府県とは異なる豊かな自然環境をもった地域があることを、多くの人が共有することは、日本という社会やその文化、歴史、自然とその多様性を知る上で、たいへん重要なことではないだろうか。沖縄という地域を理解することが日本人の異文化理解、国際理解を深めるということである。それは他国と異文化の理解にあたって多様性を意識し、相手をステレオタイプ化してみない態度を育てる可能性をもっているのである。ここで、本稿のタイトルに対する誤解があったとすれば、それが解けるはずである。日本に暮らす人々にとって旅行が身近なものとなった現在、自国の理解、異文化理解、国際理解の素養を外国への修学旅行ではなく、実は国内の沖縄への修学旅行で深めることができるという逆説をあえて提唱したい。

#### 3-3-1 沖縄文化の理解、日本文化の多様性の理解

日本「本土」(沖縄的にいえば「やまと」)の文化と沖縄の文化は大きく異なる。例えば、沖縄県の八重山地方は日本の最西端に位置しているが考古学の研究成果から弥生文化も縄文文化も共有していないことが明らかになっている。あるいは沖縄の年中行事をみると、沖縄の人々は正月に雑煮を食べないし、ひな祭りに雛人形を飾らない、端午の節句に鯉幟を掲げない、彼岸に墓参りをする習慣はほとんどない(沖縄島では二十四節気の「清明」の日に一族で墓参りをする)、夏休みに盆踊りを踊らないのである。

また、同時に日本復帰25年以上となる沖縄は日本国の国民文化を共有していることも確かなことである。例えば、法律、教育、行政はもちろんのこと、子供は「ポケモン」や「クレヨンしんちゃん」を見、高校生に一部は髪を金髪や茶髪にし、ファミリーマートやローソン、ユニクロで買い物をし、お父さんたちは巨人ファンで、田中耕一さんを賞賛し、お母さんたちは朝の連続テレビ小説をみ、ワイドショーを見ながら拉致事件を憂い、大晦日には紅白歌合戦をみる。年寄りにはゲートボールに精を出す。といったところだろうか。このような独自の文化をもちながら、国民文化も共有する沖縄の姿も、多様な文化を内在する世界の諸国の理解に役立つわけである。

現代の文化の特徴の一つが「国境を越える文化」、特に「コココーラ文化」と呼べるようなアメリカが発信し世界に普及した文化、そしてそのアメリカの文化が世界各地の文化的脈絡の中で異なった展開をみせていることである。さらに人の移動の国際化に伴って盛んになった移民のもたらす文化もある。沖縄の戦後のアメリカ軍統治時代のアメリカ文化の受容は日本「本土」と異なる。また

移民県の沖縄は移民先から帰ってきた人々の文化が花開きはじめている。食文化や音楽に展開するそれらの文化はわかり易い例を提供している。

現代文化の多様性という観点は日本の他の地域より沖縄という場所において気づきやすいように思われる。そして、繰り返しになるが、国際理解、異文化理解とは、異なる文化、生活、社会を知り、理解する。共感を持つ、相手を尊重する気持ちを持つということであり、そのためには同時代の文化の多様性の理解が大切である。日本の高校生にとって沖縄はその最もふさわしい学習の場の一つである。

### 3-4 国際理解、異文化理解の立場からの韓国修学旅行の意義

80歳を越える韓国の町の長老がこのようなことを言った。「これから日本、韓国、中国は儒教によって連帯して、ともに栄えなければならぬ。」と。私は隣国の人がこのように考えていることを知り新鮮な感動を覚えた。それは、決して日本で語る人はないが、非常に理解しやすい話であったからだ。グローバル化と呼ばれるこの時代、日本はグローバル化と看板を架け替えても、あいかわらずアメリカ一辺倒な国際化を追い求めるように思える。国際理解、異文化理解の立場からの韓国修学旅行の意義について考えてみた。

#### 3-4-1 「むずかしい」隣人ならば…

日韓の関係は「むずかしい」と言われ、むずかしいことを生徒に要求するのを敬遠する向きもある。また、生徒の行きたい国のアンケートを取ったら韓国は1位にならないかもしれない。しかし、そもそも国際理解教育や異文化理解教育は何ゆえ求められるようになったのだろうか？むずかしいのであればあるほど隣国への理解の研究を深めるべきではないだろうか。

#### 3-3-2 民族紛争や人種・民族差別に目をむける機会の提供

在日韓国・朝鮮籍の生徒が、自分の文化的な背景や国籍を知られることによって、差別されることをおそれて、韓国修学旅行に参加しないというようなことがあれば、その修学旅行が姉妹校との間でどんなに充実した交流を行おうと、私はその修学旅行自体は失敗だと考えている。在日韓国・朝鮮人への理解を深めながら、韓国修学旅行の準備を進めることは、国内の外国籍住民の立場、さらに世界中に存在する民族間の対立や差別といった問題に目を向ける機会を提供でき、異文化理解、国際理解の一側面を深める上で収穫の多いものである。

#### 3-3-3 日本文化・社会のグローバル化を学ぶ。

キムチは日本料理だと考えている子供がいると言う。同時代の日本の食文化にキムチが定着している。同時代の日本文化の一部を、日本に暮らす外国人たちが構成している。これはグローバルな現代の国家に共通の現象である。韓国修学旅行の準備の中で、東京の新大久保、横浜ならば伊勢佐木町界隈、そしてオールドカマーたちの暮らす川崎の桜本界隈に身をおいて、同時代の日本文化の多様性を見直す機会も提供できよう。

## 4 . 海外修学旅行の普及と国際理解・異文化理解教育の推進

国際理解教育や異文化理解教育を学校で始められない理由はいろいろある。「多忙である。」「生徒実態に合わない。」「他に学ぶべきことがある。」「職員間の連携ができない。」等々である。また、国際教育を実践したい気持ちが先走って、スタンドプレーを演じて、校内では浮いてしまうようなことに陥ることもある。海外修学旅行を実施し成功させるためには職員の協力が欠かせない。海外修学旅行は、学校行事として学年単位で準備を進めてゆくの、一度実施が決まると他の国際教育に関わるイベントに比べて、職員間の大きな協力が得られ、大きな成果が得られるのではないだろうか。

学校の中の国際化に取り組んでこなかった学校がこれを契機に、外国籍生徒の直面している課題に取り組むようになって感じている。また、海外修学旅行を巡る現地とのやりとりの中で、白山高校の職員も多く、在日韓国人をふくむ韓国人と出会ってきた。姉妹校の先生との相談の中では、同じ職業を持つ者同士の共感を感じることもあり、また、違いに気付くときもあった。職員自身も国際理解、異文化理解の経験を重ねてゆくことになる。

白山高校では、海外修学旅行を契機にPTA国際交流委員会、生徒の国際理解愛好会の結成、新しいカリキュラムの中で「国際理解」「ハングル入門」「異文化理解」の授業を開始する。イベントの限界と効果を見極めて継続的な教育活動につなげてゆきたい。

注1 例えば「日本文化の考え方」桑原武夫全集3巻、朝日新聞社、p416-429、1968.を参照。

注2 札幌の「よさこいソーラン祭」で演じられ、全国に広まっているアレンジされたソーラン節である。

#### 参考文献

1. 白山高校海外修学旅行を基軸とした「総合的な学習」研究会、「海外修学旅行とその前後の学習を題材とした総合的な学習の実践に関する予備的研究」,神奈川県立総合教育センター研究集録,2002.
2. 生地陽,「新学習指導要領「地理」における「近隣諸国研究」の扱い~沖縄からの視点をヒントに~」,神奈川県高等学校教科研究会地理分科会シンポジウム資料,2002.

## 質疑応答

### 1. 東京都 第一商業高校1年 中村桜子さんより、スタディーツアーについて

ほかにもいろいろな場所があるのに、なぜパラオに行ったのですか。

**回答(竹山教諭)** スタディーツアーのテーマが、資料にもあるとおり「日本人の忘れ物」「ちょっと昔の日本探し」「日本再発見」でしたので、日本と歴史的に関係の深い国を探しました。また、対象が中高生なのであまり遠い場所には行けません。治安の良い国でなくてはいけないということもあります。

他で行っていることの二番煎じはやめようということで、タイや中国は初めから除外していました。そこで出てきたのがパラオです。発表の中でも言ったとおり、パラオでは家に鍵をかけないくらい安全で、治安の面で問題はありません。水道も普及していて、また水道水以上においしいのが雨水です。雨水を飲んででも誰一人お腹を壊しません。そのような理由からです。

### 2. 千葉県 清水高校 鎌田教諭より、スタディーツアーについて

スタディーツアーは、高等学校国際教育研主催なのか、たとえば千葉では県の教育委員会が県内の高校生をアジアに連れて行くといった事業がありますが、そのような形のものなのか、背景を教えてください。

**回答(竹山教諭)** 理想的には東京都の国際教育研究協議会が主催できればよいのですが、いろいろな意味で限界があり、今回の主催は旅行会社です。旅行業法の縛りがあるので、旅行会社主催の方が、便利が良いということもあります。基本的に企画運営は青年海外協力隊OB会が中心となってやり、東京都国際教育研は後援という形でいろいろなバックアップをしました。私はかつて協力隊でガーナに行っていましたが、ほかにも東京都の教員の中に協力隊OBがいて、そのような人たちが橋渡しをする形で支えました。将来的には国際研主催にできればよいと考えています。

### 3. 香川県 高松第一高校 宮本教諭より、啓明学園と白山高校に

啓明学園は留学生を受け入れているということで、受け入れ家庭が必要だと思いますが、それはボランティアを募っているのですか。また、白山高校では発表の中で「姉妹校を探すのが大変だ」と言っておられましたが、もう少し詳しく教えてください。

**回答(啓明学園 久保教諭)** 啓明学園では登録制です。姉妹校から留学生が来る場合には、保護者全員を対象に事前に登録制にしています。受け入れ期間や、男女別の希望なども聞いておきます。AFSや国際ロータリーの留学生については、団体の方でホストファミリーが決まっているので、学園では教育の提供という形になります。

**回答(白山高校 生地教諭)** 韓国、中国の上海周辺への修学旅行の行程は似たり寄ったりです。姉妹校をソウルしないで探そうとすると、ホテルの近くということが条件になり姉妹校交流を持ちかけられます。そのようなことの蓄積の中で発表の中で言ったような問題が起こってきます。昨年、服装がひどいということで、「二度と来ないで欲しい」と言われたある公立高校のことも噂になって

います。ひとつには交流のための交流をあまりにも同じ地域の中で持ちかけていく、そのような中で独自に姉妹校を探していく大変さです。

探した後には姉妹校とは長い付き合いの中でお互い異文化の人であることも理解していくことも難しい。大変なのは私だけかもしれませんが・・・。

意思決定の差もあります。日本では下位のものが最初に出かけて行って外堀を埋め、最後に「校長が良いと言っている」ということになりますが、韓国はトップダウンで、校長がまず「やりましょう」と言い、それから細かい作業に入っていきます。それが異文化理解ということになり、そういったことも勉強になります。

### < 研究実践発表 >

写真 2 7

研究発表 1

写真 2 8

研究発表 2

写真 2 9

研究発表 3

## JICA エッセイコンテスト

国際協力事業団 国内事業部 国内連携促進課 課長代理 の竹内智子でございます。

中学生・高校エッセイコンテストのご案内をさせていただきます。国際協力事業団は皆さんご存知の方はいると思いますが、開発途上国への技術援助を行っているところです。私どもの事業のなかに、開発教育支援というものもひとつの柱として位置づけられていまして、そのなかで、より多くの国民や中学生、高校生を対象に開発教育を理解していただくために、エッセイコンテストを行っています。

エッセイコンテストなのですが、今回テーマとしましては「途上国や国際協力について考えること」など非常に幅広くテーマを設けさせていただいておりますので、こういった関連の内容であればなんでも良いということになるわけです。応募の規定ですけれども、高校生の部では400字詰め原稿用紙4枚以内ということでお願いしております。それを送っていただきまして審査に入りますが、その審査におきましては、今回この大会を開催しております全国高等学校国際教育研究協議会さんもお協力をいただくことになっております。最終審査の段階では作家の神津カンナさん、それからこちらの上松会長も御参加いただきまして最終的に特選から優秀賞まで25名を選ばせて頂き、その選ばれた25名に関しましては、春休みを使いまして開発途上国の現場に行ってくださいまして、現地で活躍する日本人の方の活動を見ていただいたり、私どもが開発途上国と協力している案件がどのように進んでいるか、あるいは機会があれば、ボランティア体験てきなことも組み入れられたらと言うことで考えております。ぜひ、この夏休みを使って書いていただいたり。国際教育の一環として先生方に使っていただければと考えています。

中学生の部と高校生の部と一緒に募集しておりますので、御兄弟が下にいたりとか、中高一環教育の課程のなかで使っていただけたらありがたいと思います。私ども、この広尾訓練所のなかに最終応募先を設定しております他、私どもの国内機関、支部センターが全国に17箇所ございまして、そちらの方でも応募にたいしてのお問い合わせ等対応させていただいておりますので何かございましたらお申しつけください。

## 5 講演会

### 「多難な時代を生きる力と国際教育」 若い世代の社会力を育むー

筑波大学教育学系教授 門脇厚司

写真30

初日の最後ということでみなさんもお疲れのこととされますので、私の国際経験を紹介しながらやわらかい話で進めていこうと思います。昨年度私の話を聞かれた竹山先生から講演の依頼を受けたわけですが、おそらくサブタイトルの方に期待されてのことでしょう。『若い世代の社会力を育む』というものですが、みなさん、この“社会力”という言葉は聞かれたことがありますか？2年半ほど前に岩波新書で“子どもの社会力”という本を書いて期待以上とはまだ言えないのですが相当に読まれて、ただ私の目標は100部で、

この本が100万人の人に読まれて、その人たちに「そうだ。そのとおりだ。」と共感をいただければ、今の子どもたちが育っている教育環境は明らかに変わっていくだろうと思っています。そのような主旨の本を出版したのは、今の日本の教育のありかたが相当におかしい、このまま続いたら日本は相当におかしくなるという危機感を持っているからです。

若い世代には社会性がないとあちこちで言われますが、私は社会性は相当あると思っています。ある社会に適応することができることを社会性があると言うわけですから。世論調査によっても、今のままの社会でよいと言う人はほとんどなく、八割の人は何とか変えなければならないと考えています。その好ましくない社会に適応することを考えると社会性のあることは必ずしも褒められたことではないわけです。私は今の若い世代を見て、社会性は十分にある、ダメ社会に十分適応していると考えます。例えば援助交際、あるいはテレビ局へ行ってバカ騒ぎをするといずれも帰りには相応のお金をもらえる。また、親を脅してお金を得るというのも同様に、相当に社会性があるからそのようなことをやると言わざるをえません。このようなことを新書のあとがきに書きましたらそこが一番おもしろかったという人がいて、大学の入試にも多くこの本から出題されていますが、まずこの箇所が最初に使われたほどです。

今の若い世代は社会性がないというのではなく、私の言う“社会力”がないとみるべきです、これは間違いないと思います。この“社会力”というのは私が新しく作った言葉でありまして、結論から先に申し上げますと、‘人が人をつながって新しい社会を作る力’ということです。これは社会を変えていく力ということでもありますね。ダメ社会に適応するのではなく、ダメなところは自分が社会の運営にきっちりに関わることで変えていくということを積極的にできるかどうかということが、“社会力”があるかどうかの基本的な中身と御理解いただきたい。そのような意味での“社会力”は若い人たちにはほとんどないと厳しく言わざるをえません。そして今の社会を考えれば、若い世代だけでなく、我々大人の世代も相当に“社会力”がないと言うしかありません。そうしましたら、さっそく編集者から次の本は「大人の社会力」にしてくださいと頼まれました。もっともいろいろやるがあるので、また今の日本の教育状況を大幅に変えるためには大学に拘束しな

いでくれと、4月から大学の管理職を降ろさせてもらっています。

今日みなさんにぜひわかっていただきたいのは、“社会力”のおおもとは、他者というもの、自分以外の人間への関心・愛着・信頼感というものが、社会をよりよくするのに積極的に関わっていくための下地になるということです。ですから、国際化する、国際的な貢献をする、あるいは地球の裏側に住んでいる人たちに対して我々がすべきことは相当いろいろな形であるわけですが、そのためにわたしが何をやっていったらよいのか、自分がすべきことが的確にできるためにも自分の身近にいる人たちについて具体的にわかること、具体的にわかるためには、まずその人にきちんとした関心をもてるかどうか、そのことが一番大きなところです。社会をよりよくするところまで進めていけるかどうかのおおもとです。関心が持てるからこそその人に近づいていろいろな話をしたりいろいろなことを一緒にやろうとする。そしてそりことを通してその人への理解を深めていくことができる。理解が深まれば深まるほどその人の立場になって物事を考えることもできるようになるわけです。そしてそうゆうことができるとしたらその人へ共感するとか、その人に感情移入するというのもやすやすとできるだろうということです。そのような関係になってはじめてその人への愛着が強まりこれからその人とのよい関係を続けたいと思い、信頼が生まれる。この人となら大変なことも一緒にやっいてこう、と具体的な誰かとそのような関係になれたときには必然的に社会に関心を持ち関わるようになっていくのです。社会へ目を向ける具体的な中身はさまざまな人に関心を持つことです。世界人口62億のうちたとえ10人でも20人でもまた1人でも2人にでもよいからとにかくしっかりと関心を持ち、とことんわかるようになってこそそれがベースとなり、その他の人間についても理解を深めることができるのです。その肝心要の他者への関心というものが今は著しく減退していると言えます。これが若い世代の決定的な問題でしょう。若い人たちは「関係ない！」という言葉をよく口にしますが、他の人への関心をなくしていることの表れでしょう。自分の周りの人に関心がなければ当然地球の裏側にいる人たちに関心の持ちようがないのです。

京都の舞鶴市の小学校で私の考えに基づいた実験的な授業を行っています。朝日新聞社から出版された「学校の社会学」の中に記した‘総合的な学習の時間というものをどうすれば上手く運営できるのか’を言葉だけではなく実践をとおして示そうとするものです。

私は、本日の弁論大会に興味を持っていました。何故かというと、10年ほど前、1年間イギリスに滞在したとき British Council 主催の弁論大会に出席したいへん興味深いスタイルを見たからです。ひとりづつではなく3人のチーム弁論だったのです。これこそ日本で実現させたいと思いつつ10年が経ってしまいました。3人のチーム弁論は中等学校の生徒が行うもので、司会者とスピーカー、そして聴衆からの質問を受け答えする役割に分かれます。興味深いのは、あるテーマについて3人がそれぞれの考え方をもちよりその3人の責任でまとめ、ここここはアピールすることができる、というようにスピーチを作り上げることです。また、日本と違うのはスピーチが終わると、聴衆から多くの質問が出させることです。答える役3番目の生徒はさまざまな質問に即興で答えなければなりません。そしてこの答えの内容がスピーチに加え審査の上でとても重要視されます。このような能力を持つことがこれからの日本に非常に大事だと思われるのです。私はこのチーム弁論にとっても関心を持ち、主催者側にいつごろ始まったものなのかと尋ねたところ「わからない」と言われました。オックスフォード大学・ケンブリッジ大学に入るために15世紀にパブリックスクールができたのですが、おそらくそこで始められたのではないかと思います。500年ぐらい続いているのですね。なぜ初等教育では行わないかということ、そこではまず自分個人の意見をしっかりまとめ誰かに理解してもらおう訓練をするのです。自分の考えをまとめて表現する能力がしっかりついた後に、今度は3人が一つのテーマについてそれぞれ違っていたであろう考え方を出し合

って、3人で話し合い、違いを調整して、3人の責任において統一的な見解にまとめ、それを聴衆に提示していく。このことが他の人との折り合いをつけていくいい訓練になるわけです。そしてさらに聴衆から質問が出されコーディネータが受け付けた質問にこたえていくわけですから、即物的な対応能力も求められる。チーム弁論大会によってイギリスの人たちはこういう大切な能力を鍛えているわけです。日本ではそういう訓練がほとんどやられていません。国際化する社会への対応が著しく遅れている一つの原因でしょう。

去年、山形大学付属中学校の3年生が(「子どもの社会力」を授業に取り入れた関係で)試みたのが日本で最初のチーム弁論といえるでしょう。こちらの弁論大会は今日で22回ということですが、25回目くらいからチーム弁論大会を取り入れてもらえたらと思います。こういう力こそまさに国際化時代における力になるのだと考えます。ディベートは盛んに訓練されていますが、これは何が何でも相手を打ち負かすというようなもので、あまり好ましいものではありません。いかに違いをお互いに認めながら、共同の責任で、ある意見に集約していくということこそ国際社会にひつようなことだろうと思っています。仕組みは野球の甲子園につながる形に似ていて、クラスから優れたチームが学年に出、さらに学年対抗に勝ち抜いて、学校代表、地区代表になっていきます。とにかく中等学校の全員が3人でチームを組んで、しかも500年も続けているということが大きくわれわれと違うと思います。それを進めるためには、今日冒頭でお話したように「他人に関心をもつ」ということが肝要になるわけです。

私は1940年生まれで現在61歳ですが、「国際社会の・・・」というテーマで話をするだけの経験を持っているのかと考えてみると、この年齢にしては国際派と言えるのかもしれない。中国の青島で生まれ、その後北京へ移り小学校へ上がる前に日本へ帰ってきました。1970年以降は年に2、3回海外へ出ています。異文化の人に対しさほど違和感を感じない日本人と言えます。また現在の大学、とりわけ大学院ではどの授業にも留学生が出席していて、アフガニスタンのカブル大学からも留学生が来ています。その人の3人の弟さんはみな医者で、以前NHKでも紹介されたパキスタンの難民キャンプで働いているのですが、その様子を留学生からじかに話を聞くことで私は平均的な日本人より、より確実な情報が得られ、アフガニスタンについての理解も深いと言えます。

このような例をもって何を申し上げたいかということ、つまり、具体的な誰かと頻繁に日常的に話ができることが一番。じかに関わることで得られる情報が一番であり、それは本よりも現地へ行くよりもストレートに理解につながるのです。だからこそ社会力のおおもととは他者への関心・愛着・信頼感であるということをここで改めて強調しておきたいです。

「多難な時代を生きる力と国際教育」というタイトルで話をしていますが私があえて「多難な時代を生きる力」というのを入れたのは、今年度スタートした総合的学習の時間という授業で育てる「生きる力」を念頭においてのことです。サブタイトルには『若い世代の社会力を育む』とつけましたが、私の考えをきっぱりといてしまえば、「生きる力の中核はまさに社会力だ！」ということなんです。

21世紀は多難な時代です。世界人口を考えても現在約62億とされる人口が2050年には93億人、多めに見積もると100億人といわれているわけで、今でも一日1ドル以下で生活しなければならぬ人が12億、人います。あるいはエネルギーの問題にしてもそれがなくなっていくということだけでなく、廃棄物が深刻で炭酸ガスが温暖化を引き起こします。それひとつとっても今でも相当大変なのに、これが93億の人間が使うことを考えるとどのような数字になるのか。これまで人類が遭遇したことのない様なやっかいなことが次々と起こってくることになる。そうゆ

うような事態を文部科学省も見越しているわけで、だからこそ生きる力を今から新しい授業を作つてまで育てなければならぬわけですね。これはまったく正しい判断だと思います。次々と起こるやっかいな事態をどうやって乗り越えていくのか、大人である我々の世代がどうしたらよいか答えまで用意することができません。若い世代の人たちは、自分たちが遭遇することになるそのやっかいな事態を自分たちで考えて、それを具体化することで乗り切っていかなければならぬのです。

文部科学省が生きる力について説明している最初のことは “自ら学び、自ら考える” です。あるいは自分で何が問題なのか何が課題なのかをきちんと見極めたうえで、それに対して自分たちが考えて対応する力をつけなくては行けない、ということです。自分で課題を見つけ、自分でその答えも見つけていくということですね。

2つ目は、これこそまさに “社会力” にぴったり重なるもので、まず他人をきちんと理解する力、他の人に共感できる能力、そういう他人と協力しながら何かを成し遂げることができる力。これが 「生きる力」 の2番目のこととして説明されていることです。

そして3番目は何かということ、健康で体力があるということ。これはいちばんわかりやすいですね。

この中で特に重要なのはやはり、2番目です。他人を理解し共感し協力するということ、このことこそが生きる力の中核にならないといけません。ですから私の言う社会力のおおもとが他への関心であり愛着・信頼感であって、社会を作ること積極的に自らが関わっていくことにつながっていくものとして、まさに生きる力の核は “社会力” だと言ってよいでしょう。そう考えているからこそ、私は、総合的な学習の時間でつけるべきは “社会力” だという考えで実践を進めているのです。

では、このような “社会力” はどのようにして形成されるのか。人間というのは社会的な動物だとあちこちで聞かされてきたと思いますが、ヒトの子は両親が人間だから必ず社会的な資質能力を、遺伝機構を通して先天的に備えているかということ、そうではないのです。社会的な生活ができるということは、自分の周りの人とよい関係を作って日々の生活をスムーズに送る資質能力があることだと理解してもらってよいと思います。もちろん言葉を覚えるというのもその中の重要な資質能力です。このような能力はすべて両親が人間であれば先天的に備わっていることだとわれわれは思いこんでいるのではないのでしょうか。野生児の話、ご存じだと思いますがオオカミに育てられたアマラとカマラの話ですとかいろいろの例がありますけれども、あの女の子たちは発見された後に人間にしてあげよういろいろな努力がなされましたが結局人間にはなれませんでした。早い時期に人間から全く隔離されてしまうと人間になれない、この事実だけ見ても先天的に私たちは社会的な資質能力を持っているとはいえないことがわかりだと思えます。

30年ぐらい前から新生児、生まれて1カ月以内の子がどのような能力をもっているのかが研究されてわかってきているわけですが、今までは人間というのは他の動物と比べると無能だ、能力が全くないような状態で産み落とされてきているのだと言われてきていました。これが近年の新生児研究によって完全に覆されました。ヒトの赤ちゃんは先天的に相当高度な能力を持っているということが次々と明らかになっているんです。どういう能力かについては詳しくはまた岩波新書をお読みいただきたいのですが、要約すると、いかなる環境にも適応できるような、今自分が置かれている環境がどのようなものなのか、ということを赤ちゃんは適切に認識しているということです。認識しているということはその環境に対して自分がどういうアクションをおこすか、どういう働きかけをしたら好ましい結果に結びつくかということも適切に判断し適切な行動を起こすことができる。そんな高度な能力をヒトの子は誰もがもっているということが確認されたのです。

環境というのは、もの(物)で構成されているもの、例えばここに机があるとか、ボードがある

とか、いろいろありますが、その環境についても赤ちゃんは適切な判断をしているわけですが、もうひとつ赤ちゃんにとってももの以上に大切な環境、我々生きた人間が赤ちゃんの周りにいるという状態があります。‘もの環境’と‘ひと環境’そのどちらも、赤ちゃんはきちんと認識しているのです。ただ、認識しているといってもいま目の前にいる人が自分の母親であるというようなそんな認識ではもちろんありません。”こんにちは赤ちゃん”とう歌の中で「こんにちはあかちゃん、わたしがママよ」という歌詞がありました。もちろんそのように誰かに教えられて認識するのではありませんが、少なくともこの人が自分にとってどのような人なのかということについては全てわかっている。そんな能力をどの子も持っているということです。

今私は言葉として自分の喉から音を出しているわけですが、（コンコンーコップをならして）このように言葉ではない音もあります。赤ちゃんはそれらを聞き分けてもいます。ヒトの赤ちゃんの脳というのは生まれた直後から猛烈にキャパシティが高いのですが、この事実もほとんど知られていません。生まれた直後の赤ちゃんには、1000億個といわれる脳細胞がすでにあるのです。ですから、この先天的に持っている高度な能力をフルに稼働させる。そういうような環境を私たち大人が用意をすることで、赤ちゃんの能力を十分に発揮させれば、他人に対する関心・愛着・信頼が育つということです。ここのところを我々は、すっぱり忘れてしまっているというか、知らずにきてしまっているんですね。私たち大人こそが子どもの本当の友達だということをすっぱり忘れてはいるのです。子どもは子ども同士仲良く遊んでいけばいい、なんていうのではダメです。私たち大人がきちんと関わらなければ、社会力のおおもとである他者への関心・愛着・信頼感は培われなれないのです。思いやりのある心を育てるとか、心が豊かだとか言葉ではあっさり言いますが、では”心が豊かだ”というのはいったいどういう状態のことをいうのか。どういう人間であれば心が豊かだということかと質問されたらほとんどの人が具体的にはこたえられないでしょう。私が”心が豊かだ”というのをどのように説明してきているかということ、その人のことがすっぱりと自分の中に取り込まれている、あるいはその人が自分の心の中でいきいきと生きている。その人が自分の目の前にいなくともやすやすと頭の中に浮かべることができる。そしてその人と、こういう会話をしたら楽しいだろうとか、私がこういうことを言ったらその人はこう返事をしてくるだろうとか、頭の中でいくらでも楽しむことができるわけです。そういうふうに他人のことがどれだけ自分の中にストックされているかその数が多ければ多いほど心が豊かだというべきだろうと思うわけです。私たちは自分がつらい思いをしていなくとも自分のよく知っている人がつらい思いをしていればそのことを頭の中でいくらでも再現することができます。そのつらさを自分が追体験することによって自分も涙を流すということができるのです。そのような人をどれだけ多く自分の心の中に住みつかせているかが、心が豊かかどうかを左右する重要なポイントだと思います。その人を自分の中に取り込むには、まさにその人とじかに関わるしかないのです。ところが日本では、1960年から高度成長期に入り、様々な形で他者と関わる絶対量がどんどん少なくなってきました。1日24時間の中どれだけ他人とじかに関わる時間を取り得ているか、さきほど申しましたが、大人が子どもとどれだけきっちり関わられたか、その絶対時間がどんどん少なくなっているのです。そしてその時間を少なくしているのは何かということ、テレビ、TVゲーム、パソコンです。また日本の家屋の歴史をたどって見ても子ども部屋を用意するなどというのはつい最近高度成長以降のことですね。当然勉強部屋で勉強している時間は誰かと関わることはないですね。24時間のうち、どれだけ大人と関わられたかということこの最も重要なことがどんどん抜け落ちていっているのです。このような状況では他者に関心を持ちようがありません。

こういう状況をどう打開するか。結論をいえば、レジユメの4番にあります。総合的な学習と

この絶好の時間を地域のさまざまな大人たちとじかに関わる授業にしないといけないということです。文部科学省が勧めているこの授業のやり方をいえば、グループを組んで学校の外でさまざまな体験をするというのがモデル的な授業としていわれています。このような授業を毎週毎週、担任の先生がひとりでやれるかというできません。当然、地域の大人たちの協力を否応なしに必要とします。とすれば、地域の大人たちが協力することで、子どもたちが大人たちと直に交わる絶好のチャンスなんです。そんなことをやったら学力が下がると言っている人がいますが、そのような人には、私の『学校の社会力』（朝日選書）を是非読んでほしいと思います。人間の脳がその性能を高めるために何が有効性があるかということ、ここ10年くらい世界の脳研究者たちが次々と明らかにしていることですが、人と関わる、社会生活をきちんと営むために必要な資質能力こそが、まさにヒトの脳の性能を高めているというのです。逆に、テレビを見るとかテレビゲームをしているときは、今年の7月になって新聞雑誌でかなり大きく取り上げられていますが、脳の状態は痴呆症の高齢者の脳の状態と全く同じということです。人とじかに関わるということこそが脳の性能を高めるのです。そのことをほとんど忘れています。テレビを見るとか、テレビゲームをするとか、パソコンをいじると賢くなるのではとと思っている人がいるかもしれませんが、これは違うのです。むしろ、脳にダメージを与えているという事実がわかってきたんですね。”社会力を高める”そのために他者と関わるということを徹底的にやっていたら、脳の機能が上がり、学力も高まっていくということが理解されていない。総合的な学習などをやったら学力が下がるという親の心配があると学校関係者たちが言っているようですが、そんなことは決してないということを今日はぜひわかっていただきたい。

最後になりますが、今62億の人口がこれから、70億80億90億になる。そのような状態の中で私たちが、人類が生き延びるためには、“共に生きる”“共生社会”を、私はこういう社会をDecent Societyと言っていますが、こういう社会を実現していかなければなりません。人口がどんどん増えやっかいな事態に立ち向かって行かなくてはならないときに、まさにこのDecent Societyを具体的につくっていかなくてはダメなのです。そしてそのために何が最も必要かとなれば、まさに他者への関心。これを基に他者への理解を深め、共感を深め愛着を深め信頼感を高めることこそ必要なのです。そういうような資質能力をつくるためには誰かとじかに関わる以外ないのだということですね。総合学習を3年続けたら明らかに効果が出るとの研究結果もでています。高等学校でもぜひ力を入れてほしいと思います。

そんなことをしたら有名大学へ行けないのではと心配されるかたがいるかもしれませんが、昨年東京大学に入った学生がどんどん大事なものを失っていると私に手紙を書いてくれた人がいます。川人博さんという弁護士の方で、10年前から東京大学の教養学部で授業を担当しています。10年前より9年前・・・と時代が新しくなるほど、学生たちは何か大切なものを失っていると感じてきた、しかしいったい何を失ってきているのかは言葉にしえないということでした。それで私の本を読んで、そうだ、この学生たちが失っていたのはまさに”社会力”だ、と気づいたということで、ぜひその社会力について私に授業で話をしてくれ、という依頼が5月にありました。実際に約束を果たしたのは11月ですけれども、それ以来、その講座を社会力養成講座という名前にしているかということで、その川人さんの授業は社会力を養成することを目標にした講座になっているんですね。何をしているかということ、まさにさまざまな体験を持った人たちに会う、あるいはさまざまな事件の現場に直接行く、ということです。ある出来事に関わっている当事者に直接会って話を聞くということを社会力養成講座の中身としているのです。300名くらい受講生がいるわけですがその7～8割が法学部へ行き、そしてどこへ就職するかということと中央官庁に行きます。人間に

ついてほとんど関心がない、わからない、当然社会についてもろくにわからない、そのような人たちが日本の将来を決定する政策に携わると思うとぞっとすると、川人さんは言ってらっしゃいました。今や中高一貫の学校を経て東大に入ってくる生徒が9割でその学校へ入るためにどこへ行っているかという小学校の2～3年生から塾へ行っているということです。そのようにして東大へ入ってきた生徒がいったいどうなっているのか、とにかく銘柄大学に送り込めさえすればいいのだと言う考えは絶対に捨ててほしいと思います。

もっともっと話をしたいことが多いのですが、時間もオーバーしてしまいますので、以上で私の話は終わりとします。今日話したことの何かひとつでも頭に残していただければ幸いです。ご静聴ありがとうございました。

以上

## 6 シンポジウム

### (1) 全体会

**高島**：皆さんおはようございます。只今ご紹介いただきました都立第一商業高校の高島みゆきと申します。初めに本日の流れを簡単にお話ししたいと思います。10時20分を目途に、こちらの3人でパネルディスカッションを進めます。その後、分科会に別れていただき、さらに討論を深めていきたいと思ひます。昨日は有意義な講演・講義等がございましたが、どちらかというところ「聞く」とことが多かったので、今日は普段思っていること・考えていることを皆さんにご発言していただく会にしたいと思ひます。遅くなりましたが、本日のパネリストの3名をご紹介したいと思います。大会抄録の43ページをご覧ください。まず初めに、ガーナのオディー・サンプソンさんです。サンプソンさんは元ガーナのサッカーナショナルチームの選手でいらっしゃいます。現在は赤坂でガーナ料理レストランをされております。現在、息子さんが日本の学校に通っており、本日は父親として、そして日本の子どもたちにサッカーを教えるボランティアの立場からもご意見が伺えるのではないかとと思ひます。次に、トルコのドウイグ・ジャンジュアさんです。現在、トルコ中央アジア文化センターでトルコ語の教師として働いております。アンカラ大学の日本語学科を卒業され、トルコやパキスタンの高校・大学で日本語の教員の経験もある方です。本日は、日本とトルコでの教員という立場からのお話が伺えるのではないかとと思ひます。最後になりましたが、トンガの山賀ペリンドさんです。ペリンドさんは日本人と結婚され、在日22年になります。現在は、一男三女の母親であり、本日は日本の学校に通わせる母親としての意見も伺えるのではないかとと思ひます。また非常に面倒見のいい方で、在日のトンガ人の日本のお母さんとして皆さんから慕われております。またトンガ語の通訳やトンガ料理を紹介するなどの活動もされております。私事になりますが、ペリンドさんとは10年近いお付き合いになります。私が青年海外協力隊でトンガに行っていた経験あり、それが縁で在日のトンガ人と親しくつきあうようになりました。では、サンプソンさんから自己紹介を兼ねまして、なぜ日本に来るようになったのか、それから現在どんなことをされているかを2～3分をお願いいたします。

**サンプソン**：皆様、おはようございます。サンプソン・オディーと申します。ガーナから来ました。なぜ日本に来たのかということですが、私は、元々、機械技師なんです。ガーナのポリテクニクを以てサッカー部に所属していた。セミプロだった。卒業してはいったところは、サッカーチームあったから、そのサッカーチーム入ってやっていたんです。そして怪我で引退したんです。チームのメンバーの一人が、私をヨルダンの仕事を紹介してくれたんです。2年間働いていた。2年目にうちの会社と日本の会社が合併して、新しい機械の説明書を読んだら、日本語で書かれていた。部長さんが、「あなたアラビア語も英語も日本語も話せれば、契約で勝負できるから習った方がいいよ」と言ってくれた。「どうやって勉強する?」と聞いたら、「1年間休んでも、同じ仕事戻ったら、そのまま続けることができる study leave はどうか」ということで、日本に行ったんですよ。86年は、イラン・イラク戦争の最中だったんです。イラクは海がないところで、海あるところはイランとの国境になっているからあまり使えない。ヨルダンの港を使って色々物を運んだりしていた。戦争になって、すごく危なくて、日本に勉強に行くことに決めた。日本に1か月住んでみたら、全然違う雰囲気、同時に日本アフリカ友好協会の設立の段階で、みんな忙しいから、事務局も誰もいなかった。日本語学校終わったらアルバイトで事務局行ったんです。安心だし、給

料もいいので、そのまま日本アフリカ友好協会の事務局にいたんです。そして私のビザについて、大使と相談しながら、アフリカプロモーションという会社を設立しました。今まで、レストランや学校でのイベントとかやってきました。少し前は中学とか高校とかでサッカー教室やったりしたりしてたんですね。コーチじゃないけど、子どもたちとサッカーで遊ぼうというイベントをやっていました。よろしくをお願いします。

**高島：**どうもありがとうございました。続いてドゥイグさん自己紹介をお願いいたします。

**ドゥイグ：**皆さん、朝早いうち来てくれて、ありがとうございます。私はトルコ人です。主人の関係で日本に来ました。主人は大学で経済のマスターコースをとっています。日本に1年くらいいます。今回で日本は3回目ですけれども1回目に来たときには1か月間。2回目に来たときは9か月間もいまして、いい思いでばかりで、日本のこといっぱい学んで、国に帰りました。学んだことを働いた職場で、学生たちにあるいは周りにはいるトルコ人たちが日本の話をできて、うれしいと思います。何で日本語を勉強しましたかと皆さんによく聞かれる質問ですけど、この返事は私もよくわかりませんが、きっと赤い糸で結ばれた縁だと思います。(笑い)これは感謝している縁です。今、日本でトルコ語を教える経験が、また私の人生の勉強になっています。

**高島：**ありがとうございました。最後になりましたけれども、ペリンダさんをお願いします。

**ペリンダ：**皆さんおはようございます。山賀ペリンダと申します。日本に来てもう22年になります。主人は映画のカメラマンです。最後にトンガ行ったのはもう10年前で、もう変わっているかもしれません。トンガが小さな国で、結構平和な国です。

**高島：**ありがとうございました。私もトンガ料理が食べたいときにペリンダの家に行って食べさせてもらっています。それでは早速本題に入っていきたいと思います。それぞれの立場から、「皆さんが日本の子育て・学校・社会についてどんなことを感じてらっしゃるのか、日本とそれぞれの国との違いは何か、どうしてそういう風になるのか」を10分くらいでお話しいただきたいと思います。では、サンブソンさんからよろしくをお願いします。

**サンブソン：**日本の学校に関しては、組織的にちゃんとしていると思います。保育園から大学までちゃんとしていると思う。組織的に言えば、今は日本と同じシステムで633制。だけど前は633制じゃなかった。急に633制に変えて、ジュニアセカンダリースクールとシニアセカンダリーのバランスとれない。それは一番困っていることです。あと、育ち方、家族のコントロールがガーナと比べると全然違う。ガーナは少し大人になると親戚の方に住まわせるんですよ。自分の事をでき、あまり甘く育たないように親戚の所に住まわせるんですよ。日本といえばお母さんが一緒だから子どもは甘すぎると思いますね。お父さんが、考えすぎでストレートじゃなくなったんですよ。知り合いで日本人の家族がいますが、東京タワーと一緒にいったんですよ。途中の駅から10歳くらいの子がお父さんに「抱っこしてほしいよ」といい、奥さんが「ダメよ」と言ったらね、子どもがお父さんにキックしたんですよ。お父さんは本当に(それに対して)何もしなかったんですよ。ガーナならそこですぐチェックするんですよ。そこは甘すぎと思う。お父さんはステイタスなくなったんですよ。小さいころからチェック・コントロールしないとそのままになっちゃうんですよ。それは、私が一番気にしてる所。私の子どものヨシカズも今日本の学校で1年生なんですけど、先生が家庭訪問来た時、私たちが子どもをチェックするのをびっくりした。「お父さん、大丈夫ですよ。」「いや、大丈夫じゃない、こうしないといけないでしょ。」お母さんの言ったことを熱心にやりたくない時、お父さんがチェックするんですよ。それは日本のお父さんやお母さんたちもやってほしい。ガーナと日本の若者比べると全然違う。日本の若い男の子は、ピアスしたり、ズボンをこういう風に下げたり・・・、ガーナでは全然ないですよ。うちの子どものことで、私の所

に友達のお母さんが電話かけてきて、「ヨシカズ君が危ない」といつてきた。よく聞くと子どもが「あなたはなぜ黒いんですか」いい、それで喧嘩になるですよ。今はたくさんのアフリカ人やアメリカ人もいっぱいいるから、一緒に住むのが大事と思うから、それをお願いしたいんですね。

**高島**：ありがとうございます。サンプソンさんの方から、耳が痛い話がありましたが、日本の子育てや家族のコントロールの仕方が違う。少し日本の学校も、親も少し甘いのではないかというような意見がでました。それから外国人との共存という面でいじめの件についての問題提起がありましたので、更に深めていきたいと思います。では、その次にトゥイングさんよろしくお願いたします。

**ドゥイグ**：今日皆さんの前で、教育のようなテーマで話すのは、とても難しいと思いますが、自分のつまらない意見を伝えたいと思います。世界第2次大戦後、日本は大きい傷をおって、その傷を早くなおした理由の一つは「教育」ではないかと世界中の研究者によって確認されています。第2次大戦後は、子供たちの学校の建物が崩れた時でも、両親は学校に行かせるようにしましたが、それはとても大事だと思います。何となく日本社会の中は教育に対して知識が、心の深いところからあるのではないですか。日本の教育制度というと、本当に完璧ですと考えますけれども、まだ足りない点があるじゃないのですか。一番大事だと思っているのが、暗記されたものを覚えるだけの勉強ということですね。これはこれからも続くと思います。しかし、21世紀に入ってもっといい方向に変わっていくと思います。ITというコンピューター時代に入って世界中の情報を受け取ることができ、暗記される教育より学生たちに調べることを自分で探して、自分で解決するように教えるという教え方は大事です。何で日本人は外国語をしゃべるのが下手かということですが、それはやっぱり後ろに隠れているいくつかの理由があります。いい環境で育つ子供は学校でもとても成功ができるじゃないですか。日本の先生方のことを見ると、以前は厳しかった先生の姿は、最近は優しい先生の姿に変わってきました。これは本当にいいのでしょうかよくないのでしょうか。今はそれを解決するのは難しいと思いますけど将来で。最近日本の学校でも先月とか2～3ヶ月前に行ったとき、先生はやさしすぎる態度がありました。トルコの先生を見ると厳しいです。ちょっと威張っているような先生の姿は今でも続けていますが、すこしずつ変わったと言うことを気がついてもつづけているということです。

トルコって多民族の国なんですけど、歴史から「将来」のことを学ぶというのも大事じゃないんですか。この点も足りないと思います。歴史の勉強はちょっとスキップされていると思います。

日本の教育制度って完璧と言いましたけれどもやっぱり足りない点の一つ、(道徳という文字を書いた紙を示しながら)私日本語の字とても下手ですけど、「道徳」ということは足りません。たとえば「リンゴ」という言葉を皆さん聞いたら、それぞれの民族の子供たちにあるいは人に「リンゴなんですか」と聞いて、答えはそれぞれじゃないですか。たとえばトルコ人だとしたら「甘酸っぱい味の緑のリンゴ」日本人に聞いたら「甘くて水っぽい赤のリンゴ」とそれぞれですけども、教育ももちろんそれぞれになっていると思いますが、文化に合わせて国民の重要さに合わせて勉強していただいたら日本はこれからもっと世界の第1番目のところをとるんじゃないですかと思います。どうぞよろしくおねがいます。

**高島**：どうもありがとうございました。トゥイングさんからいろいろなご発言がありまして、日本の教育は完璧だと思っていたらいろいろのご発言でした。たとえば暗記される教育が多いとか、これからは調べる、自分で問題解決していくような学習も必要なんじゃないか、それから、日本の教育等がしっかりしているからなのかもしれないけれども外国語をしゃべるのは日本人は非常に下手なのではないか。それからサンプソンさんの話にもあ

ったようにやはり優しい厳しい、このことがだんだんだんだん変化してきていてもしかしたら、甘やかし優しすぎる親や教員が増えているのではないか。それから歴史からもっと学ぶことがあるんじゃないか。それから日本の道徳については少し文化も合わせて国民の重要性も合わせてもう少し重きを置いたらいいのではないかというようなご意見がございました。皆さんもいろいろご質問あると思いますけれども、ご質問等は最後にさせていただきます、先にペリンダさんのご意見をうかがいましてその後で討論を深めていきたいと思ひます。それではペリンダさんお願いします。

**ペリンダ**：私は、小学校、中学校、高校でPTAをやっています。トンガは100%クリスチャンなんで、親は子どもを育てたんだから、子どもは親に口ごたえしてはいけません。電車とか乗ったら、自分の年上の人がいれば椅子に座ってもらい、自分は立ってる、これがトンガのルールなんです。家にいる時は、親が子どもたちを見る。学校では、先生たちが面倒見る。日本の学校のPTAに集まっている時、お母さん・お父さんたち結構うるさいんだよね。「先生はこれが足りないとか」先生が子供たちをしゃべるの止められないことも結構あるんだよ。お母さんたちが先生のことを責めてるの。私の考え方は、ちょっと違う。お母さんたちは、子供は1人か2人いるんだけど、先生は一人で何十人も面倒見ないといけなないし。それから、家事のこと、自分も使ってるものは自分で片づけして、自分たちで洗わなくちゃいけないし、子どもたちも自分たちの仕事を分けて、今日は誰、次の日は誰がやる？というように子どもたちを育てたんだ。息子もいるんだけど、それも甘いことはさせない。化粧やピアス、髪をそめるとか、そういう甘いことは大嫌いなんだ。たまには娘も「なんで私はこれやらなくちゃいけないのよ」高校生になってからもそういう風にいわれたの。答えは一つだけ、「あんたのためにそういうふうに教えてるのよ。」自分でやれないと自分で生きていけないのよ。何でもお母さんにやらせたら、お嫁はいけません。私の娘は高校卒業してから「ママ、ピアスをしたいから耳穴あけていいですか」きいてきた。私は「自分で責任をとりなさい。もしいつか後悔したらあんたの責任ですよ」って言った。私もピアスをつけてます。自分で穴開けたし、子供たちと同じ性格だと思います。不良もやったし、悪いこともやったし、(笑い)でも結婚してから、自分の悪いところをわかってるから、自分の子供もあたしの性格は絶対させない。息子は今192センチ、私より背高いけど、でも私は絶対負けない、腹立つときは、髪を毛ひっぱったり、殴ったり、絶対私負けない。これは私と息子や娘と戦う。結婚するまでは、たたいて面倒見てあげるの。これがトンガのルールなの。日本の国は、たぶん親が甘いんだと思うけど。それでも親を責めてはいけないと思う。でも自分の子どもがかわいくても、子供の将来を考えた方がいいと思ひます。先生たちも昔の方が結構厳しかったの。最近怖い先生がもういなくなった。携帯電話も、うちの子は高校生卒業してから、自分で働いて買ったの。高校生の時は、「それは買ってあげない。誰としゃべってるのかわからない。家の電話で連絡すれば誰と話しているわかる。だから私は携帯は買ってやらない。自分で働いて自分でしゃべる分を払えば、買ってよいよって言ってる。」日本は少し甘いと思う。

**高島**：ありがとうございました。日本で子育てをして、保護者や先生も含めて甘いのではないかというお話がありました。3人に共通して話を聞いたのですが、教育現場も含めて子供に対する接し方の違いがだんだん浮き彫りになってきたように思えます。そこで3人に質問をしたいと思ひます。昨日、大学の門脇先生という先生がお話してくれた問題の一つの提起の中に、「現在の日本の学校や社会の中で、直接体験やいろんな人とつきあったり働いたりことが減ってきているんじゃないか。実は非常に大切なことだ」と言うご意見がありました。このことについて、どうお考えでしょうか。「きちんと人と人が向かい合って生活しているのか」ということも含めてお話しただけるとありがたいのですが。トゥイングさんいかがですか。

**ドゥイグ**：門脇先生に賛成します。日本は学歴社会の民族ですから、保育園から始まる厳しい教育競争は、一番いいところを得るため、子供たちより最初に両親たちから始まるんじゃないですか。直接、子供に小さい頃から知識の教育の激しさで育てて、子どもに活動を与える教育は少ないということも私も感じます。ペリンドさんもおっしゃいましたが、家事をさせるということは、トルコの中でも、学校でも家でもお母さんを手伝うということ、田舎の方では、学生たちは畑で両親を手伝うように育てますが、日本では少ないんじゃないですか。外国人に対して、家族以外に対しての行動・交流は少ないととても感じます。人と人の交流が一番いい勉強だと思います。だから子どもたちに学校以外の知識を与える場も大事なことだと思います。

**高島**：ありがとうございました。家族以外の人との交流や、家事が少ないという意見をおっしゃっていただきました。ペリンドさんはいかがでしょう。

**ペリンド**：子供は同じ親でも同じ性格には絶対ならないの。優しい子もいるし、悪い子もいるし、ませてる性格もいるから、いろいろやらせないといけないと思う。それと、日本人は英語しゃべれない人が多い。それが気になってるわ。英語は保育園から習った方がいいんじゃないかと思うね。トングは、小学校から英語を勉強して、学校の中は英語でしゃべるの。

**高島**：ありがとうございました。サンブソンさん、いかがですか。

**サンブソン**：程、ガーナの話をしましたが、人生の中何でも基盤づくりなんですよ。ガーナは留学が多いんですよ。自分の子供たちが自分のこと出来るために寮入れているんですね。甘くなることは少なくなっていく。親戚のところで生活をさせれば、甘くなることはなくなるんじゃないかと思うんですね。あともう一つは、英語を話せない日本人が多いですね。日本が発展してるのは間違いないけど、英語は国際的な言葉だから、話せるようになれば一番得なんじゃないですか。だから英語を勉強して欲しいですね。

**高島**：ありがとうございました。親から離れて生活するということが、ある意味自立につながっていく。甘えから脱却出来ることもあるのではないかという意見や、国際交流をもっと盛んにして、英語等外国語をもっとやった方がいいんじゃないかというような意見がありました。いろいろな観点や視点をを出していただきました。具体的なことについては、分科会でお話をさせていただきたいと思います。皆さんに、今の日本の社会で具体的にこんなことをやった方がいいとか、このように変わって欲しいとか、具体的な何か提案がありましたら、伺いたいと思います。ペリンドさんどうぞ。

**ペリンド**：日本は個室があって、自分の部屋にすることが多いし、狭い家の場合は、自分でアパートを借りるという。トングは結婚するまで親と一緒に暮らして、結婚して親から離れる。これトングのルール。アパートもあまりないし、マンションもないし、日本は借りる部屋がいっぱいあるから、子どもたちは自由にしたいからとか、言って欲しくないことがあるから出ていくなだけれど、それはちょっと違うかもしれない。

**高島**：ありがとうございました。個室ですよ、子供部屋にずっと子供たちがいて、親とか他の家族と接することが少ない。何かというとアパート借りて勝手にすんでしまうとか言うことがあって、それが問題なんじゃないかというような意見だと思います。トゥイグさんはいかがでしょう。

**ドゥイグ**：以前にはあった日本精神をまた生かすということだと思います。トルコから見ると、私が日本がなんで好きかということ、「日本の文化」です。日本の習慣をよく守っている民族であるということです。お互いにとても尊敬する民族であるということです。日本精神を生かしていくということが大事だと思います。それと「知識と心の感情を分かち合う」ということを教えることがもしれません。日本人を見ると、「個人の遊び」が流行っているということでした。人と人が関わる

こと、いろいろな人と交流しつつことを教えた方がいいかもしれないと思っています。また、(紙を示して)「孝」ということ。子供たちに最初から教た方がいいんじゃないですかと私が感じることで、いかがでしょうか。

**高島**：ありがとうございます。日本の精神を生かすと言うことですね。それからキーワードとしては「分かち合う」って言う言葉を使っていたらと思うのですが、知識と心の感情を分かち合う、人と人の関わり方がこれからのキーポイント、そして「孝」の提言だと思います。ではサンプルソンさんお願いします。

**サンプルソン**：私の方はこうして欲しいのは2つあるんですね。まず、基盤として小学から英語を勉強して欲しいんですよ。ナショナルランゲージとして必要です。大人になると高いお金払ってノバとかジオスいろいろ行く必要がないと思うから・・・(笑い)英語も話す、日本語も話すそれは一番大事と思うんですよ。

あと先生たち、お父さん、お母さんたちに昔の日本のいろんなことを、今の生徒たちに教えて欲しいですよ。豊かな日本の文化が変わってきてるんですね。お父さんとお母さんたちは、ほんと汚い仕事して立派な日本を作っていたわけ。子供はそれやりたくないんですよ。セブンイレブンでアルバイトして、お金作ってすぐアメリカとかハワイに行ったり、それしかやらないんですね。昔の苦労した時のことを、勉強させればみんな考え直すと思いますよ。

**高島**：はいどうもありがとうございました。サンプルソンさんの方からは英語教育を力入れたらどうかということ、それから昔の日本をもう少し勉強した方がいいのではないかと、豊かな反面汚い仕事大変な仕事が忘れられてきていて一生懸命努力した苦労したことをが、忘れられているんじゃないかというご意見でした。ここで、フロアーの方からもご質問をいただきたいと思います。現在高校生の皆さんは耳の痛い話しも多かったかと思ひます。是非高校生からもどんなことでもいいですので、3人にご質問・意見・感想をお願いします。初めに所属とお名前をおっしゃってから質問・ご意見をお願いします。

**中村**：第一商業等学校1年の中村です。学校の教育で欠けるところがあると言われてましたが、実際に海外旅行もしたことがないから、はっきりとしたことはわかりません。高校生も、やってる人はやってるし、勉強してる人は勉強してたり一概には言えないと思います。学校教育だけがすべてじゃないか、そのあと自分で有効的に何を学び、それを自分で蓄えていくかというのがとても重要なんじゃないかと思ひます。

**高島**：今の質問(意見)に対して。

**ドゥイグ**：中村さんですね、いい意見出しましたけれど、学生でも人それぞれですね。それは自分の性格にもよると思ひますが、最近、文部省で決定されたことの一つは、学校以外で交流などを推進するという情報を聞いていますが・・・

**高島**：他にご質問ご意見等ございますか。

**広田**：静岡県三島高校の広田と申します。先日、カナダの知り合いの人が、向こうの教育のことを少し教えてくれる機会がありまして、ご存じのようにカナダではフランス語と英語が話されています。いくつかの学校が、家庭で英語しかしゃべらない子どもたちのためのフランス語の学校があって、その学校ではフランス語しかしゃべらないそうです。小学校1年生から学校ではフランス語の読み書きで勉強して、確か高校くらいまではずっとフランス語しか習わないそうです。そして高校に入ってやっと英語の読み書きを学ぶそうです。家では英語をしゃべっているのに語学の方には問題ないということを知り、日本でもそういうのをやったらいいんじゃないかというのをつい先日聞いていました。それでペリンダさんがトンガでも学校では英語でしゃべっていて、トンガの学

校では先生方がみんな英語の読み書きが出来るっていいことですか。

**ベリンダ**：いい質問だね。英語は小学校から勉強する中学校からは、トンガ語の授業以外は、英語で書かれた教科書で、英語で勉強する。親や友達と喋ってるときは、トンガ語で喋るが、学校の中の生活は英語で喋っている。高校から英語を勉強するのはもう、頭の中が堅くなってると思うんで、幼稚園とか小学校で教えた方が一番いいと思います。

**高島**：私もトンガに滞在していた経験がありますので、補足します。トンガはイギリスの保護領だったので英語が入ってきました。中高生は、トンガ語以外の教科書は、全て英語で書かれています。学校では「全部、英語で話さない」というルールがあります。これは、トンガの人口が10万人と少なく、いろいろな国に行くことが多いですので、トンガ語+やはり外国語(英語)が必要になってくるわけです。他に手が挙がっておりますので・・・

**高橋**：芝商業高校の高橋です。皆さんのお話を聞いて、私の学校ではスカート丈の基準があって、ちょっと厳しい学校なんですけど、それって高校生として最低限のルールだと思う。流行とかで、不満のときもあるんですけど、将来的には大事なことだと思っています。道徳といってもやっぱり、学校だけではないような気がします。家での協力とかが必要だと思います。小学校、中学校で道徳の授業が私たちにもあり、でもその授業は、印象的がなく、何かを伝えられたのかわからないんですね。今、学校で道徳って授業をしようとしたときに、「何を何で伝えていくのかな」と皆さんに聞きたいです。

**高島**：今の質問は、学校で「道徳」の授業があったならどんなことをしたらいいか、今でも小学校と中学校で道徳の授業ってありますが、彼女は、あまり心に残らなかったと。もし、教えるとしたら、学校の方でどんなことをしたらいいかということです。

**サンブソン**：一番早いのは、先生のことを真似すれば一番いい。家庭の方でも、お父さん、お母さんの真似をするのが一番いい。みんなしっかりしてるから・・・。たくさん先生たちは、しっかりしていると思うよ。先生のことを勉強して真似すれば間違いないと思うよ。

**ベリンダ**：日本人はちょっと心の中を出してないと思う。もうちょっと心の中を開いて、友達を日本人だけじゃなくて、外国の人たちとちょっと付き合った方がいいんだよ。友達を作って、話して、どういう風に生活をするか、良いところいっぱいある。悪いところもある。

それから、先生たちの仕事はただ教えるだけなの。それを選ぶのは、あなた達自分で、先生の話聞いて、自分の心を開いて、良いことは吸収するそれが良い勉強だと思うよ。それから、外国のことも勉強もした方がいいと思うよ。いろいろな人と知り合って、いろんな言葉勉強したほうが良いと思うよ。

**ドゥイグ**：こういう道徳の授業では、「自分は必要とされる人間であること」とか、「人を愛するということ」「自分を自分で評価をすること。わたしは、価値のある者ですということ」「私の周りには、いろいろな人がいること。違いがあるということ」などです。

**高島**：人それぞれに価値があるということですね。他に何人か手が挙がりましたが、この後の分科会の方で、議論を深めていただけたらと思います。本日、分科会の方に参加してもらう3人の留学生をご紹介します。アフリカのシオラレオネのダボ・サルくんです。都立国際高校を3月に卒業されて、現在、テンプル大学日本校1年生です。新宅由紀さん。新宅さんは日系パラグアイ2世です。都立国際高校をこの3月に卒業して、今、清泉女子大でスペイン語を勉強されています。それから、中国のワンくんです。現在、都立新宿高校定時制で勉強しています。つたない司会でしたが以上で、パネルディスカッションを終わらせていただきます。最後に3名のパネリストの方に拍手をお願いいたします。(拍手)

## (2) 分科会

### 分科会1

- ・新宿高校 王 中国の学校についても質問して下さい。  
日本の子育てについて
- ・慶応大 白尾 厳しい教育の中で、子どもを褒めるのはどんな時か
- ・ドゥイグ 子どもの意識の中でムチだけではなく、アメも必要。大人の存在を受け入れさせることも必要である。
- ・高知南 角田 A T Lの授業の中で、生徒達が英語でディスカッションする。
- ・ドゥイグ ただできあがったものを頭に入れるだけでなく、もう一度ふたを開けて考え直すことが大切。

### 英語教育について

- ・ドゥイグ 日本の高校で英語クラブに参加してみた。しかし、話を聞いてくれるだけで、決して会話にはならない。英語ができないことは恥ずかしいことではない。たとえ間違えていても話をしなければ交流はできない。もっと日常会話を重視した教育にすべき。制度にもう少し弾力性を持たせる。臨機応変さを全く教えていない。

### 日本の教育について

- ・第一商 中村 ゆとりと週休5日になるための論議が増えている。しかし、何のためのゆとりなのか。5日制になって、かえってゆとりが失われている。トルコではどうか。
- ・ドゥイグ トルコも土日は休みである。日本は長期休業日が少ない。トルコや欧米の休みは、3か月である。日本人は欲張りすぎであろう。3か月がベストではないが、今の日本とトルコの間くらい長さの休みがあって良いと思う。それから「負けること」の教育がない。常に勝者になるような教育は、いじめ・暴力の原因になる。
- ・司会 その点、中国の学校・塾は、どんな状況か。
- ・王 新宿高校 やはり土日は休み。1日8時間授業で、日々の生活は6時起床・7時登校・4時下校・9時まで塾、で学習である。中学校から受験となり、内申書がなくテストのみで合否を判定するのが普通。80点平均は、ごく当たり前である。さらに、授業中の集中力が必要である。授業内容の聞き落としなどは、許されない。もうひとつ、日本(というか東京)の状況で言えば、今年からの夏休みの補習は、冷房などの設備があるわけでもなく、虐待であると言わざるを得ないと思う。
- ・伊藤 フィリピン大学の理科学研究所に3年いた。中国少数民族・南アに対する政府無償供与に関する仕事をしてきた。トルコの地熱発電技術・観光政策について知りたい。  
また、心の教育とは何か。右肩上がり経済と犯罪。途上国の貧しさとの豊かさの比較について。先進国が途上国に悪影響を与えているか？

- 途上国が先進国のようにならないためにはどうしたらよいのか。  
また、中国の一人っ子政策は、どんな影響を及ぼしているのか。
- ・ドゥイグ 7年間で日本の生徒の変化に驚く。この間にテレビで流れた高校生像によって、今の高校生が作られているように思う。マスコミの問題・テレビドラマの影響をどう思うか。まず、高校生にきいてみたい。
  - ・中村 第一商 歪んだものが流れている。良いところ取りが流れている。
  - ・森田 第一商 悪いものが誇張され、あたかも全員がそうであるかのように取れる様な誤解をする内容である。
  - ・茨城大 メディアテラシー＝メディア読解力が大切になる。はっきり言って今のメディアには、ディレクターの意図がかなり入っている。自分で判断する力が必要。
  - ・ドゥイグ 「ニワトリが先か、卵が先か」どちらが先ですか？ 心に害を与える番組を周囲の人間がディフェンスすることが大事。価値観の低下をストップさせる連帯感、過去の歴史から学ぶことの大切さ、発展した国の歪んだ部分を分析し、決して真似をしない様にする。
  - ・王 新宿高校 一人っ子が一般的になってからの影響としては、  
孫が少ないので両親はもちろん祖父母が可愛がりすぎている。  
経済的に負担が来る。両方の両親と本人・子どもの生活を維持できない。共働きでもとても無理である。  
周囲が大人だけの環境になって、同年代同士の交流が減っているので、将来が心配。 などである。
  - ・森田 拓殖大 総合的教育の時間のテーマとして外国で自発的に選ぶのに必要とされるテーマは何か(心が伸びていくテーマの条件は何か)  
環境・国際理解・開発などがあるが、今はテーマを与えるだけになっているのではないか。
  - ・ドゥイグ 家庭内で何かテーマを決めて話し合いをすることが日本ではあります。トルコでは、自分の意見を言う場が、家庭にある。
  - ・江原 羽村高 小学生新聞をとって、家庭内で子どもと会話をするようにしている。
  - ・三上 砂川高 家庭内でテーマについて意見交換することに、ここにいる人達は興味・関心がある方だと思う。しかし、一般的には学校にお任せというのが現状であろう。
  - ・ドゥイグ 日常会話以外の必要なテーマについて話すことが大切。たとえばことわざなどでもよい。モラルについてだって話すことができる。その中で、情報を選び引き出して利用することの大切さを伝えることが必要であろう。今回の改訂で総合教育の時間をうまく入れたから、活用方法を研究し、是非そういう方向に伸ばして欲しい。
  - ・鈴木 三重県 現状では、とても子供と会話をする時間を作り出せない。子供の時間が限られている。また、小論文などでも、付け焼き刃的であり要領の良いものが試験をとるだけで、決してその内容につい

- て真剣に考えていないのが実状。総合学習の時間を利用して問題と向き合わせていくことが大事である。
- ・関根 啓明 関心・興味を持つようにするということが難しい。考えを持って問題を一つ一つ解決することが大切。
  - ・白尾 慶広大 予備校で小論文の指導をしていて感じることは、自分の意見を言えない高校生が増えているということ。総合学習の時間を議論の場に使うと良い。
  - ・ルオン 第一商  
・司会  
・佐藤 富士森
    - ・・・声が小さくて記録できなかった。すみません・・・
    - そろそろまとめましょう。
    - 今、窓から外を見てどう思うか。いろいろな感性があって当然でそれを大切にしなければならない。自分の意見を言い、他人の意見を聞くことの大切さ、その状況を自分で切り開くことの大切さを教えていく必要がある。それは、地球規模で一つになって生きるということかもしれない。そのためには、コミュニケーションの大切さを認識する。たとえば、太陽は何色？という話題だけでもいろいろ話ができる。その時に大切なのは、相手の表情やジェスチャーなどである。だから、メール・電話など相手が見えないものの利用の仕方には注意が必要だと思う。次に、学ぶ意欲の低下が問題である。「知る・成る・する」だけでなく『共に生きる』ということも大切。
  - ・三上 砂川高 日本の高校生は授業を大切にするという気持ちを忘れている。中国やベトナムの生徒との違いはどこから生じるのか。意欲の湧かない授業が原因なのか。
  - ・王 新宿高 そうではない。日本の制度は「決められたことだけをやればよい」状況であり、「やりたいことを選んで学ぶ」制度になっていない。さらに、無意味な学校の校則そのものの存在もあるかもしれない。
  - ・ルオン 第一商 ベトナムには、小学校一年生から一定レベルまでの内容の理解ができないと次の学年に進級させない制度がある。だから、真剣である。
  - ・中村 第一商 意欲の低下、自分の意見を言わない、みんな同じ原因だと思う。親子関係が断絶している状況では、ありがちだと思う。
  - ・ドゥイグ 日本の国民性が影響しているのではないか。元々、自分の意見を言えない民族なのだろうが、これから、何かを変えていかなければならないと思う。視線を合わせて話すことが大事で、目線で訴えるものではない。生命、安全、認められたい、帰属意識、自己実現、全ての欲望が満たされるように努力をする。そして、子供達に対しても、「愛」「厳しさ」を程良い状況にしなければならない。さらに、歴史から学び活かすこと、民族の文化の価値を見いだして守っていくことが大切である。

## 分科会2

**司会(事務局小島):**こちらからペリンドさん、その娘さん、それからその隣がシエラレオネから見えましてダボ・サルさん、それからそのお隣がトンガから見たアサッページさん、この4人をお招きしております。いろいろお話を伺いたいと思います。それから私どもの方からは最後にお話を伺う南野高校長谷川校長です。よろしく願いいたします。私は、司会の事務局の小島と申します。それではぜひ活発にお話を伺いたいと思います。はじめに4人自己紹介を兼ねてお話をお願いしたいと思います。先ほどお話足りないことがあればどうぞよろしく。

**ペリンド:**ひとつだけ(先ほど全体会で)話したりないことがありまして、日本の学校でいやなこととかあったり、これはだめだと思うと自殺することが多いです。学校で人間関係でいやになったりすると自殺するんですね。たぶん子どもたちは、自分でこれって楽だと思うんでしょうね。本当はこれは楽じゃない、一番つらいことだと思う。死んでももう終わりだと思うだろうけど、私の国はキリスト教だから、それは楽じゃないんです。自分の命を縮めたりするのは悪いことなんです。

**司会:**先ほどお話ありましたように、トンガでは90%がキリスト教徒だということで、日本とは事情が違うと思うんですが、自殺ということ、宗教観、死生観もかなり違うという感じがしますので、これはまた後ほどお話の中でさらに深めていきたいと思います。

それでは、シエラレオネから見たダボ・サルさん、自己紹介を含めてどうぞお願いします。

**ダボ・サル:**はじめまして、ダボ・サルと言いますが、基本的にダボって呼んでください。サルってというのは微妙に……(爆笑)僕は15歳の時に日本に来て、今年で6年くらい日本に住んでるんだけど、色んなことあって、中学校から高校まで日本の教育を受けていたんですけど、そんな中で不安なこととかあったり本来の自分を取り戻すきっかけもあったり、とにかくいろいろありましたね。それも時間と機会があれば話したいと思います。

**司会:**いろいろなお話が伺えそうで楽しみです。それからトンガから見たアサッページさん。

**アサッページ:**(通訳を介して)私の名前はアサッページです。よろしく願いします。

**司会:**現在柔道をやってらっしゃいます。先ほど何人かの方からご質問いただいたのですが、この時間は分科会ということですので、皆さんのご質問をメインに次々と活発なお話が展開されると一番いいと思います。最初にどなたか、お手を挙げていただいて……。どうぞ、はいお願いいたします。

**中沢:**中央大学4年生の中沢と申します。先ほどペリンドさんのお話を聞いて質問したかったんですけど、時間がなくてできなかったの、今させていただきます。トンガでは90%がクリスチャンということで宗教上の関係から子供は親に両親に従って、あと目上の人を尊重したりとか、家での手伝いをさせたりとか、かなり厳しく、それはペリンドさんの家だけではなくてほかの家庭も全部トンガではそうなんですか。

**ペリンド:**トンガは、みんな誰でも厳しいです。昔からおばあちゃんとおじいちゃん育てましたから。最近(日本は)お母さんは紙おむつ使ってるから、子供たちはなかなかトイレに行かせられない。うちの子達は1歳2ヶ月からオムツを脱いでトイレに行かせたり、自分のパンツを濡らしたら、1歳でも2歳でもお尻をたたいています。それを覚えて時間がぎりぎりにならないで、トイレに行かせて……。そのように教えたほうがみな覚えてると思います。大人になったらもう遅くなるからできないんです。

**中沢:**それに引き続いてなんですけど、日本は昔仏教などの教えで親の手伝いを絶対しなければいけなかったし、厳しく教育されたり、先生には絶対に従っていた時代があったんですが、今はほとんどの子どもは甘やかされているので、先生にもあまり従わないし、手伝いも私の友人でも家事

は手伝ったことがないという人がたくさんいます。トンガではそれが保たれてて日本ではできなくなって甘やかされてしまったという原因は何だと思えますか。

**ペリダ**：今のトンガのことは分かりません。多分日本と同じかも知れません。最後に行ったときからもう10年経っていますので。多分もし私がトンガへ今行ったら、絶対変わっていると感じるでしょう。日本だけじゃないと思います。世界もアメリカだってどこでもそうだと思います。これは親が強くすればそれでできると思いますよ。でも親ができないから子どもたちはもうどんどん変わっているわけです。

**中沢**：ものが豊かになってきているとか.....。宗教（のかかわりでしょうか）？

**ペリダ**：宗教でもこれはできないと思います。キリスト教でも仏教でも同じです。ルールは同じ。そのルールを守ればそれでできるけど、そのルールを変えている人がいれば（状況も）変わるのですよ。昔のように戻そうとしても戻れないと思うよ。昔の生活に戻すのは、今の子どもたちにはできない。私の主人（注：日本人）の話を聞いたら昔はテレビがないとかゲームがないとか、携帯電話もないとか、それでみんなは外で遊んでいたことが多いそうです。今の子どもたちはもうそれは我慢できないでしょう。みんなはもう家の中でゲームやテレビとか、それしかないのよ。携帯電話でもゲームできるから、それで自分の部屋でゲームができるてしまう。

**中沢**：甘やかされてそういう風に育っててしまった環境に慣れているので、それを今から甘やかさないというのはかなり厳しいと思うんですね。

**ペリダ**：今の高校生たちはもう無理だと思う。（笑い）

**中沢**：大人になってお母さんになたら？

**ペリダ**：もし子どもたちがそうなりたかったら親の言うことを聞けばすぐ変わるかもしれない。でも今の子どもたちは悪い友達と付き合っているとどんどんそっち行ってしまうから、なかなか親の言うことを聞かなくなってしまう。だから小さい子たちがいれば、昔からの生活で育てれば多分（良く）なると思います。

**中沢**：先生が.....。

**ペリダ**：先生たちも、今のほうが結構甘いから昔へ戻ったほうが一番いいと思う。ただ、私もPTAの経験で見てきましたが、お母さんたちは先生が悪いと先生のことを責める。でも先生は一人で40人、30人くらい見てる、親が二人で子どもを見るより、これはもっと大変なことだと思います。

**司会**：皆さんの親御さんはどうでしょう。うちの親は厳しいという高校生の方はちょっと手を挙げてみてください。4人くらい手が挙がりました。では、この中で携帯電話を持ってらっしゃらない方はどれくらいいますか。1人だけですか、これが現状ですね。はい、ありがとうございます。

**ペリダ**：携帯電話だけで子どもたちがやり取りしていると、親が分からない。

**司会**：親にも教員にも問題があるようで、だいぶ甘くなってるというお話を伺いました。ほかにどなたかご質問があれば。

**広田**：広田愛といます。静岡県です。私はオーストラリアに1年間留学してたんですけど、向こうの先生は日本の今の先生方と比べてももっとフレンドリーで生徒との距離が近くて、あまり威厳が無くて、本当に友達のようになっていて、それがいいかどうかはちょっとよくわかりませんでした。それに向こうではカウンセラーの方が学校にいて生徒とすごく密接な関係を持っていて、家庭のことやいじめの問題、両親の離婚率が向こうは高いのでそういう問題まで相談に乗ってあげたり、専門の方が学校内にいて、その人のための部屋があって何か困ったことがあったらその部屋に行くとどういう具合でした。それから、向こうにはキリスト教の牧師先生が学校に一人、学校の

組織とは別に独立して居て、相談できる人たちがいました。クリスチャンの方が90%ということですが、(トンガでは)学校にキリスト教の教育というか、カウンセラーのような方はいらっしゃいますか。

**ペリンダ:** トンガの学校は毎週金曜日、神父さんが学校に行ってキリストのいい所を皆に話したりということがあります。話の後でまたお祈りをしたりします。子どもたちは家へ帰ってから親と神父様の話について話題にし、親が子どもたちの(理解が)足りない部分を教えてあげたりします。それである子どもたちが自分で選びます。日本の先生たちに望むことは子どもたちに心を開いてほしいということです。学校の終わったときに忙しいだろうけど、ちょっとだけの時間子どもたちと会って一緒に話して一緒に遊んで、それで子どもたちはだんだんと先生のことをよくわかると思います。

英語は日本人の言葉ではないから、しゃべって間違えても平気だと思います。私もいくら22年日本にいてもまだまだ足りない。でも相手が直してくれるから平気で話します。日本人と英語でしゃべってる時は向こうが間違ったら私が教えてあげるようにしています。

**司会:** 今ちょうど英語の話になりましたが、日本の英語教育の仕方に話をまわしたいと思います。先ほど何人かの話にあったように日本では英語を習ってる割にはしゃべれる人が少ないとか……。みなさんが受けられた授業とか体験を通してこれから先英語のやり方、あるいはトンガと比べてお話を伺えればと思います。ダボ君にもう少しお話を伺えればと思います。シエラレオネでは授業は英語ですよ。

**ダボ:** シエラレオネは1961年まではイギリスの元で支援されていましたが、それ以降は自分たちで何とかしてここまで来ました。その中で、内戦が起こったりしてますが、教育は全部英語でやっています。学校から一步出れば自分の持っている言語で自由にしゃべってもよいことになっていますが、僕も幼稚園のころからずっと13歳まで英語を勉強しました。それ以外にも自分の言語と、ほかの人の友達の言語をしゃべることもできます。あと、内戦のせいで、フランス語圏である隣国へ行って、そこでまたフランス語勉強して、しゃべれるようになって……。僕が疑問に思っているのは、何でそんなに英語にこだわっているのかなということです。確かに英語ができると何も問題は無いけど、でもほかの国の言葉は忘れていいのと思うのです。

**司会:** では、今度は皆さんになぜ英語ばかり注目されるのか伺ってみたいと思います。

**祖父江:** 高校生ではありませんが、東京からきました祖父江といいます。昨日から思ってるんですけど、英語スピーチ・コンテストとかで日本では発音も採点の評価になるということなんです。日本の教育の中だと、常に英語圏の人がモデルにならなければならないということで、それに自分は合わないと思っている子どもの外国語を学ぼうという意欲を下げているのではないかと思うことがあります。もちろん英語ばかりが世界の言葉ではないということも確かで、それを注目しすぎる日本の教育っていうのも問題あるかなって思います。英語を取り上げてみたら、今度は所詮は英語圏の人たちをモデルにして、これでほんとに非英語圏の方々との平等なコミュニケーションを取れるのかなということが昨日からちょっと感じていることなのですが、皆さんはどういうふうにお考えになるでしょうか。

**中沢:** 今のご意見に対してですが、確かに最近日本は英語英語ってこだわり過ぎる傾向を私も感じていますが、ほかの言葉を忘れていいのかというのはまた別の問題だと思います。ほかの言葉を学びたければ学んでもいいと思います。ただやはり、フィリピンとかアフリカとかいろんな国の人とコミュニケーションをとるにはみんながしゃべっている英語というのがコミュニケーションを取れる手段としては一番効率的な共通語で、それをマスターすることがほかの非英語圏の人ともしや

べれることになると思います。

**ダボ:** 言っていることはよく分かりますが、例えば、フランス語を本当に勉強したい人がいたら、みんなが英語を勉強しているから僕も英語勉強しなきゃということになると、本当はフランス語を勉強したい人に悪いなと思うのです。一人でもそう思う人がいると不幸だなと思うのですが、どうなのでしょう。

**広田:** 今、最初に学ぶ言語は英語なのですが、もしその時に言葉を学ぶ楽しさをみんなが分かれば自然にほかの言葉も勉強してみようという気持ちが出てくると思います。私は中学校から英語を始めて、中学校2年生ぐらいから本当に英語の授業が嫌いになって、自分で勉強したほうが楽しいことが分かって、授業も受ける一方で使える英語を勉強する楽しさを発見しました。そこからもっとほかの言葉に対する興味も日本人の中で多くなるのではないかと思います。

**ダボ:** もう1つ思うことは、日本はすごく物理的に豊かになっていて、あらゆることで世界のトップレベルとして今日まで来ていますが、発展途上国から見ると日本はうらやましいなと思うんですね。例えば僕の国だと、明日どうやって生きていくか、そこから考えています。日本は物理的な豊かさだけでなく、メディアの影響もすごくあると思います。物理的に豊かになり、親が言っていることも聞かなくなり、先生が言っていることも聞かなくなり……。例えばアフリカだったら、親や先生の言葉を聞かないと一人ぼっちになってしまいます。一人ぼっちになると何もできません。日本だと一人ぼっちになっても生きていけるんですね。アルバイトをしてお金稼げば楽に生きていける。そういう環境があるからすごく難しいんですね。なかなか日本では現実的には前みたいに、正しいしつけを戻すのはすごい大変なことです。何をしなければいけないかという、子どもたちを教える立場にいる先生方がそこで考えなければいけないのですよね。今後どうすればいいのかわか。確かにお母さんたちもすごく目いっぱいやっていると思います。でも僕にとっては一番身近にいる先生の方が一番大切な存在だと思うんですよ。先生がそこで、子どもを落ち着けるのは別の方法を考えていけばいいのではないかと思います。

**仁井:** 拓殖大学の国際開発学部の仁井と申します。1年です。今、APICのインターン生として参加させてもらっています。今まで話を聞いてきたのですが、高校生とか若者が甘やかされすぎているというのはあるとおもいますが、僕が思うには、自分たちがどういうところにいるのか、例えば、ダボさんが言ったように、日本は豊かなところで生活しているのに、変な方向に行っている、自分たちがどこに住んでいるのかという現状に気づいてないからそういうことになってしまうのかなと思うところがあります。そしてやはり、ほかの若い人たちにもいちばん無いものは夢だと思います。自分がこういうことをしたいこういうことをやってみようというような、夢が無いからさまよってしまうのではないかと思います。だからそれが原因でひとつのものにこだわってしまうところがあって、そこからはみ出てしまったら、自分はもうその世界には生きられないから自殺とかそういうものを選択してしまうというような若者が多いのではないかと思います。だから、今の若者には一つの世界ではなくて、ほかにもいろいろな世界がある、日本語の教育でも、英語やいろいろな言葉を受験に必要だからとか、社会に必要だからとかいうのではなくて、ほかの世界の人と付き合う上での一つの鍵として、いろいろな世界があるんだよということを知って自分を造っていくことが今求められているのではないかと思います。以上です。

**ダボ:** たびたびすいません。僕は中学校、高校と日本の学校だったんですけど、さっきすごくいいポイント出してくれと思います。いろいろな国の文化というか言葉を楽しく紹介してそれを勉強していくことでいろいろな可能性を持たせるということをお話していたと思います。僕はせっかく日本に来て、今までいろいろな国に住んできていろいろな言語を話せるようになりましたが、それ

を利用する先生が一人もいなかったということはすごく残念だったなと思います。その意識の無さがどうしてなのかなとかすごく今でも疑問に思う。

**司会**：教員に対してある意味厳しいお話だったと思いますが、そのほか？はい。どうぞ。

**仁井**：僕は高校のところにカンボジアへ文房具を送る活動をやったんですね。その時に先生方に協力を頼んだのですが、先生方がそういうことに興味が無く、全然進まなかったんですね。自分たちで右往左往しながらやって、それが原因で開発協力に関して興味を持って大学に進んだのですが、先生方自身が開発教育や国際理解などを考える機会が無い、きっかけが無い、だから、それを子供たちに教えることもできないし、子供たちも触れることが無い、だから世界のことが分からないのだと思います。だからそういうきっかけ作りを総合教育の中で取り込もうという案が出ているようですが、それだったら先生方も子どもたちに積極的にいろんな世界と付き合わせるきっかけ作りをしていくべきだと思います。

**司会**：はい、ありがとうございました。メディアがアメリカ志向であるとか、いろんな話がありますが、日本の教育についてはいかがでしょうか。

**中沢**：ダボさんに、自身を利用するのにあまり意欲が無かったということに対してちょっと意見をお伺いします。私の友人にも AET (Assistant English Teacher) としてカナダやアメリカやニュージーランドなどから来ている友達が何人かいて、話を聞いたことがあります。日本の国で彼らを優遇して、教育委員会が彼らに自転車を無料であたえたりとか、車を貸したりとか、アパートを安い値段で世話したり、いい待遇で各国から迎えているのに、彼らはかなり不満を持っています。夢があって教えようと思ってきた人も結構いたのに、学校の授業では日本の学校の先生が主導権を握っていて、英語のテキストを読まされただけだとか、全然つまらないとその外国の人は言っていました。ここまで英語を重要視して国の予算を使っているんだったら、もうちょっと外国人の先生の利用方法を日本の学校では考えたほうがいいと私は思います。

**司会**：この中に英語の先生はいらっしゃいますか。はいどうぞ。

**長野**：私は大分県の大分東高校というところからまいりました、長野と申します。私の学校には国際コミュニケーション科という科がありまして、一学年に一クラスずつあるのですが、この科には40人生徒がおりまして、学校にALTが2人常駐しております。このALTが週に1・2年生に対しては2時間、3年生に対しては3時間その一クラスに授業に行きます。ALTが2人に日本人の英語の教員が2人つまり一クラスに対して4人の教員が立って授業を行います。4人が40人一緒に見る場合もありますし、20人ずつの少人数に分けて外国人1人と日本人1人という形で授業を行ったりもします。基本的にそこで使われる言語は英語です。こういった形で授業が行われていくかと言いますと、1年生の段階では音声訓練などが中心でそれからいろんなやり取りをやったり、そういうトレーニングをしていって2年生の夏にそのクラスは、全員がイギリスへ海外研修旅行に出かけます。基本的に生徒はイギリス人のお宅にホームステイして、午前中は私たちの学校がプログラムした計画に則った講義などをしていただき、午後は研修センターの方に市内を引率していただく中でいろいろな実体験をし、次の日には前の日にやったことをまとめて発表するという形式の研修をしていきます。2年生の夏に行く前に1年生の3学期くらいからプレゼンテーションの形の授業をALTの入る授業の中でやっていきます。2年生の後半からはディベートを授業の中に取り入れて、3年生の秋くらいには生徒たちだけで英語のディベートができるようにというところまで指導します。私の学校に来るALTはみんな3年いて帰国するときにはもう帰りたくないと言って帰るようなそんな人たちがたくさんいて、将来は日本で学んだこと、日本語を生かして日本と母国の架け橋になりたいという希望を抱いて帰って行ったり、また、実際に日本にもう一度戻

ってきて職を見つけたりという方がいます。少なくともほかの学校に配属された方に比べれば、うちの学校に来られたA L Tというのは非常に満足して仕事をされていますし、ほかの学校の方たちから非常に羨ましがられるという存在になりますね。だから、学校によって自由にいろんなカリキュラムが組みやすい学校と、そうではなくとにかくいい大学に進学させることが至上主義・第一の使命になっている学校だとなかなか自由に思い切った人員配置とかできない、A L Tを生かしたくても生かせない英語の先生もたくさんいるのだとそれは現実だと思います。

**司会**：広田さんから英語の授業つまらなくてちょっとやる気が出なかったという話が出ましたが。

**広田**：今の件についてお話しします。そういうクラスがあるということは羨ましいことですが、それは学校の制度があるということじゃないですか。英語に力を入れていてA L Tの人たちを生かそうという組織のことで、私もダボさんと同じようにA L Tの人たちの気持ちとか、自分が留学したあとに自分が体験したことを伝える場が無かったことに不満を感じていました。そういう学校の制度とは別に先生方の態度として、そういう生徒やA L Tの方が来たときにそういう場を生かしてクラスの中ではなくても先生たちがほかの国のことを知ろうとする意思があまり感じられないというところが問題じゃないかと思います。放課後とかそういうちょっとしたときにも、私は聞いてほしかったんですね。留学して向こうの学校はどうだったのか、そういう日本の教育の制度に満足しないでこういう生徒がせっかくいるのだから、ちょっと聞いてみようかなという姿勢を持っている先生がまったくいなかったの、そういうところに私はちょっと不満を感じました。

**司会**：残念でしたね。せっかくの体験を聞いてくれる人がいれば……。はい、どうぞ。

**長野**：私の学校の国際コミュニケーション科というのができてから8年目になりましたが、できるといってからはA L Tが2人入るようになりました。外国人が毎日2人職員室にいるということは、先生たちにもずいぶん大きな影響を与えるようになって、先生たちの中に外国人に対する恐れとか、怖いとかというのかという何か聞かれたらどうしようかなとかそういうのはまずなくなったと思います。バリアとか障壁というようなものは、もちろん生徒のほうにははまったくありません。職員室も、例えば1年生の学年に属しているA L Tは1年生が並んでいるところに入っていますし、その周りに国語の先生がいたり、社会科の先生がいたりするわけです。もう一人は2年生に所属しているということで、周りにいろんな教科の先生たちがいるということが、職員室の中にもとてもいい雰囲気をもたらしていると思います。うちの学校にも留学する子が毎年何人もいますので、この夏もアメリカから5人帰ってきました、入れ替わりに2人出て行ってという状況もありますから、そうすると帰ってきた生徒たちにもまとめていろいろ話をしてもらって時間をとったり、今年の夏はA L Tが一人入れ替わりましたから、A L Tの着任の時には、学校全体、生徒全体に挨拶してもらおうですね。今度9月に学園祭をやるから、その場で、部活動のE S Sというのがあって、その生徒たちが、新任のA L Tの紹介をしていく中で、A L Tの方たちにステージが上がってもらっているお国のお話をしてもらったり、そういう機会は必ず持つようにしています。学校の歴史が80年以上になるので、同窓会主催の留学生制度というのが去年からできまして、今年の夏も2人短期の留学に出掛ける予定です。同じく学園祭の時に時間をとってスライドなどを映写しながら、一緒に全校生徒で共有するという時間を持ちます。先ほど申しましたように2年生が海外研修旅行出かけますから、海外研修に出かけた子達の報告会というのもありますので、いろいろな機会を捉えて違う体験をしている人たちがいるということ、いろいろな考え方をしている人たちがいるということ、いつも身近なところで時を捉えてやろうという努力はやっています。私自身は国際理解教育の担当ですが、今度別の担当のほうで、ユネスコの担当の先生がボランティアの

関係だとかで、いろいろな外国の方と交流するという機会をとったりしますから、そんなことで、全校生徒に対していろいろな話をしたり、実際に来て話をさせていただいたりとか、そういう機会をよく持つようにしています。それも学校の先生たちのゆとりがあるかないかそういう意識が高いかどうか、そういうところだと思います。先ほどの拓殖大学の方がおっしゃっていたように先生たちにけしかけてもなかなか動いてくださらなかったという話ですが、おそらく生徒会の関係の先生も余裕が無かったのではないかと、先生一人ではまた、なかなかできないわけなんですね。一つの行事をしようという場合、それに協力する人たちが2人でも3人でもいれば、その先生たちが全員の先生たちを動かすということも可能なんでしょうけれども、どこで意識を変えられるのか、とにかく接することによってはじめて分かるっていう部分がありますね。

司会：はいありがとうございました。はいどうぞ。

山崎：都立篠崎高校の2年の山崎と申します。皆さん、授業の英語って楽しいですか？ALTの先生がいて、その人との会話はすごい楽しいんですよ。でも、文字だけ書いているのはつまらないです。理科とか実験することなどが好きです。自分でこう触れたり、失敗したりするのが楽しくないですか？そういうのがあると面白いと思うから、英語の授業でも、みんなで楽しく、英語のゲームのようなことをしたり、失敗したらそれだけでも次は失敗しないようにで、それで覚えることがあると思います。英語は苦手ですが、旅先で外国人と仲良くなることがあります。言葉を使わずに、しぐさとかだけでもできるから、それに英語をつけるだけで、とても楽しい授業ができるんじゃないかなとか思うんですけど、うちの学校ではあんまりそういうのはありません。今うかがったような授業は楽しそうだなと思いました。

長野：いらっしゃいませんか？

山崎：行きます！（笑い）

ダボ：先ほどの日本の教育制度についてですが、僕は思うのに、「先生に余裕が無い」というのは言い方は悪いのですが、言い訳だと思います。日本の教育制度を変えるためにも先生たちが今生徒たちを感じるストレスとか不満とかをそのまま行動に出さないとこのまま永遠に日本の教育制度は変わらないと思うし、生徒たちもどんどん先生たちを追い詰めていくことになるのではないかと思います。行動に出たほうがいいと思います。

田中：福井商業高校の田中ゆかです。私の科も国際経済科とあって、大分東高校とよく似ているなどと思って話を聞いていました。やはり、先生がいろいろしてくれたとしても一番大事なものは生徒自身が積極的になって行動することだと私は思います。例えば私の学校にもALTの先生が2人いてくださって2人の部屋があって、そこにはいつでも自由に行き来できるのですが、そこに行かずずっと話している生徒もいれば全然チャンスを使わないでいる子もいるから、先生が動くことも大事だけど、一番大事なものはやはり自分自身が積極的になることだと思います。

広田：日本人の先生があまり行動を起こさないということに私もちょっと感じていて、以前テレビでもイギリスの学校のことを取り上げていてイギリスもオーストラリアも、向こうでは、企業と同じようにビジネスのような感じで、校長先生が何年もひとつの学校にとどまって自分の目指す学校を作っていくっていう形でやっているそうです。私の学校は校長先生が2年か3年ごとに替わってしまい、結局は校長先生が替わっても学校は変わらないということを残念に思います。

司会：非常に手厳しい話でした。どうもありがとうございました。はいどうぞ。

山崎：さきほど、カウンセラーの話がありましたが、先生とじっくりと話していければ、カウンセラーって必要ないかなと思います。だって昔はカウンセラーっていなかったですよ。先生とそうやって話して言いたいことをぶつけられればいいじゃないですか。だから教育は、先生が頑張れば

いかようにでもなるのかなと思います。是非頑張ってください。

**司会**：ご発言なさってらっしゃらない方いらっしゃいませんか。何かあればどうぞ。

**渡辺**：東京都立芝商業高等学校から来た渡辺といいます。カウンセラーが必要ないと言いましたが、確かに学校で問題起こしたからそれについて話し合うということならば先生だけいけばいいと思います。でも今は、家庭内でのいろいろな事情を持ってる人もいて、専門的知識を持った人も学校に必要だと思います。そういうことに対処するためにはやはり必要じゃないかなと思います。

**山崎**：要は先生は、人生の先輩じゃないですか。しかも歩んできた道を見ながら意見を言ってもらえるし。先生とちゃんと話をしましょう。校長先生と話しましょう。そういうことが大事だと思います。

**吉岡**：都立篠崎高校の3年の吉岡です。僕は大学の心理学を専攻していきたいと思っていますが、カウンセリングの学校なので、なんか、喧嘩売られているとしか思えない(笑)。人の悩みを解決するというか、昨日の人の接すること(社会力)ではないですが、人と接するという事に関して人の後押しをしたくて心理学を目指してるので、どんな悩みであってもカウンセリングの人は絶対いたらいいと思います。

**山崎**：僕は、カウンセラーが要らないということではありません。確かに自殺している子が増えているというのも事実です。先生が頑張ればいっていいことを言いたかっただけであってカウンセラーが要らないと言っていないんです。

**司会**：ここまでのお話で、少しペリンダさんに、またうかがいたいと思うんですけど。

**ペリンダ**：学校の中のことは、私は日本で学校に行っていないし、分かりませんが、英語のことは気になっている。みんな本当は、英語は好きではないと思う。日本は昔から外国人は入ってないんですよ。今はいろいろな国からの人が増えてる。自分で興味があれば勉強してもいいけれど、もし興味が無かったら無駄に勉強しないほうがいいと思う。自分の将来に関係があれば勉強してもかまわないけど。外国は行かないというんならもう英語は無駄に勉強しなくてもいいと思う。でも日本の国は世界につながっている。日本の会社はどこにでもある。あなた達は大きくなって働いたら必ずどこかへ行かされると思う。その国に行ったらその国の言葉をいきなりしゃべることはできない。英語がしゃべれないとそこに繋がらない。それでも興味が無かったら、それでも使わなくてもかまいません。

**司会**：家ではもちろん英語もお話になるんでしょう。

**ペリンダ**：私はイギリスの英語で習いました。子供たちはハワイで生まれました。アメリカの英語はいろいろな国の英語があります。ごちそうさま、でも違う言葉を使っているの。

私は海外協力隊の人たちとはかなり付き合っていて、トンガの協力隊の人たちは、英語をしゃべらない人も多いんです。最初はトンガ語を勉強したほうが早いんです。2ヶ月くらい経ったらみんなべらべらしゃべっている。だから英語はみんな無理しなくていいから、もし自分たちが必要なら勉強すればいい。ほかの国の言葉も覚えたかったら、テレビでもやってるから。

**ダボ**：最後だと思うんですけど、僕が言いたいことは日本に来る前に内戦を経験したこともあるし、生きることの大変さも分かってるし、多くの日本人がそれを分かってないのがすごく不満で、仕方ないところはすごくあると思うんですけど、多くの人が生きることの危険とか大変さをこれから経験してみたいと思うんですけど、内戦を行っているところに行かなくてもいいし、近いカンボジアとかに留学してみたり、アメリカでもいいし、自分を苦しませるようなところに行って、勉強してくるのも、これからの日本の若い人々を変えるんじゃないかなと思うんですよ。だってもうすごくいろいろな国に繋がっているんだから、ずっと住んでるというのはどうかなって思う。生

活の面でも豊かであるし行こうと思えばどこでも行けるし、ピザも全然問題ないし、だからそういうのを利用したほうがいいんじゃないかと思います。

司会：ありがとうございます。最後に長谷川校長先生に一言お願いします。

長谷川：南野高校の校長してます長谷川賢と申します。助言者ということなんですけど、とにかく私には面白くて新鮮な経験でした。こういう風にいろいろなテーマにわたりましたけれども一同に会した人たちが、自分の言いたいことをばりばり言うという雰囲気がかつて昭和50年代の初め1970年代の半ばごろに教師になったころには、たいいていのクラスがやろうと思えばできた。ところが、今なかなかこんな風にできないクラスがたくさんある中でとにかく面白かったというのが第一です。助言にもなりませんけれども、私の感想を言いたいと思います。子どもの育て方について親や教師の接し語っているのがありましたけれども、私は、親や教師がどれだけ生徒のこと・子どものことを、こうやって育てたいっていうふうに信念をもって接するかっていうところが一番大きくなって思います。私は今、9才の子供と29歳の子供がいますけれども、どちらもどちらも私は私なりに精一杯育てたと思うし、甘やかすという言葉があったんですけど、最近読んだ本で、十歳までは力いっぱい甘えさせると、甘やかすんじゃなくて、甘えさせると書いてある本に接しました。自分の子どもは意識しません甘えさせています。子どもはとも甘えます。でも甘えるところと、ここはこれでもってやらなければいけないというところは一線を画して、例えば、食べる時の行儀なんかは、しょっちゅう口うるさいくらいにいたりします。人に対して挨拶しないときには、ちゃんと挨拶しなさいというふうにいたりして、それで子どもというものは覚えていくものだと思います。9才になったから殴ることはしませんけれども、3歳まではひっぱいたりつねたりしましたけれども、そうやって覚えなければいけないと思います。教師に対して、校長の立場で校長になる前からずっと不満だったのは、何で先生は生徒をしからないのかと、教室で化粧している生徒、しゃべっている生徒、勉強していない生徒を、何で私が一生懸命やってるんだから聞きなさいと言わないのかな、という不満をととも強く持ってます。それは今、校長の立場でもってこれから先先生たちに是非してほしい、もっと子どものことをかまってくれ、一人一人大切にしてほしいということを、今私が自分の学校でもってやろうとしているところです。それから、夢が無いという言葉がありましたけど、それは今私が非常に感じます。私の勤めている学校でも、卒業したらどうするという答えが出てくる生徒の数と、そうでない生徒の割合が、非常に微妙かと思えます。ここにいます卒業したらどうしようこうしようと思っている人が大部分かと思えますが、実際にはそうじゃない生徒が大変多い、その現実をどうして行かなきゃいけないかを感じてます。それから、英語の授業ってつまないっておっしゃっていましたが、私は楽しい授業かそうでない授業かということは、先生が生徒のことをかまう気持ちがあるかということにかかっていると思います。授業で寝ている生徒を何で教師が感じないのかということ私は非常にうれしい。私は授業の中で自分の授業ってそんなつまないのかって思って、もっと頑張らなくっちゃって思って、そこでがんとやって起きろって言って起こしてやりましたけれども、そんなふうにしらない先生が、かなりの割合でいる。30人くらい教師がいると1割から2割くらいの先生が、寝ていてもいちいち注意しようとしません。進度が大事なのかどうかわかりませんが、それよりも私は目の前の生徒と自分がコミュニケーション持つことが大切だと感じていますから、是非そんなふうには生徒たちにやってほしいなと感じています。親にもやっぱりそうやってほしい。電車の中で、靴をはいたままシートの上で立っているような子どもをしからない、私もよっぽどの時は降りろって怒鳴りますけれども、ついつい私自身もよその子だからといって遠慮してしまう。あるいは無視してしまう。自分自身が教師は子どもをかまえ、親は子どものことをかまえて言ったけれども、自分自身がついよ

その子だったらいいやなんて思ってしまう、日本では、30年以上前は、そういうことはほとんど無かったという気が私はしています。それは世界的な傾向かも知れませんがこれから先、親たちが大人たちが、子供をかまって、そして一人前の大人になるために子どものときから躰やしかり方をしていかなければいけないのだらうと思っています。それからカウンセラーの話が出ましたけれども、そのカウンセラーであろうが、教師であろうと親であろうと、私が感じていることは、どれだけ目の前にいる生徒なり子供と一生懸命自分が付き合おうとしているか、相手を大事にしたいと思っているか、というそこにかかっているかなという気がしました。最後に英語の問題がだいぶ出ましたけれども、英語はもう国際語になっているから、私たちはこれから先学ばざるを得ない言葉かなと思っています。コンピュータでも、ワープロソフトがかつて一太郎というものが日本では主流を占めていましたけれども、もうワードに完全に席捲されてしまった、ワードに席捲されてしまえば、ワードを使わなければコンピュータが使えないのと同じように、国際語としては、フランス語圏やスペイン語圏や日本語圏や中国語圏の人は、くやしいかも知れませんが英語がそういう地位になってるということは認めざるを得ない。しかしその上で、韓国の言葉なり、中国の言葉なり、フランス語でもドイツ語でも何語でも構いませんけれども、そういった言葉も自分が興味があればどんどんやっていくということは必要だと思います。助言にも何もありませんでしたけれども、自分の思いのたけを言わしていただきました。長くなりましてすいません。

**司会:** ありがとうございます。今日4名の方をお招きしました。もう一度拍手をお願いします。(拍手) 不手際でいろいろ失礼があったかもしれないんですけど、これで第2分科会を終了させていただきます。どうもありがとうございました。

### 分科会3

**【司会】** こちらの分科会では、先ほど全体会でお話いただいたオディ・サンブソンさんをお迎えしております。できるだけ皆様のご意見をここでは取り上げて、活発な意見交換をしたいと思います。私は、交通整理に徹したいと思しますのでよろしくお願ひ致します。

全体会で話し足りないことがございましたら、ご意見を伺いたしたいと思います。今回、国際高校の卒業生で、パラグアイ出身の新宅さんも出席していただいていますので、自己紹介を含めて、簡単に日本の高等学校で学んだこと、感じたことをお話し願えればと思います。

**【新宅由紀】** おはようございます。私は、日系パラグアイ人と同じようにパラグアイで生まれました。パラグアイに10年間住んでおりましたので、小学校、中学校をパラグアイで卒業しました。その後日本に来て、中学校を卒業して国際高校に進学し、いま清泉女子大学に通っているのですが、せっせと勉強しています。

**【司会】** 国際高校で学ばれて感じたことは？

**【新宅】** 日本に来て一番楽しかったことは、国際高校でいろいろな国の人たちと、同じような経験をしている人たちと出会うことができ、沢山のことを得ました。確かにもっと広い視野を持つことが大切です。いろいろな人がいていろいろな考え方があるんだなと国際高校で学びました。

**【司会】** どなたかご意見のある方お願いします。(挙手) さきほど全体会で意見を下さいましたね。

**【酒井】** 都立拝島高校の家庭科の酒井です。小さいときから、英語をやらせたほうが良いんじゃないかということで、実は息子に英語をやらせているのです。子供が、まだ2歳の頃から習っているのですが、幼児英語が大事だと思ったので、英会話学校に「幼児英語ってやってないですか？」と聞いたら、「うちはそんなのやっていません」と。新宿でやっているというのを聞いて行ったんです。

多少、外国の方から英語を習っていたので、ヒアリングはできるんですけど、書く作業はちょっと苦手だなという気がしています。英検は5級までとれそうでとれない。で、一番大事なことを忘れていたんです。自分は英語が話せない。これじゃ駄目だと思って子供と一緒に勉強して4級と5級、最高点だったと……。自分が勉強しないと子供も覚えてくれないんだなあという気がしました。

子育てにおいては昔式の仕方で行っているんですが、……。英語を教えるには、その辺の土壌を豊かにしてくださらないと、とても無理だなという気がします。

【司会】母親として、日本の中でのお子さんの教育について……。英語教育は早いほうがいいだろうというようなご意見でした。反対意見でも結構です。

【須山】都立篠崎高校の須山と申します。直接、英語教育ということではないんですが、私は前に日本のことを余りよく知らないウガンダの方と話していたことがあって、その方に質問されました。「日本では、いつから学校では英語になるんですか？」と聞かれたんですね。「中学も高校も大学も日本語です。」と答えました。そうしたら「大学の教科書は、英語ではなく日本語のものもあるんですか？」と聞かれ、「はい、そうです」と答えました。逆にびっくりされて、「自分の国の言葉で大学の日本のことが勉強できることは良いことじゃないんですか」と言われました。ということはいろんな国で……アメリカやフランスからそのまま持ってくるから言葉ができないと大学授業は受けられない。でも、日本では日本語で翻訳してあるから羨ましいとも思えるよ、と言われました。

【司会】ありがとうございます。私も25年前に東アフリカ、ケニア、タンザニアに行っていました。小学校から、学校は英語です。アフリカの文化をどうやって次の世代に伝えるのか？伝えていく言葉は、アフリカの言葉なのか、英語なのかということなんです。先程の討論のなかでも日本の文化を伝えてほしいという意見がありました……。

【松田】宮城県工業高等学校の松田です。英語を教えています。英語教育は基盤作り、つまり外との交流の中で得ていくことだと思います。私も英語教育にタッチして英語教育をどういう形でやるかというのはちょっとおいておきたいんです。教科書問題もありますし。本当に、日本では小さい子どもの頃から英語が必要だと思います。それはともかくとして、今の子どもたちは子ども同士での交流があったとしても、いろんな人と交流し、自分の意見を述べたりすることが少ないんじゃないか。メールなどがありますけれど、同じ日本の人達や年代の違った人達との交流、できれば国際交流で世界の人達とのなかで自分のことを見つめ相手のことを知り、そうした中で当然言葉は英語が必要になってくる。必要だと思ったときに勉強するのが一番良いのかなと思う。そういった状況を作っておける。

サンプルさんに聞きたいのですが、どういう形で国際交流のチャンスを増やすのか。英語教育をどういう形で日本で推進するのが良いのでしょうか。どうしても英語を使わなくてはならない状況、そういった環境づくりが必要なのではないかと思います。

【サンプル】私は来日して15年目ですが、前はずっと一斉授業してました。それは良いところも悪いところもあるけど……。私もアメリカ人の友達いっぱいいるけど、英語の先生が大切です。まず、ネイティブじゃなくてインドやカナダで英語を勉強した人に教えさせるのがいい。ちゃんとした英語は難しいと思いますが、でもだいたいわかるんです。それが早いし、一番良い。ガーナ人よりアメリカ人、イギリス人の方がいいというのが基盤にあると思いますが、話すだけでなく書くことも大切だから、ガーナ人、ウガンダ人……。いろいろな国々の人達と交流するのが、そういう人達と話せば一番早いと思います。私は日本で日本語を勉強したんです。英語使わない。わからないときは……。あとは日本語を真似すればいい。

【笠原】茨城県の青年海外協力隊を育てる会の笠原です。実は公文式の教室を 29 年間女房がやっております、公文式の教室にもいろいろあるんですが、その中で気が付くことは、小さい子供に皆さん好奇心もってやられる方がたくさんおられるんですけど、一番感じることは、まず親に日本語をきちんとやってほしいということなんです。日本の社会では日本語をしっかりとやらないといけない。英語教育に水を差すわけじゃないんですけど、それが一番いいと思います。

【司会】新宅さんはスペイン語はやられますか？英語の学習はどのようにしましたか？

【新宅】英語は、もちろん日本人学校で習いますし、英語をやらないと・・・小さい頃から、英語をやっていました。でも、ずーっと勉強に頼っていたので、親から勉強しなさい、といろいろな教科書をやらないといけないと言われてきましたけど、勉強しても覚えなかったり、必要性がなかったから、嫌でずっとやらなかったら、日本語を忘れちゃったんですね。自分がコミュニケーションをとろうとすれば、やらなくちゃいけない、伝えたいことが相手に伝わったという実感があるならもっと楽しいと思えるようになる。そうなってから相手に話せるように勉強したほうが良いと思います。

【司会】はい、ありがとうございます。

【佐藤】東京薬科大学の1年の佐藤です。私も思うんですけど、私が英語のしおりを買ったのは初めて海外に行ったときです。それまで、兎に角、インターナショナルランゲージということで学校で勉強したし、学ばなきゃいけないと思っていたし、学んでいるときは楽しかったのですが、どうやって使っていくのかあまりよく分かってなかったし、普段は生活に使わないから学んでいるように、きちんと分かっていないところがあって、中学3年生のときに私の学校ではカナダに修学旅行に行くのです。その時にホームステイをして、聞き取ることはできても、話せなかったのです。何を言っているのか分からないし、どう話しているのか分からない、しかも「自分が話した言葉が間違っていたらどうしよう、恥ずかしい。」という思いがあって、あまりコミュニケーションをとらなかった。そのとき初めて、自分の国の人だけでなく、他の国の人と話す時に、英語ができなかったらコミュニケーションがとれないと気付いて、そこから言葉の必要性を感じて、英語を話せないといけないなと思ったのです。その前に日本のことを理解できてないと英語を勉強することはできないな。と思ったのです。

これもカナダで感じたんですけど、自分の国のことが分からないと相手の国のことを分かろうと思っても文化の違いを感じられない。うまく言えないんですけど、自分の言葉のこととか文化のこととか普段の生活のなかで、きちんと意識して考えていかないと相手の国に行ったときに言葉で伝えられないし、どう示しているかわからない。自分の国がこうだということを示せないようだと、英語を勉強しないと表現できない。だから・・・と思うから自分の国のことを最初にしゃべらなければいけないと思ってるです。英語が必要なことはわかるんですけど、やはり日本のことを先に学ぶべきじゃないかと思います。その必要性に気付くのはなにか経験がないと無理だと思うのです。勉強というのは誰かに押し付けられるものではなく、自分から学ぼうと思わなければ、絶対に身に付かないと思います。

さっき、サンブソンさんの話の中で、「いまの日本の学生は甘やかされている、甘いんじゃないか」という話を聞いて、「それもそうだな」と思ったのですが、やはり自分自身「甘いかな」とよく思うんです。金銭的に恵まれてると思うんですが、精神的に親に頼っていたいとか、自分の中に一本自立する芯みたいなものが立ってないとやっていけないなと高校生の時に気付いたんです。それから勉強することが楽しくなって、自分のために学んでいるんだなというのがあったんで、身に付けてるという意識があったんですが、それが無いと、ただもう押し付けられている。「勉強が楽しくない」と結構言う人がいると思うんですけど、押し付けられているだけだと何のためにやっているか

意味がない。その必要性を理解していかないと勉強にしろ英語にしろ文化にしろ自分で必要だと感じられないといけないんじゃないかと思っています。

【司会】ありがとうございます。日本語のことをどのように、外国へ行かれた時感じたか。日々、日常生活のなかで、今日の発言のなかで甘い高校生と言われたらいやだとか・・・ ご意見をどうぞ。反論ないですか？ いま感じていること何でもいいです。どうでしょうか？ 私はこうやってるんだよとか。

【亀崎】都立農産高等学校の亀崎です。日本のことをきちんと考えて、自分の毎日のことを意識してそうでないと他の国へ行ってもコミュニケーションをとれない。12月の冬休みにディズニーランドのファームステイに行くことに決めたのですが、最近、農産高校にもステイ君が来ていて、ヘンディ君というオーストラリアの子が来ていたり、外国の方を農産高校に呼んでうどんを作ったりパンを作ったり交流をしてきて、自分は営業の勉強をできるというわけではなかったのですが、がんばってきたのに半分しか売れなくて、会話するのもできなくて、全然駄目だと思って、今の話を聞いて自分の生活のこととか日本のことも相手に知ってもらったり、自分も知りたいのでがんばりたいと思います。

【穀田】都立農産高校2年の穀田です。先生は甘いと言ってるじゃないですか皆さん。親とかがうるさいじゃないですか？ 厳しいと。だから、先生も甘くしなくちゃいけないし、厳しいと新聞とかテレビとかでたたかれる。一概に甘い甘いと言えない。それだけです。

【司会】社会全体から変える。君はどこで厳しい先生がいい？

【穀田】社会全体から変えないと、やさしい先生がいいかもしれないけど、厳しい先生もいないといけないかなと思う。

【司会】日本の教育での、先ほど英語教育の問題についてはいかがでしょうか。

【生地】神奈川県白山高校の生地です。話がずれるけど、考えてみてください。言葉ができて通じないことがある。国際交流の外国人の中では、友達というものが、日本社会の友達というものとまったく違う。どういう感情かということが最初わからなくて、タイ人の学生たちと付き合ううちにわかりました。タイの人たち、学生同志が20~30人のグループはいつも行動をともにしている。人生をともにするぐらい……。メンバーは一緒に行動して一緒に下校する。ガーナでは友達とはどういうつながりですか？ 日本とは違いますか？

【サンブソン】友達に違いはありません。アカン族出身の者は日本と似ている。

結婚する前6ヶ月の間に男は文化の違いのチェックを済ませるんですよ。この人のいいところを真似する。違うのはひとつ。日本は「はいはい」と言って、いいか悪いか分からない。たとえば、遅れても「ごめん」と言われて「いい」とか言っている。

【新宅】日本は、よく分からないんですけど、友達がいっぱいいるとか百人いるという人がいるんですけど、だって本当に百人も自分の本当の友達なのかと思ったら、そうではないと思うのです。本当の友達は、1人いれば幸せという感じなんです。私には幸い、ありがたく友達がいるんですね。パラグアイの。日本に戻って5年間たちますし、それでも友達と離れて、毎回手紙とか返しますし、私の全てを知っている人だし、私のことを心配したり、こうしなさいとか言うし、友達は1人いれば幸せで、知り合いは沢山いると思うんですが……。友達というのは本当に宝物だと思います。

【司会】本当の親友が友達ってことですね。

【生地】それぞれ、友達の解釈が違うと思います。今私が思うことは、自立しなければいけない。でも、自立してなくても、何年間も一緒に世の中を生きていくわけだから、自立しろ自立しろとすべて一人でなんでもしなければいけないというより友達と一緒にすることが大切だと思います。

【司会】友達を大事にしているってことですね。

【酒井】私は秋田出身で、今こうやって綺麗に東京の山の手言葉を話していますが、私の小学校の校長先生は元日本帝国陸軍の軍隊の人で、「国のお偉いさんや日本全国からいろんなきれいな言葉を喋る人が来るんだから君たちは今日から秋田弁を喋るな」と言われたことを覚えています。「汚いズーズー弁を喋るな。それは通じない。」それで何をやったかという、その校長先生は、男の子なら「・・・君」女の子なら「・・・さん」。ちっちゃい学校でしたけど、少しでも喋るとどうなるかという、座らせられるんです。校長室の前に。「お前やっただろう」という感じで。その校長先生のお陰で全員がきれいな山の手言葉というか、校長先生の生まれた東京の言葉を全員が喋れるようになった。だから、誰もズーズー弁で悩むこともなかったし、東京へ出てきていきなり方言がでないから、「本当に秋田の方？ 秋田ってズーズー弁でしょ？」、なんとなく東北人に対する蔑視みたいなものを感じて非常に嫌な思いをしたことがあります。

でも、きれいな言葉をしゃべれて女子大へ入って、いろいろなお友達ができたのは非常にありがたいと思いました。苦労しなかったのは校長先生のお陰かなと思っているんですが、一方で私の周りに何がおこっているかという、地元の言葉を喋れない人が増えちゃったんです。何かをやるときは何かを失うのだ、ということも頭の中に入れておかなきゃいけないし、それから英語を喋るだけでなく、書くということはパソコンでもインターネットでも相手に通じることだから、息子に力を入れたいなと思います。以上です。

【司会】残り僅かになってきましたが、いま感じられたことがありましたらどうぞ。

【大森】都立農産高校の大森です。英語ってどうやって勉強するんですか？

【新宅】教育は少し変わったのでよくわかりませんが、5年前は、中学校3年生から皆がやってるように、そういうのを勉強していたんですが、私は、その前にアメリカンスクールに毎週土曜日、5時から行っていたので、日本に来て中学校に入ったときには英語を勉強してコミュニケーションを取っていたんです。日本語はぜんぜん話せなかったし、ということは先生に言葉を話せない。ということは、自分の言いたいことは言えない。それを言えるまでになる日本語の授業はなかったの、テストは英語でコミュニケーションしたし、パラグワイは基本的に学校で英語を勉強する。いまは英語、英語と言ってますけど、世界で英語を話さない人もたくさんあると思います。パラグワイでは英語で「ここに～がありますか」と言っても通じません。日本はそれと比べて恵まれていると思います。

【司会】サンプソンさんは、何かサッカーを通じて学ばれたことはありますか？

【サンプソン】自信です。何でも、自信がないとできない。サッカーの試合の時、何万人もの声が耳に入るね。

【司会】小さいときから一流じゃないですね。子ども達に何かを教えたいですね。

【サンプソン】何故勉強しないといけなとか、どんなものでもルールがあるとか、基本的なルールを学ぶことが大切。遊びでサッカーしても、どうやったらヘディングでいいシュートができるかとか.....。

【司会】日本の子どもにサッカーは教えにくかったですか？

【サンプソン】日本は子供の頃から野球やっているでしょ。肩の力とかサッカーは体全体使うでしょ。柔らかくないと駄目なんです。

【司会】国際交流でコミュニケーションをとるときの難しさは何でしょうか。そういうときがあればという経験で結構ですが。

【佐藤】コミュニケーションですよ。やっぱり相手のことを考えながらとるのかなと思うけど、

とにかく、コミュニケーションをしたいということは、自分のことを相手にわかってもらいたい。でもそうしたときに相手のこともわかってもらう。だから相手に向かって自分の考えを伝えられたらいいと思うんです。日本にいるときは、別に友達などに話すときにはすごく簡単に自分の意見を伝えられるし、自分の意見を強く主張してもわかってくれると思う。初対面の人とか海外に行ったときに英語で話されると何を言ってるかわからなから。当たり前ですけど、やっぱり文化の違いや考え方の違いがあって、相手のことがわからないから、お互いに自分たちの国が違う、文化が違うというのが分かっているなら、ちょっときついことを言って傷つけたとしても、それを修復しようと努力すればコミュニケーションできると思うし、ただ自分から相手のことをわかってほしいし、相手にも自分のことをわかってもらおうとして自分の意見を伝えないとコミュニケーションをとれないと思うし、やはり一番大事なのは、相手の立場にたって考えられることだと思います。

【司会】ありがとうございます。コミュニケーションをとるときも相手の立場にたっていけばという意見です。ほかに誰かどうでしょう。

【須山】私はコミュニケーションをとりたい原動力というのは、相手のことを知りたいとか、知らないことを見てみたいとか、相手を書いてくれたものを読みたいとか、そういう具体的な動機とか、「この人、目の前にいる人の言葉よくわからないけどよくわかりたい。」というのがきっかけで英語とフランス語の勉強をしました。高校生のときにカナダに行ったのですが、そのとき、すごく感じたのは、日本人の友達にどんなに真顔で一所懸命説明してもぜんぜんわかってくれなかったことが、一所懸命説明したら自分の持っている夢とか希望とか理解してくれて応援してくれたのです。世界のどこかに私のことをもっとわかってくれる人がいるかもしれない、と思いました。あともう一つ、大人になって、英語やフランス語をやりたいと思っててもチャンスがない。小さいころから外国のことにすごく興味があって、本当はもっと早くからフランス語がやりたかったんですけど、中学校で教えてないし、公立の高等学校で教えてなかったのでチャンスなかった。それで大学生になって思ったことは、例えばフランス語の動詞の活用を中学生のときにやっていたらもっと楽だったなと思いました。

覚えるだけだから10歳でも12歳でも15歳でもできる。でもチャンスがないから私は18歳から中学の英語のようなところをちょっとフランス語で始めて覚えるのが遅くて苦労したかな。だけどチャンスがあればもっといろんなことができたんじゃないかなと思います。英語だけでなく、いろんな言葉を学ぶチャンスとかいろんな外国の人に触れるチャンスをもっと高校生の人にも、大人も含めてチャンスをあげてほしいなと思ってます。

【司会】昔に比べればチャンスはありますよね、今の高校生は。

【吉野】八王子高陵高校所属の吉野と申します。先ほど、小さいうちから外国の方ともいろいろお付き合いをしたほうがいいというご意見がでしたが、私が思うには国内でもいろいろの方がいらっしゃるでしょう。そのうち私はあまり勉強しないほうですが、なぜか私の友人はよく勉強したいと思ってるし、ですから外国の方と付き合うのも大切ですが、小さいうちから母国内のいろんな方と付き合い、「ああ、こういう価値観があるんだな」とか「こんな考えの人がいるんだな」とかそういうことを学んでいくことも大切だと思います。

【司会】はい、ありがとうございます。外国とか日本人とかこだわらず、たくさんの人と触れ合うのは大事だと思います。時間もだいぶ経ってしまいました。もうこれで最後になるかもしれません。

【生地】コミュニケーションは言葉ができればいいにきまっている。ただそうすると気が重くなっちゃう人がいると思うんです。きっかけはどんなものでもいいんじゃないかと思いました。もう1

つはコミュニケーションのきっかけは道具を借りてもいいのかなと思いました。

【竹山】都立芝商業高校の竹山です。途中抜けていたので、頓珍漢かもしれませんが、昨日話したパラオの件で言うと、去年の夏に一番最初に事前勉強会で会ったときには中学生だったんですが、ほとんど英語ができなかった子がいて、パラオに行くときもすごく心配だったんです。ところが1週間して帰ってきて、2泊3日のホームステイしたら、すごくたくましくなって帰ってきて、「コミュニケーションがとれたか」と聞いたら「大丈夫、パラオ語も大丈夫。問題ない」と本人も言うんです。けして彼らは英語はうまくなってないんです。だけど2泊3日は、とにかく彼らは十分に楽しんできたし、何らかの形でコミュニケーションはとってきているんです。

あともう一つの例でいうと、山形の農家のおばあちゃんの話なんですけど、孫が東京にいます。孫が帰省してきても、ほとんど共通の話題がない。でも日本語なんです。だけどその家が、あるきっかけで、タイからの短期留学生を受け入れ、そのタイの人は向こうで稲作をしています。そのおばあちゃん家も米作農家です。おばあちゃんは日本語しかできない。タイの短期留学をしてきた女の子も片言の日本語しかできない。夏休みだったと思うんですけど一緒に畑仕事をして一週間くらい暮らしていて「孫と話すより、こんなに楽しいことはない。孫と会話はできないけれど、タイから来た女の子とこんなに楽しいコミュニケーションがとれるんだ」といった記事を読んだことがあって、異文化というのは何だろうかと頭の中に引っかかってずーと考えております。

【司会】わかりました。そろそろ時間でございますが。

【笠原】茨城県の笠原でございます。サンプソンさんが最初におっしゃったことで、日本では可愛い子には旅をさせということわざがあるんですけど、お母さんは子供を育てる上でよそへ預けると言っていましたね。目に入れても痛くないと思うんですけど、やっぱり親元に行ったら、しっかり厳しく躾られないから預けるんですか？

【サンプソン】自分のことが自分でできるようにするために預けてるんです。寮に行くのもある。

【笠原】それは習慣としてあるんですか？

【サンプソン】各家庭で外へ預けるといのは、わりに一般的に習慣としてこんなに小さいとき、例えば6歳とか7歳からやってるんです。

【笠原】いいシステムだなあと。道徳教育をどうしていいかわからないときに、(サンプソンさんは)いきなり「先生を見なさい。親を見なさい」とおっしゃった。(シンポジウムにて) それは嫌味で言ったんですか？

【一同】笑い

【サンプソン】一番早いのは、先生の真似をすればいい。先生達はしっかりしているから。

【竹山】ガーナは全寮制ですか。いい生徒が集まるんでしょうか。

【サンプソン】ただの学校なので補足すると、いわゆる親が行かせたい学校は、ほとんど寮があるんです。名門校や伝統校といわれる学校はほとんど全寮制です。寮がある学校のほうがより生徒がたくさん集まってきます。

【新宅】終わる前に言いたいことがあります。皆が、異文化、外国人、英語、外国語、いろいろな質問について話していると思うんですが、私からみれば、人それぞれひとり一人が異文化であって、自分のことをはっきりわかるといっても私はわたしのことわかるといってもわからないんじゃないですか。だって夢は何、人間は何と疑問を持ちつつ生きていると思うんです。

皆に伝えたいことは、ひとり一人が違うし、ひとり一人が、日本人だから、外国人だからとこだわらずに人間として何をすべきか、何を考えるべきか、これが常識と思っていると常識ではないという場合があるので。

【司会】ありがとうございます。最後に水元高校の塩崎先生、講評をお願いします。

【塩崎】水元高校の塩崎でございます。いろんなご意見を伺って、非常に楽しく伺いました。特に英語教育を早期にやるか、あるいは日本語を確立してやるかという議論はもう日本の国内的な議論で、私の個人的な見解を言えば、やはり日本語をかためるのが先決だと思います。特に国際化が進展してグローバルイゼーションということで、ますます必要だと思います。バイオリンはバイオリンであるゆえ貴重なんですね。フルートはフルートであるがゆえに貴重なんです。これがそれぞれ特色があるからオーケストラになる。これがバイオリンがバイオリンであることを嫌って、ピアノがピアノであることを嫌って、オーケストラのような音を一発で出せるような楽器が発明できれば便利だなと思うかもしれませんが、そんな楽器がたとえできたとしても誰も見向きもしない。国際化が進展すれば進展するほどますますローカルなものが大切になるということではないでしょうか。

【司会】どうもご協力ありがとうございました。

#### <分科会風景>

写真3 1

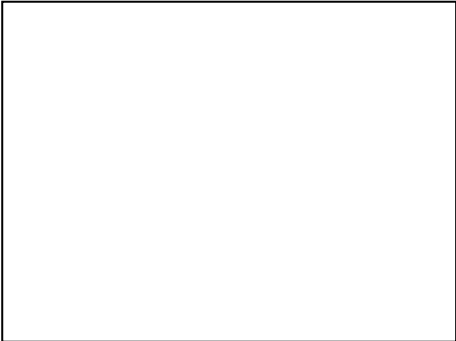


写真3 2

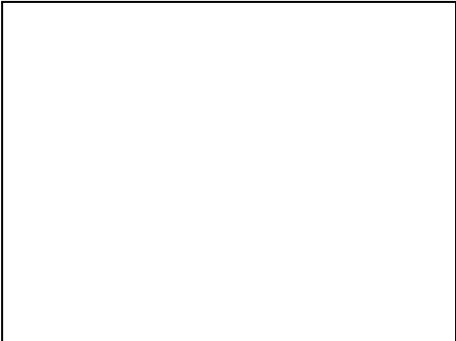
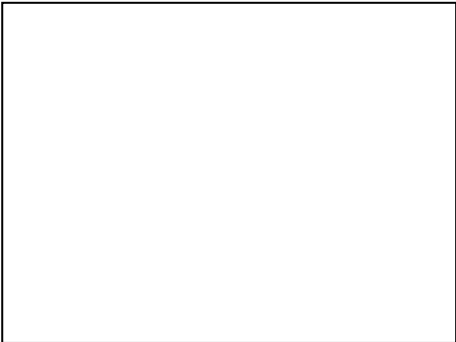


写真3 3



## 7 閉会式

(1) 開式の言葉 大会副会長 神奈川県立白山高等学校長 野村 武  
第39回になる全国高等学校国際教育研究大会東京大会は、大変内容のある、また、しっかりした研修大会となりました。これも、参加された先生方、高校生諸君、そして、たくさんの方々の積極的な参加、ご発言によることかと思えます。ただ今より、東京大会の閉会式を始めます。

(2) 主催者のあいさつ 大会会長 東京都立農産高等学校長 上松 信義  
今大会のテーマは、「変化する社会に対応する国際教育を目指して」というものでしたが、その内容が、2日目の午前中に結集したのだと思えました。主催者としては、2日目の午前中がどのように終わることができるかがとても心配でした。高校生や大学生、教師の方々など、いろいろな方がいらして、そして、いちばん最後に感想を述べた校長先生が、とても新鮮な経験になったという話をしていました。このように、非常に新鮮で、おもしろかったという感想が出てくるということは、今日の試みが成功だったということだと思えます。特に、高校生の人たちの積極的な発言が出たのは、とても刺激的でしたし、そういう場を提供できたのは、とても良かったと思えます。このように、今回は、まずまずの成果を上げて終わることができたと思えます。至らぬ点、不行き届きの点などがあれば、お許しいただければと思えます。

(3) 次期開催県挨拶

熊本県事務局長 榊 定信

写真34

第40回という節目の大会を熊本で開催することになりました。責任の重大さを感じています。今回の大会が、新しい風が吹いてきた大会であるという気がしました。熊本の大会をどうするかを考えていましたが、原点を振り返るような、ひとつのコンセプトを作っていきたいと思えます。そして、今回、東京大会で示されたものをどう受け継いでいくかを考え、九州地区の方々と一緒に大会を作っていきたいと思えます。熊本で待っていますので、ぜひ、よろしくお願い致します。

(4) 閉会の言葉 大会副会長 野村 武  
第39回、全国高等学校国際教育研究大会 東京大会を終了します。

## 大会参加者の感想

### 第39回全国高等学校国際教育研究大会・東京大会に参加して

静岡県立三島北高等学校 3年 広田愛

私は、第22回高校生英語弁論大会で外務大臣賞をいただいた以上に、この全国国際教育研究大会に参加できた事を嬉しく思っています。

私はかねてから、各ブロック代表の人たちのスピーチを聞ける事を楽しみにしていました。大学では社会学を専攻しようと考えている私にとって、門脇厚司先生のお話はとても興味深いものでした。

大会の2日目は、事前に申し込む際、参加しようかどうか迷ったのですが、実際参加してみて、とても嬉しく思いました。トルコやトンガ、ガーナの人たちのお話もとても興味深く、また、こういう方々が日本にいる事を知って驚きました。グループ討論では、学校での授業の事、いじめの事、家庭の事など様々な事にまで話し合いが及び、とても勉強になりました。最後に日本にきている留学生が、「もっとたくさんの日本人が、生きる大変さや厳しさを知ることのできる体験してほしい。少し自分を辛い目に合わせて、成長するような人が、これからもっと増えていけば良いと思う。」というような事を言ったのが、とても印象的でした。

大学生や留学生から高校の校長先生まで含めて、一緒に話し合いを持てる場というのはほとんどないので、このような機会はもっと増やしたら良いと思います。そしてこのような討論の場を、学校でも是非、作ってほしいと思いました。このような研究大会に参加できるチャンスを与えられた事を感謝しています。

東京都立成瀬高等学校 3年 荒井彩奈

第22回高校生英語弁論大会に、東京都の代表として参加して、とても貴重な体験をすることができました。ありがとうございました。

私はこのたび、大学の自己推薦入学試験に挑戦することにしました。大学に送る資料として、この第39回全国高等学校国際教育研究大会のプログラムをぜひ送りたいので、1部分けていただけないでしょうか。

私はこの英語弁論大会の原稿を書くために色々な事を考えました。考えているうちに自分自身が今まで何をしていたか、これから私は何をしたいのか、など自分を見つめなおすきっかけになりました。そして色々な国の人たちの話も生で聞けて、話すこともでき私は自分の中で将来の道が一瞬見えた気がします。この機会を私に与えてくれた人たち（主催してくださった方々、先生方、応援してくれた友達、大会の手伝いをしてくれた生徒たち）に感謝しています。どうも、ありがとうございました。

高知県立高知南高等学校 3年 角田理佳

私はこの研究大会に参加して、日本の国際教育のあり方について大勢の先生方などがこのような協議会を開催していることを知り、とても素晴らしいことだと思いました。また日本も、世界に向けて広く援助しているし、たくさんの方が国際交流に携っていることを知りました。

これからますます、このような援助は必要になってきます。私は、この大会に参加するまでは考えが狭くて、私一人が動いても何も起こらないのではないと思っていました。しかし、私にも何かできるはず、誰かの役に立ちたいと思えるようになりました。世界で起きている民族紛争や内戦など様々な問題を、これから学んでいきたいです。そして、それを将来の仕事に役立てていきたいと思います。

この大会に参加できて本当によかったです。どうもありがとうございました。

福井県立福井商業高等学校 3年 田中ゆか

大会1日目、私は弁論大会に出場しました。他校生徒のレベルの高さに驚きを隠せませんでした。私としては、今まで練習してきた成果を十分に発揮できたと思っています。また、他のスピーチを聞くことによって、様々な意見を得たり、上手なスピーチの仕方を学んだりすることができたので、とても良い経験になりました。

大会2日目は、シンポジウム「世界から見た日本の学校・教育」に参加しました。将来、「教諭」という職業に就きたいと思っている私にとって、シンポジウムのテーマはとても興味のあるもので、内容もとてもためになるものでした。日本の教育環境などについて、私たち日本人が自ら気付くことが出来ないことを、トルコ、トンガ、ガーナ出身のパネリストの彼らはとても分かりやすく教えて下さいました。

また、グループに分かれての討論では、さらに詳しく話を聞くことが出来て、とてもおもしろかったです。緊張しましたが、自分の意見を発表する事も出来ました。高校生、大学生、留学生、高校の先生、校長先生など、普通なら考えられない幅広い世代の人々とお互いに意見を交換し合うという素晴らしい機会でした。

このように、この大会に参加することによって、様々な役立つ意見や考えを聞くことが出来ました。私自身の知識も増え、夏休みの大きな収穫となりました。この大会に2日間参加できたことを、本当に光栄に思います。

中央大学総合政策学部 4年 高田雅子

私は、初めてこの大会に参加させていただいたのですが、この国際教育に関する研究大会は大変興味深く、また高校生や教員にとって、お互いの意見を交換し、日本の教育を見直すという事ができ、大変有意義なものであると感じました。

2日間にわたって行われた東京大会の初日は、午後から筑波大学教育学系の門脇厚司教授の「多難な時代を生きる力と国際教育」をテーマとした講演会を拝聴しましたが、この中で、門脇教授は、現代の若者がより良い社会で生きるためには「社会力」が重要であると強調していらっしゃいました。

た。社会力とは、社会を自分たちでより良く変えていく力を意味するそうです。「社会へ関心を投げかけ、自分はその社会でどう貢献できるのかを考える。そのためには、まず身近にいる他人に関心・愛着・信頼感を持つことが第一歩である、なぜなら社会の実体は人間なのだから。」とおっしゃっていました。私はこれを聞き、これからさらに国際化していく社会で、人と人がお互いを理解し、共存・協力して、様々な問題を解決していく為に、自ら考え自ら学ぶ力・社会力を国際教育を通して若者の中に育てていく必要性を強く実感いたしました。

2日目は「世界から見た日本の学校・教育」というテーマで、トルコ・トンガ・ガーナから各国一人ずつ、日本に長く住んでいらっしゃる方々がパネリストとして招かれ、パネルディスカッションが行われました。その後、日本の高校生・教員が加わり、3つの分科会に分かれ、それぞれ日本の学校教育に対する理解を深めました。

私は、来日22年のトンガの山賀ペリンダさんの「日本の教育は、学校でも家庭でも甘くなってきた。」という意見に共感したので、トンガと比較した日本教育のディスカッションに参加することにしました。ペリンダさんは、90%がクリスチャンであるトンガでは、子供は親に従い、目上の人や先生に敬意を払うとおっしゃっていました。子供を甘やかさない、実践させて覚えさせることが子供の為になるという教育だそうです。

確かに日本は、物質的、経済的に豊かになり、多くの親が子供になんでも欲しいものを与えることが出来るようになりました。しかし、子供達は我慢・辛抱が出来なくなり、他人への関心が薄れてきているように感じます。学校でも、生徒をよく把握していなかったり、悪い事をした生徒を厳しく叱らなかったりする教師は多いように感じます。それでは門脇教授の主張するこれからの時代に必要な社会力は築けません。

やはり子供は親や教師、身近にいる大人などの影響を強く受けて育ちます。子供にしっかりと社会力を教育する為には、まず大人の意識改革が必要だと思います。親と教師は協力をし合い、子供を甘やかしすぎず、厳しく躾け、子供と真剣に向かい合って、これからの社会で何が本当に必要なのかを教えていくべきであると思います。

大会の後、生徒・他県の先生の参加も含めて、代々木上原にあるトルコ共和国のイスラム教モスク(東京ジャーミイ)に出かけました。午前中参加されたトルコ語講師、ドウイグさんも同行し、また説明には、日本で博士号をとられた流暢な日本語を話すセリムさんが1時間以上にわたって、このモスクとイスラム教の説明をしてくださいました。この東京ジャーミイは、ロシア革命のあと、ロシアに在住していたトルコ人が満州を経て、東京に定住する事になった際、はじめは学校を開く目的でこの地に建設され、同時に礼拝の場所として使用されてきました。以来ずっとこの地で使用されてきましたが、1986年老朽化したため、取り壊しになり、その後建設基金が設立し、2000年に再建されました。

いたるところに大理石や象眼細工の装飾がある1階は、トルコブルーの鮮やかなイスラム建築特有の幾何模様と植物そしてアラビア文字で飾られた博物館と集会所になっており、近くの住民にも開放されています。2階は礼拝所。手を洗い、靴を脱ぎ女性はかぶり物をして、入りました。ドームをはじめとしてあらゆるところに、クルアールーンの言葉がかかれています。メッカの方向にはくぼまった場所があり、照明器具が置かれています。また金曜日に使用される朗詠台やクルアールーン(コーラン)を保存する台があり、中は高いドームになっていて、一部中2階になっており、そこは女性が礼拝する場所になっています。ジャーミイとは、集会所と言う意味です。

礼拝は一日5回。日の出前、正午、午後、日没、夜。なるべく共同で行うことが勧められていますが、ひとりひとりでも清潔な所であれば、どんな場所でおこなってもいいことになっています。なぜイスラムでは、礼拝の時に女性はかぶり物をしたり、男女近くに座らないか?それは、礼拝に集中するためなのです。メインドームに書かれている、このような言葉が記されています。

クルアールーン第112章「純正」

慈悲あまねく慈愛ふかくアッラーの御名において、

- 1 言え「彼はアッラー唯一なる御方であられる。
- 2 アッラーは自存され
- 3 産みも産まれもせず、
4. かれに比べ得る何ものもない。

この教えに従いイスラム教徒は礼拝を行います。当日説明が終わる頃はちょうど午後の礼拝がはじまる時間にさしかかり、どこからか礼拝をするひとがあつまってきて、見学者の私たち一行も希望があるなら、参加できるとのことでした。何人かの方はそちらにも参加されました。

大会のあとちょうどシンポジウムにトルコの方出席されていたこともありますが、日本はまだイスラムの世界は遠いと言う印象があるだけに、この機会にモスクを見学できたのはよかったのではないかと思います。

セリムさんはもっと日本の人にトルコやイスラムのことを知ってほしいと言われていたことが心に残っています。

<東京ジャーミイ見学風景>

写真35

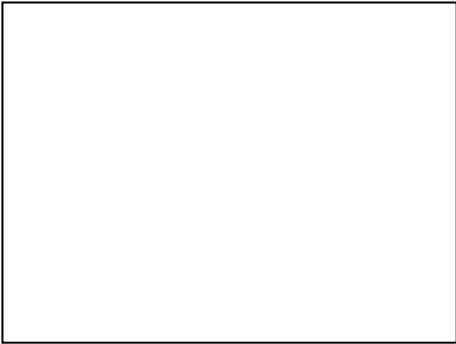


写真36

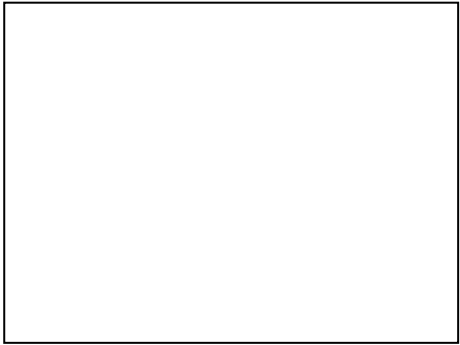
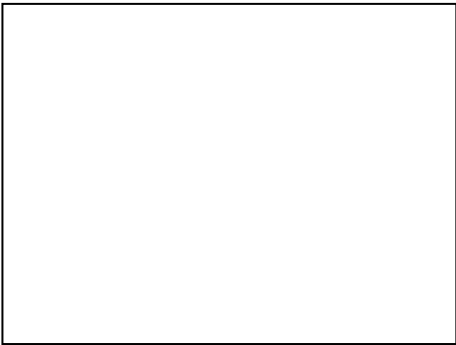


写真37



## 編集後記

第39回全国高等学校国際教育研究大会・東京大会の報告書をここにお届けいたします。まずは、完成が大幅に遅れましたことを、謹んでお詫び申し上げます。

急きょ東京での開催が決定し、実質的な準備期間が一年不足という条件下で、何とかここまで来ることができましたのも、多くの皆様からのご指導及びご協力の賜と、厚く御礼申し上げます。また、当日ご参加いただきました皆様へも、改めて感謝申し上げます。

この報告書が、今後の国際教育の実践に生かされ、各都道府県研究会のますますの発展の一助となることを祈念いたします。なお、内容等のお問い合わせにつきましては、大会事務局までご一報いただければ幸いです。

来年度、熊本で皆様にお会いできますことを、楽しみにいたしております。

### 第39回全国高等学校国際教育研究大会 東京大会

#### 大会報告書

平成15年1月

発行者 全国高等学校国際教育研究協議会  
会長 上松信義（東京都立農産高等学校長）

編集 大会事務局 東京都立芝商業高校  
東京都高等学校国際教育研究協議会  
事務局長 竹山哲司  
〒105-0022 東京都港区海岸1-8-25  
TEL 03-3431-0760 FAX 03-3435-0240  
ホームページ <http://www.kokusaiken.com>  
電子メール [webinfo@kokusaiken.com](mailto:webinfo@kokusaiken.com)

印刷所 社会福祉法人東京コロニー  
〒165-0023  
東京都中野区江原町2-6-2  
TEL 03-3953-3536 FAX 03-3951-9163